『月色の眼球』

園崎

若草朱音(わかくさあかね)のし

しらないことはひらたくみえます
すてきなしろを見たことがありますか
かぞくの温かみを知ったことがありました
ただのじゅうぞくでしたけれど
どくどくと流れるちを飲ませたこと
とても綺麗な星が広がっていた日
ひが恐ろしかったのです
すべてを見通す眼をもつ善
全部繋がる銀の十字
時空はついにゆがみ
みたくなかった隙間を覗いたとき
吸血鬼は夢を見ますし
知ることは、よく見ることでした。

○

コネクト　サクセスフリー
プロトコル　承認
ようこそ
一件のお知らせがあります。
再生
自動翻訳システム起動

『おっと、できた。初めての経験なので、ドキドキです。』
『それにしても、インターネット空間ってなんてさびしいところなんだろう。私だったら、もっと素敵な場所にするんだけど。』
『あ、新人さん？　自己紹介しましょうか？　してほしくない？　まあ、これから流すビデオで十分伝わると思うよ。』
『このドキュメントは十年前に日本で起きた事件の記録だ。』
『真実を見つけ、真実から目を背けるための墓標なのだ。』
『人生は感情に満ちている。人間であるためには、論理だけで動く機械であってはならない。あまり合理的に考えすぎると、やがて家族や友人、愛する人を失ってしまう。』
『しかし、気をつけていても簡単なことばかりではない。逃げ出したくなることもあるだろう。』
『だからこそ、私たちは他人の人生を見つめる方法を開発したのです。わかりますか？　この意味がわかりますか？』
『他人の人生は、本当にあなたの人生と関係があるのでしょうか？　ええ、もちろんです。』
『信じられない？　信じる必要はない。もうすぐあなたの世界と私の世界がつながるのだから。』

一

舞台は雨の夜。二人の人型宇宙人が、カフェテリアのパラソルの下で向かい合っている。傍目には通常の人間と見分けがつかない。一方は人間の男、もう一方は人間の女と同じ姿をしていた。小ぶりな雨がパラソルに打ち付け、特異な雑音を形成する。
男の指先に触れている艶やかな樹脂の表面が光沢によって風景を反射していた。その中に男自身の顔も映る。死人のように青ざめている。
堀の深い顔の男女が、お互いを見つめ合っていた。その口から紡ぎだされた言葉は、次のような意味を表していた。
「君もここを見つけ出したんだね。もう僕しかいないかと思ってた」
「あなたも？　私もそう。でも人間はみな死んだわ。私たちみたいな化け物しか、もういない」
沈黙、切り替え。
「人間って本当に脆いのね、本当に血がなくなれば死ぬ。内臓が傷ついただけでも死ぬ。これでは命がいくつあっても寿命のうちに千回は死ねそうだわ」
「人間はどんな風に死んだんだい？」

「私が見たのだと、紛争地でハチの巣かガラス細工にされたのがたくさん。それと、地雷で足が無くなったのが何十人か」
「なんてことを言うんだ。気分が悪くなってきたよ。人間と僕らのアナロジーは知っているだろう？」
「聞いたのはあなたよ」
女は煙草を咥え、黙り込んだ。男はその間何もしていない。指先に触れている鈍色の物体をただぼんやりと眺めているだけだった。
女が煙を吐き出す音と、雨が打ち付ける音だけが場を支配している。男は昔の軍隊のようなくすんだ黒色のスーツのポケットから煙草を取り出し、口に咥えて火をつけた。女は吸い殻を地面に投げ捨てた。
アップ。死骸を冒涜するかのような水滴の乱打。
切り替え。
それでもまだ絵面は変わらない。二人はそれぞれ、別のことを考えている。男は上手な嘘のつき方を。女は上手な死に方を。それは表情からわかる。なぜなら、二人とも演技がうまいからだ。
「演技ってあるじゃない」女が沈黙を打ち破る。「芝居だとか、ステージだとか、映画だとかの。嘘を嘘で塗り固めて、客も嘘を楽しむやつ。人間が好んで見ていたらしいけど、私もあれを見てみたの。そしたらすごく面白くって、なんで人間って弱いのに面白いものを作れるんだろうって疑問が湧いたのよ」
「そうなんだ」男は興味がなさそうに答える。「答えは出たかい」
「例えば」女はもったいぶっていった。「強い人間がいたとするわね。要するに、故郷が爆撃されようと、親が死のうと、微塵も動揺しないで任務を遂行できるような軍人とか、そんな人」
「まるで僕らみたいだ」
アウト・フォーカス。
「そういう人たちは、感情が抑制されているのよ。だって、感情の動き一つで自分の命が危険に晒されたらたまったものじゃないでしょう」
「確かにそうだ。戦争に負けないように、心の動きをロックするワクチンを使用していたという記録も残っているからね」
「そう。だから、わざわざ嘘を用いて作品を作る理由というのは、他人の感情を揺さぶるためなのよ。感情の動かない人間には嘘はいらない。逆に、弱い人間は嘘を愛すことができる」
「合理的な理屈だ。でも、人工的な感動だね」
「どういうことかしら？」
「昔の人は、月明りを見て歌を詠んだり、太陽を信仰していたらしいよ。それって、人間が作り出した嘘という範疇には入らない」
「月明り……月は光っていないわ。ただの地面よ」
「このアースって星から見たら月は輝いていたのさ。僕らが見ている空はずっと雨が降っているけれど、雲が無くなれば、僕らの住む月が、輝いて見えるはずだよ」
「ああ、月から見えるアースが輝いているのと同じ原理なのね」
「そうさ。それに、スーパームーンっていって、いつもより大きい満月が見られたりもしたらしいんだ」
「それって、スーパーアースみたいなもの？」
「そう。アースと月と太陽の位置関係によって大きく見える。月と違うのは、アースでは海があることかな」
「どういうこと？」

「天体の位置関係によって、海があっちへ行ったり、こっちへ行ったりする。だから、海沿いに家を建てるには、沈まないように気を付けないといけない」
笑う女。
「たかが天体現象のくせに、人間ってそんなのに左右されるのね。でも、素敵な虚構」
切り替え。男のアップが映る。そして、女に戻る。
「弱い人間は虚構を愛すことができる、という結論に修正するわ」
「素敵な結論だ」
「私たちの頭の固い上司には絶対に理解できない発見だわ。お友達に教えてあげましょ」
女は立ち上がって、パラソルの外に出る。濡れるのもかまわず踊り始めた。身体を回転させて、奇妙な足のリズムで水音を鳴らす。
――そういえば昔の映画に似たようなシーンがあったと思う。たしかあれは、愛の告白に成功した男性が、大雨の中軽やかなステップを踏んでいたな。
男は困り顔だ。いつだって女は気が狂っている、そう言いたげな表情である。女の顔がアップになる。こちらに語り掛けるような視線。
――その時、モニタの右下にポップアウトがあった。心臓が高鳴り、着信音が耳に響いた。
相手は明(はる)だった。
秋野水姫(あきのみずき)は映画を停止して、コンピュータの画面から目を離した。通話に出るのをためらいながら、マウスカーソルを応答ボタンに合わせる。
水姫は通話が嫌いだ。相手の顔色を窺えない不安と、自分が虚空に向かって話しているという虚しさ、そして、面と向かって話すのとは違う微妙な雰囲気。それらがどうしても好きになれず、結果、通話に出るのをためらいがちになるのである。
三秒間のうちに思考を通話向けに切り替えて応答ボタンをクリックした。
『やあ』実物よりも角ばった声。
「明、どうしたの？」
『今、あの海岸にいるんだ。満月がきれいだ。見に来てくれよ』
「月？」
『そう。場所はわかるだろう……。それじゃあ』
通話が一方的に切られる。自分の発した言葉はすでに空間に溶け込んでしまい、残っているのはコンピュータ廃熱用のファンの低い唸り声だけなのだった。別に家の窓からでも月は見られる。それにまだ映画を見ている途中だ。なにより、外に出るのは億劫だ。
でも――。
水姫は目の奥が鈍く痛むのを感じた。最近オンラインの医療サービスで眼精疲労だと診断されたばかりだった。やはり時代遅れの非接触型コネクトマシンでは、巷で言われているような身体的健康は厳しいということだろうか。
水姫は桃色の上着を着て、何も持たずに家の玄関を開けた。
生暖かい空気が湿気を孕んで水姫の身体にまとわりつく。この間寒さがようやく落ちついてきたと思ったら、すぐに熱気の季節だ。

おまけに雨が多い。日本の梅雨は、映画のようにさわやかではない。しかし、風を受けると鳥肌が立つくらいには冷たさもあった。それなのに近くの草木からはジージーと虫がなく声がする。どっちつかずの季節は嫌いだ。

水姫は汗ばむことも嫌いだった。でも、その日は急ぎたい気分だった。水姫は一度も空を見上げずに砂浜へ向かうことに決めた。

周囲は明るく、街灯が無くても十分見えた。海岸へ向かう途中に、人の寄り付かなくなった公園や路地、寂れた歩道橋、見晴らしのいい小道などがある。水姫はこういった場所で遊んだことは一度もない。同世代の人達は皆そうだ。市の中心部ではこのごろ開発が進み、白く無機質な背の高い建物やきらびやかなネオン街が明らかに増えた。しかし、中心から外れた土地には、まだ前時代的な名残がある。

――走ったのは何日ぶりだろう。

いまや水姫の息は切れ切れになり、自分の出不精さを呪った。

もはや人の影はどこにもなく、開発の遅れた寂れた街を、水姫は駆けていた。

薄暗い小道を抜けていく。気味が悪い。頭上では木々が風に揺られ、ざわめいている。

ようやく視界が開けてくる。木々のざわめきよりも、さざ波の細かい音の方がより支配的になる。体感的には家を出てから十分程度。それでも身体は疲れている。

海面は、神岡明（かみおかあきら）の白くなまめかしい足首を飲み込んでいる。

そこでようやく顔を上げた。青白い光を放つ真円が、水平線の向こうから明の姿を照らしている。明るいのに星々は見えた。都市の明るさではここまで見えない。優しい光だ。

「こんばんは、明」

「やあ、こんばんは、水姫」

神岡明はこちらを振り向いて言った。

風に揺られているのは木々だけではない。生暖かい気圧の流れは、水面と二人の少女の髪をなでるように移動していく。

白のワンピースを纏った明は、月光を乱反射してぼんやりと発光している。

水姫は明の横に並んだ。横顔を見る。少し中性的な顔立ちをしている。前髪は曲率半径四センチくらいの柔らかみがある。鼻筋は少し高く上品だ。まつ毛は反っていて……。

そこで水姫は違和感を覚えた。いつもと顔の雰囲気が違うのだ。それはおそらく明の眼にあった。水晶体の表面に、青白い点が映る。目じりから、頬にかけてうっすらと白い筋が見えた。少し距離をとれば見えなくなってしまうような淡い模様のようである。

「水姫はさ、さっきなにしてた」まっすぐ海の方を見ながら明が言う。

「さっき……」通話がかかってきたときのことだろう。「映画みてたんだ」

「映画？　なんの」

「『Initial Experience Rain』っていうタイトルの、外国の映画。ＳＦ映画だよ」

「イニ……、なんだって？」

明は再び水姫を向いた。聞き取れなくて返しに困っているようだった。よくわからないタイトルのものを選んでよかった、と思う自分と、もう少しわかりやすいのを選ぶべきだったかな、と思う自分

がいることを水姫は自覚した。こういう感覚はよくあった。コミュニケーションが下手だと自責するのも、もう慣れたものだ。
「まあ、あんまりおもしろくないんだけどね。退屈で」
「退屈なのって大事だよ」
明は数歩下がって海から離れ、砂浜に座り込んだ。水姫もそれに倣って腰を下ろす。
「そうなんだ、なんで？」
「目をつむったときに、何が思い浮かぶ？」
「うーん、なんだろうな。自分の悩みとか不安？」
「退屈な映画を見てるときって、それと同じ状態」
「ああ、そう……」
「そして……」明は穏やかに目をつむる。「いま、この状況も、同じだ」
それきり二人の間に会話はなくなった。水姫は決して明を見なかった。今日はただ、視界を閉ざして周囲の環境に溶け込むだけでいいのだ。
生ぬるい感覚が身を包む。さざ波が耳の中で反響する。そんな中、心の奥底からむらむらと湧いてくる馴染み深い感覚にも意識が伸びてくる。
退屈な状況は、つまり鏡だ。
退屈な映画はそういうものなのだ。
満月が、
海面が、
自分が
鏡のように自分を映す。
空気は生ぬるいのに、身体は暑い。
いつの間にか汗ばんでいる。
いつの間にか意識が連続ではなくなってくる。
いつの間にか、
右隣りから聞こえてくる、
安らかな、
流入、
祝福。
見なくても通じることができる。
接触型コネクトデバイスよりも、
こんなにもリアリティがある。
それだけでいいのだ。

二

秋野水姫は、胡乱（うろん）な脳みそで校門を通った。
結局、昨夜はほとんど眠れなかった。海岸で明は水姫に寄りかかるように眠り込んでしまった。起こさないように、ずっとさざめく海面を眺めていたら、いつの間にか明け方になっていた。一か月分の自然を浴びた気がする。その後、水平線から太陽が顔を覗かせたところで明が目を覚ました。二人は別れてそれぞれの自宅に戻ったのだが、汗を流して部屋に戻ったのが朝の五時半。それからはもう眠る気も起きず、コンピュータ部品が散乱した部屋を片付けていた。
教室に入る。入学当初は無機質な白い椅子や机、壁にどことも潔

癖さを覚えたものだが、数か月もすると慣れた。毎日のように顔を合わせるクラスメイト達は、始業前の時間を、デバイスによって電脳世界のコンテンツを享受するのに費やしている。これももう慣れた光景だった。

一人、机で異質な物を広げている生徒がいる。明である。水姫は近づいて行った。

「おはよ、明。よく眠れた？」

「いや」神岡明は目をこすりながら水姫を見上げた。

「なに読んでたの？」

『『コリントの花嫁』』

「なにそれ」

「ゲーテ」明は文庫本を閉じて伸びをした。「はあ、眠いなあ」

「明は、なんでドキュメントを紙媒体で読んでいるの？」

机に載った文庫本をパラパラとめくってみる。二秒で読むのをやめた。水姫が処理できる文字密度をはるかに上回っていたからだ。それに、ほのかに黴臭かった。

「だって、手触りが良いからね。あと、目に優しい」

「そう……」

水姫は紙のドキュメントをほとんど読まない。わざわざ手を動かすのが面倒だからだ。というか、今時紙のドキュメントを読んでいるのは明くらいのものだろう。

水姫の予想では、そのうち電子ドキュメントさえも不要になる。情報は媒体を介さず、データがそのまま脳に送られてくるようになるのではないか。早くそうなってくれればいい、と思う。伝達というのは、どこかしらで必ず損失が生じるものだ。

水姫が自分の席に着いた途端、激しくドアをスライドする音が教室に響いた。

「大変だ!!!」

クラスメイトの喪仁田蘭（もにたらん）が、入口にもたれるように立っている。腰のあたりまで伸びた、美しい巻き毛が特徴的な元気溌剌な少女である。

「どうしたのぉ、蘭？」

蘭と仲が良い雨木薫（あまきかおり）が尋ねる。彼女は、肩まで伸びたボブヘアである。おっとりした性格で、これといった印象を水姫は持っていなかった。

「実はな、さっき、聞いたんだけど」息を切らしながら蘭はいう。

「また起きたんだって、殺人事件が！」

蘭から波紋が広がるように、ざわめきが大きくなっていく。皆、自分のデバイスでインターネットに潜り始めた。水姫もポケットから携帯端末を取り出し、調べ始める。明が画面をのぞき込むのが反射で見える。水姫の指は忙しく画面を切り替えさせ、必要な情報を抽出していった。

「ああ、あった」

「見せて、水姫」

水姫は机に端末を置いた。明の頭が反対側から覗き込む。誰でも書き込むことのできるソーシャルネットワークの画面が表示され、見る見るうちに新規投稿数の数が増加していった。

インターネット上での情報の拡散は驚くほどに早い。特に殺人事件のようなショッキングなものならばなおさらだ。分かりやすい情報はすぐに広まる。水姫が得た情報はこのようなものだった。

被害者の名前は三宅京子。場所はC県Y市の公園――寂れて今は人が寄り付かなくなった公園、水姫も知っている場所だ。死亡推定時刻は細かくは書かれていないが、未明あたりとのこと。死因は刺し傷で、凶器は刃物だそうだ。

そして、何よりも注意を引くのは、死体には赤黒い塗料が塗りつけられていた、という記述だ。

水姫はさらに情報を探すために、シークレットブラウザを開いて、アングラな掲示板を開いた。これは読み取り専用で開かなければならない。干渉を多く持ってしまうと、悪意のあるデータのやり取りに巻き込まれる危険性があるからだ。掲示板ではすでにC県Y市の事件についてのスレッドが立ち上がっている。

「うっ」

水姫は思わず声を漏らした。掲示板を開いた瞬間、死体の写真が飛び込んできたからである。

「うわぁ、すごいねこれ」

明は目を細めて言った。モザイク処理が施されておらず、鮮明に映っている。おそらく、警察が来るまでに野次馬が撮影したものだろう。よくあることである。

一見すると奇妙なオブジェのように見える。被害者は仰向けに倒れて、細い腕と脚をまっすぐに延ばしている。

腹部を中心として、赤い粘性のありそうな液体が円形に広がっている。胸から股のあたりまで、上からペンキをかけられたようだ。特徴的なのは、その塗料が目元にもかかっていることだ。すぐ近くの鼻や額にはあまりついていない。目を狙ってペンキを塗ったようだ。胸の中心付近と目のあたりには、よく見ると赤黒い部分が混じっていた。腹部や目から流れ出た血が、ペンキと混ざったのだろう。

ペンキのフラットな色合いで、殺人死体に多々見られるような惨劇的な部分は塗りつぶされてしまっている。水姫も、直視できないほどむごい死体だとは思わなかった。死体というよりも、そういう趣向のオブジェのように感じる。

あれ、と明が言った。

「これうちの学校の制服だ」

明の指先は、画像の二の腕を指していた。制服の上に校章が縫い付けられていて、確かにこの学校の制服に違いない。首元のスカーフは赤く染まっているが、かろうじて見える部分は緑色だ。三年生のカラーである。

「ああ、朝からこんなの見るんじゃなかったなぁ」

いつの間にか席に着いていた喪仁田蘭がつぶやいた。口調とは裏腹にあくびをして呑気な顔をしていた。

喪仁田蘭は接触型デバイス『LENS』で画像を見たのだろう。これは近年普及してきたテクノロジーで、携帯端末の操作を目線で行えるという代物だ。

やはり蘭も、そこまでショックを受けている様子ではない。ほぼ単色に塗られたオブジェが、蘭の精神に負担を与えることはなかったようだ。

しかし、オブジェのようだといっても、やはり死体である。中には耐えきれずに保健室へ駆け込む生徒はいることだろう。

実は一か月ほど前にも殺人事件が起きていた。そちらは、今回の事件とシチュエーションが非常によく似ていた。殺害現場は同じ公園の同じ場所で、今回の被害者と同じくらいの体格で同じような髪

型の女性、さらには制服も同じものを着用していた。
今回の事件と唯一違うのは、一か月前の事件では被害者はペンキをかけられていないということだった。
チャイムが始業の合図を知らせるのと同時に、教室に担任が入ってきた。クラスメイト達は一斉に各々の席に戻っていった。森田という男性の担任は、長身で女子学生に人気がある。そして、最近再婚したという情報が、ほぼ確定した噂として広まっている。
「知っている人もいると思うが」という控えめな前置きで話が始まる。内容は数分前に水姫が得たものと変わらなかった。つまり、三年生の三宅京子の死体が見つかった、という内容であった。「気を付けるように」というパセリのような意義しか持たない注意喚起もあった。この言葉による効果がどの程度なのか測った人はいるのかしら……、と水姫は思う。

授業は六限目まであり、午後三時で終了する。五限目の途中、明は先生に断って席を立ち、保健室へと行った。よろよろと歩く明を見て、水姫は自分も一緒に行こうかと思ったが、当人の雰囲気がそれを拒んでいた。それ以降、水姫の関心の八割は保健室の明へ、残りは自宅のネットワーク環境の構想へと向いた。
放課後、水姫も保健室へと向かった。頭の中で「ちょっと頭痛が」とか「眼精疲労がひどくて」という言い訳を考える。別にそこまでしなくても、具合の悪そうな明が気になるという、はたから見ればただの友情物語に聞こえるだけだから問題はないのだが、特段不健康ではない自分が保健室へ入るのはなぜだか抵抗があった。
水姫の通うZ高校は中高一貫校である。中等部と高等部は棟が分けられており、それぞれの棟に保健室や職員室が一つずつ存在していた。水姫は高校一年生だ。一年目は内部進学生と外部生でそれぞれクラスが固められている。要するに水姫のクラスは全員が外部から入学してきた生徒である。
高等部側の保健室は、棟の二階の一番端にあった。入学当時に参加させられた校舎案内に、全くの受け身で参加していたため、到着するのに時間がかかった。保険室のドアをノックすると、くぐもった声で「どうぞ」と響いてきた。大人の女性のような声だった。
「失礼します」
清潔な白いスライドドアを開けると、ほのかなコーヒーの香りに水姫は迎え入れられた。
部屋の奥のガラス窓からは光が差し、窓際に置かれた観葉植物にほの明るい恵みを与えていた。その手前には何やら、分厚い医学書が十数冊、さらに古めかしい文庫本が数十冊、本棚に収まっていた。明のほかに紙媒体でドキュメントを読む人がいたとは。部屋の左手にはスチール棚に収まった医薬品。右手には暖色のカーテンが引かれている。その奥はベッドだろう。この中に明がいるのだろうか？
「こんばんは。怪我？　それともなにか相談？」
「あ、あの」
人見知りが顕現している、と思う。目が滑っていた。その証拠に、さっきから入ってくる情報は部屋にある物質ばかりだ。
「あなた、秋野水姫さん？　私は一条早雪です」
「え？　あ、はい」
なぜ知っているのだろう？　水姫はようやく相手の顔を見た。保健室の先生らしく白衣を着ている。服装が職業の役割の象徴する好

例だ、と頭の片隅で思った。デスク上のマグカップにはコーヒーがなみなみと注がれており、その横には白色の陶器が置かれている。砂糖入れだろうと推測する。

切れ長の目が特徴的だった。大人びた声の印象に反して、威圧感のある視線だ。銀色の髪を後ろで縛っていた。

「あの、なぜ私の名前を？」

「よく神岡さんが話しているから」

「呼んだ？」

右手のカーテンの奥から聞きなじみのある声。ベッドがきしむ音がする。カーテンを捲りあげて明が顔を覗かせた。

「あ、明、大丈夫？」

「うん、体調は大丈夫だよ。寝たら治った」

「そう」

とは言ったものの、やはり水姫には、明がどこか無理しているように見えた。その証拠に、目じりに白い筋がうっすらと見て取れる。やはり泣いていたのだろうか……、なぜだろう？

「明が私のことを話しているって、どういうことですか？」

どうしても関心が明に向かうことを意識しながら尋ねた。

「神岡さんと君は中学の同級生なんですってね」

「はい」

なんだ、そのことか、と水姫は思った。明と出会ったのは中学校に入学した時だ。

「明の家に学校の配布物を届けていたら、いつの間にか仲良くなってました」

明の家にはインターネットがつながっていなかったから、水姫が自ら持って行ったのである。

「他愛のない話でしょ、一条先生。それに、本人の目の前だと照れくさいですよ」明が右手を挙げて抗議した。「僕なんかより、水姫の方が体調わるそうに見えませんか？　ろくに寝てないんだろ？　水姫」

「まあ、確かに、そうだけど」海岸で過ごしたことを言っているのだと分かった。「でも、あまり寝ていないのなんて日常茶飯事だし」

「よくないなあ、それ」一条早雪が遮った。わざとらしいしかめ面を作っている。「あのね、最近の子ってね、インターネットにのめりこみすぎなのね。確かに便利なのだけれど、眠ることは大切です」

当たり前のことを言う人だなあ、と思う。

「先生、クラスの子たちは接触型デバイスを使っています。それに対して私は非接触型ですが、その違いってあるのでしょうか？」

水姫が部屋で使っているようなディスプレイ同期型のコンピューター――俗にいうパソコン――は非接触型コネクトデバイスである。今水姫が持ち歩いている携帯端末もそうである。接触型のシェアが高まっている今、徐々に使用率は下がってきているらしい。

「うん、まあ、とりあえず座りなさいな」

一条早雪がコーヒーを啜る。水姫と明は、棚と棚の間に挟まっていたパイプ椅子を広げて座った。

「インターネットに接続するためのデバイスのうち、接触型と非接触型の違いは、まあ大まかにいえば臨場感の違いしかありません。けど、それって重要なことなのね。なぜかって、臨場感があり、物事がリアルにとらえられると、当人にとっては、それが現実感を伴って認識されるようになるから」

「接触型って、ＬＥＮＳのことですよね？」
明が質問を挟む。ＬＥＮＳは眼球に装着することで、視覚情報の補佐を行ったり、目線でインターネットに潜ることができる。
「そう。眼球や鼓膜と言った感覚器官に直接装着して情報を得る技術が開発されると、今までの比ではないほどに、人間の情報伝達を効率的にした。臨場感が高まるというだけで、モニタから得られる情報よりも立体的にとらえることができる。しかもね、接触型の何が良いのかというと、肉体に負担が少ないの」
「パソコンや携帯の画面は身体に悪いんですか？」水姫が尋ねた。
「うん。以前までは画面から放たれる光や、ディスプレイ上の文字列を読むのに目を酷使したというけれど、ＬＥＮＳが出てからは全然。あれはもともと医療用に開発されたものなのよ」
「そうなんですか？」と水姫。
「あれはね、球面度数、円柱度数、乱視軸といった、使用者の視力パラメータを入力することで、像のピンボケを補正し、外部の空間情報を精確に網膜に映写する。目の動きは正常になるから、眼球には何の影響もないの。だから医療的にみて良しとされている」
「へええ……」
「でもさ」明は眉をひそめて聞いた。「その仕組みでいうと、結局網膜に映るのって、実際の風景の光ではなく、ＬＥＮＳでデジタル処理されて投影された映像なんでしょう？」
「ええ、そういうことになる」
「なんだかなあ。嫌だなあ。だって嘘の映像をみてるってことでしょ、それ」
「嘘の映像は嫌？」
「嫌です。だって、客観的にみれば嘘の映像を実際の映像だと錯覚しているわけでしょう。盲目的じゃないですか。　もしなんらかの陰謀でＬＥＮＳが映し出す映像が加工されていたら、みんなはそれを疑いもなく信じ込むことになる。危険じゃないかなあ」
「うん、まあ、そうね」一条早雪はあっさりと認めたようだった。
「でもね、情報というのはどこかしらで必ず加工されているのよ。明は、今では珍しい紙の本を読んでいるって言っていたわよね？」
「はい」
「紙の本だって、書いた人がその情報を加工して媒体に載せている。読んだ人はその情報を受け取る。これはＬＥＮＳの仕組みとまるきり変わらないどころか、むしろ加工度合いはより高いわ。明の論理でいうと、明がＬＥＮＳを使用していないのは自己矛盾なのではないかしら？」
「いいえ」明ははっきりと否定の言葉を述べた。「情報を享受することと妄信することは違います。僕が紙の本を読んでいるのは、情報を享受するためであって、鵜呑みにするのは禁忌ですよ。ＬＥＮＳをつけている人は、ＬＥＮＳによって供給される情報を妄信しているのです。妄信はどの文脈においても等しく負の意味を持ちます」
「ふうん……」
一条早雪は瞬時に面倒くさそうな態度になったようだ。だが、そこまで感情的になっているようにも見えない。どうやら最初からその結論が分かったうえで、明とは反対の態度をとってみたようだった。見た目にそぐわず子供っぽいところがある人だ、と水姫は思った。
「あ、そういえば、先生」それなりに打ち解けたように感じて、水

姫は尋ねてみた。「うちの学校の生徒が、殺害されたそうなんです。名前は、ええと」
「三宅京子」一条早雪は沈んだような声でいった。声の高さが一オクターブくらい下がったようだ。「三年生だった子ね。悲しい事件だわ」
明が眉をひそめこちらをにらんだが、水姫はかまわず話し続けた。
「ご存知でしたか」
「ええ、彼女はね、よく話しに来てくれてたから」
「よく保健室に？」
「そう」
短く言って、一条早雪は目を閉じた。
「ついこの間にも殺人事件があったわね」
「そうですね」
「前回の事件のあと、保健室に駆け込んでくる生徒が増加したわ。みんな、身近にある死を恐れて、精神が参ってしまっているのね」
「はい……」
「ＬＥＮＳによる情報享受は、より臨場感のある体験を齎（もたら）す。しかし、周りには死に関するニュースが多すぎるのね。今回の事件で、さらに多くの生徒が負担を抱えないことを祈るわ」
「わかります。それで、三宅京子さんの事件について、詳しく知っていたりはしませんか？」
「詳しくは知らないわ」
「三宅京子さんの人柄とか……」
しかし、一条早雪は目を閉じたまま、それきり何も話さなくなってしまった。水姫と明は目を合わせた。デリカシーを欠いていたかな、と水姫は反省した。
実を言うと、死体に塗られたペンキの意味について考えを聞きたかったのだ。
気まずい沈黙が流れる。
『どうしよう？』
『初対面で人死にの話題をだすやつがあるか』
『私っていつもこうなのかな』
『ノーコメントだ』
『ごめんなさい』
『もう何も言うな。帰ろう』
『そうだね』
というメッセージを奇跡的なアイコンタクトで送受信した。
二人は保健室を後にした。

三

自宅に戻る。周りの住宅街はどれも同じ、ぴかぴかとした無機質な白い素材である。それが今、夕日の色を愚直に映し出していた。
明の家はここから一キロほど離れたところにある。しかし水姫は行ったことがない。中学生の頃の明は病気がちだったから、学校の配布物を届けるのは大抵は病室だった。
「ただいま」
返答はなかった。母はまだ帰っていないらしい。
玄関に置いてあった段ボールを開けて、中身を部屋に持ち込んだ。

コンピュータ用の部品である。水姫が単身赴任中の父に頼んで買ってもらったものだ。

部屋着に着替えてから、ゴム手袋をはめて中身を慎重に取り出した。高速処理用のグラフィックボードだ。コンピュータ筐体の蓋を開けてスロットにゆっくり差し込む。内部を傷つけないように慎重に。鋭利なパーツが、ゴムの上から手にちくちくと刺激を与えた。筐体が狭いから、手を差し込むのは難しい。人間のための装置なのに、大きさは人間サイズのオーダーにはあまり合っていないと、水姫は常々思う。

グラフィックボードを無事装着し、筐体の蓋を閉ざして電源を再び入れる。画面が引き伸ばされている。ドライバをインストールして設定し、再起動すると、無事に高解像度の画面が表示された。これで、描画を用いた仮想空間の構築の役に立つだろうか。

そういえば。

実は水姫もＬＥＮＳを所有していた。数年前に医者で作ったきり、一度も使用していなかったものだ。異物を目に入れるのになんとなく抵抗があった。それに、視力をよくするためなら眼鏡をかければ間に合う、というような具合で、これまで接触型コネクトデバイスをつけずにきた。しかし、今日一条早雪が言っていたことも気になった。彼女が言うには、接触型と非接触型の違いは、外部信号を受け取る側の臨場感の違いだという。臨場感がそんなに重要なのだろうか、気になる。

箪笥（たんす）の奥から青色の袋を取り出す。以前眼科でもらったもので、目薬と一緒に入っている。目薬の光分解を防ぐために、遮光性の袋に入れられているのだ。ＬＥＮＳの箱は高級そうな白の箱で、開けると保存液に二対浮かんでいた。手を洗ってＬＥＮＳを手に取り、目にはめてみる。これは電子機器であるから、起動しなければいけない、と思って電源の入れ方を思い出そうとすると、自動的に起動した。どうやら生体磁気の誘導起電力を電源としているらしい。

視界が一瞬暗くなり、再び明るくなった。なるほど、一度外部からの光を切り、曲面状のスクリーンに外部映像を反映させているのだ。画面は綺麗だ。裸眼よりも高解像度で部屋の様子が見渡せる。いろいろ視点を動かしてみると、それに連動して画面に表示された半透明のブラウザが動き出した。どうやら眼球の動きだけで操作ができるらしい。

水姫はインターネットブラウザを起動してみた。数秒間、ウロボロスの蛇のようなアイコンが一回りした後、

CONNECTED…… SUCCESSFULLY

ようこそ

という無機質な文字列が先頭から順に表示される。細かい部分にはこの端末のアドレスや通信方式が記述されていた。

適当なワードをエンジンに打ち込み、検索をかける。初めての操作で、手元のキーボードが恋しくなったものの、なんとか打ち込むことができた。

様々な情報が流れた。

身体が震える。

情報の洪水が、水姫を飲み込んだからだ。

情報というよりも、むしろエネルギーフラックスと言った方が良いかもしれない。情報の流れが、指向性を持った束として行き交うさまをみることができている。

動画を流すと、映像が頭の中で再生されているようだ。写真を見ると、自分が実際に観たかのように感じられる。音楽を流すと、まるで生で聞いているよう。

なるほど、これが臨場感の違いか。

水姫の意識は大半がインターネットに向いていた。残りの部分は客観的に自分を観察している。つまり、冷静に驚愕していた。

今の自分は、インターネットという仮想空間上に存在しているように感じる。一条早雪や明が言っていたこともわかる気がする。たしかに、人間の認識を乗っ取っているといっても過言ではないかもしれない。ここから予測される事故なども用意に想像できるだろう。

水姫はしばらく、インターネットを漂ってみた。それは奇妙な体験だった。身体は自室の椅子に座っていながら、意識は別の空間を漂っているようなのだ。ネット上のコンテンツに対して、自分の感性が非常に強く反応している感覚がある。知覚が引っ張られていると言えばいいだろうか、とにかくそんな感じである。

途中、玄関が開く音が聞こえた。母親が帰ってきたのである。それから、水姫の自室のドアを開ける。水姫は意識の二パーセントを母親の方に向けた。

「ただいま、水姫」

「お帰り、お母さん」

それきり母親はリビングの方へ向かっていった。

意識の残りの部分はインターネットに残ったままだった。

水姫は思ったことがある。今のこの状況は、観念的な空間に自分の意識が浮かんでいるだけなのだ。データが行き交っているだけの空間。その空間上で目にする写真や画像は、すべてデータだけのもので、空間自体に風景があるわけではない。要するに、砂漠の上で写真集を見ているようなものだ。なんだか虚しい気持ちになってくる。

母親の呼びかけで、夕食の支度ができたことを知った。ＬＥＮＳは数秒間目を閉じれば、電源がオフにできるようだ。水姫は手を洗ってＬＥＮＳを外し、リビングへ向かった。

数日後の放課後、水姫が帰り支度をしていると、喪仁田蘭から遊びに来ないかと誘われた。斜め後ろには雨木薫が手を後ろに組んでにやにやとしている。高校に入学してからすぐのころは、顔だけで彼女たちやほかの生徒を識別することはできなかった。蘭のように特徴的な髪型をしていれば、その分水姫にとっては有難かった。

「私のじいちゃん、探偵なんだぜ！」

「探偵？」

「喪仁田（もにた）探偵事務所、って知ってるだろ？」

「ああ」

小耳にはさんだだけだが、聞き覚えはあった。駅の向こう側の、鄙びたシャッター街の一角にあったと記憶している。

「いいけど、なんで？」

「じいちゃんの話でも聞きながらさ、みんなで宿題しようよ」

水姫は喪仁田蘭の思惑に気が付いた。つまり、苦手な数学の宿題を手伝ってくれ、ということだろう。

「いいよ」
「よっしゃ！　決まりな。明はどうする？」
脇でカバンに荷物を入れていた明は、少し間をおいて言った。
「うーん、今日は遠慮しておこうかな」
「わかった！」
喪仁田蘭は元気に返事をして、雨木薫の手を取って駆け出して行った。
「じゃあ、また明日、明」
「うん」
教室を出るとき、後ろを振り返った。
一人教室に取り残された明は、しょぼくれた雰囲気に感じる。

高校の最寄り駅は縦に伸びており、線路が東西を分けている。水姫の通う高校のある東側は近年開発が進み、地上から見上げると、視界は高層ビルや大型ドームで大部分を占められる。グレーのおしゃれなタイル敷きの駅を通り抜け、西口を出ると、一気に寂れた雰囲気になる。ロータリーはこぢんまりとして、放射状に延びる街路は少し汚い印象を受ける。街路に入ってみると、半分くらいの建物はもうシャッターが下りてしまっている。そんな中進んでいくと、左手にかろうじて開いている喫茶店『エラリィ』があり、視線を上げるとガラス部分に『喪仁田探偵事務所』と書いてあるのだった。喫茶店横の壁に穿たれた階段を上っていくと、古臭いこげ茶色の扉が姿を現す。先頭にいた喪仁田蘭が「ただいま爺ちゃん！」と言って扉を開けると、ほのかに古臭いような――黴臭い、という表現は失礼なので控えるが――においが水姫を出迎えた。

「ああ、お帰りなさい」
でっぷりとしたお腹で、眼鏡をかけた老人が、応接セットらしい椅子に座っていた。体型と椅子が合っていないように水姫には思われた。髪の毛はふさふさだが、白髪だった。目を移すと、仕事机だろうか、大きなデスクに書類を沢山散らばらせていた。その後ろの方にはこれまた高級そうな本棚があり、沢山の本が収められていた。
「あ、お客さんですか、すいません」
喪仁田蘭が照れくさそうに頭を下げる。
「ごめんなさぁい」
雨木薫と水姫もそれに倣った。
老人の向かい側に座っていた青年が、こちらを向いていた。どうやら仕事の話をしていたみたいである。
「こんにちは」
青年は立ち上がり、にこやかに挨拶をする。さらには名刺を三枚取り出し、水姫たち全員に一枚ずつ配った。髪が肩のあたりまで伸び、目つきの鋭い顔立ちだ。両手に黒い手袋をはめている。外気を考えると気の毒に思った。年齢は三〇代中ごろと水姫は予想する。
「吉村黎（よしむられい）と申します」
名刺には名前の上に、『彩（さい）の輝（かがや）き　C県支部』と書かれていた。
「彩の輝きってぇ、S県が総本山じゃなかったっけ」
雨木薫が言った。『彩の輝き』というのは、C県とわずかに隣接しているS県を中心に発展した世界的宗教で、豊穣神を祀っている。その宗教の人が、この事務所になんの用事なのだろうか。
「ほれ、君たちは奥へ行っていなさい」
老人が三人を促す。水姫たちは事務所の奥の扉を開け、家の中に

入っていった。廊下を通り、喪仁田蘭の部屋に入ると、三人は荷物を下ろした。蘭の部屋は案外綺麗に整頓されており、むしろ蘭の祖父の仕事場の方が散らかっている印象を受けた。

「ちょっと盗み聞きしてくる！」

蘭がそう言うと、水姫と雨木薫が止める間もなく、そろそろと出て行ってしまった。まるで忍者みたいだな、と水姫は思った。仕方がないので、二人もなるべく物音を出さないように、先ほどの扉の裏側に耳を当て、盗み聞きをした。

「……それでは、まだ見つかっていないと？」

「ええ……私としては、影像先生に、見つけていただきたいと」

「しかし、儂の事務所は浮気調査とか、紛失物の捜索とか、まあそういったですな」

「ええ、存じていますが、しかし、この町に探偵はあなたしかおりませんので……」

「はあ、そういうことですか。まあ、善処しましょう。それで、ええと、三宅京子といったかな……」

「はい……」

それは、三宅京子の殺人事件に関する話題であるらしかった。蘭と薫がひそひそと話し始める。

部屋に戻ってから、三人は話を整理した。聞こえた話を水姫が推測するところによると、どうやら次のようなことらしい。

吉村と名乗った青年は、彩の輝きの治安維持部隊の一員で、S県から派遣されてきている。というのも、どうやらこの前殺害された三宅京子は、その彩の輝きの信徒――彩の輝きの中では、彩徒と呼ばれるらしい――で、まだ犯人が見つかっていないため、急遽犯人捜しを命じられたのだという。吉村も死体の奇怪な状況に首を傾げざるを得ず、やむなく協力者を仰いだということらしい。

途中、音楽用語や、『鹿目』という用語が聞こえた。吉村は感情が高ぶると、行ったり来たりしながら早口で話す癖があるらしく、扉越しで聴くのはなかなか難しい技術だと思った。その結果、ところどころ穴抜けの理解にとどまる部分があった。

「苦労人だな」喪仁田蘭が言った。

「でも、苦労の多い男性って素敵よねぇ」

夢見る乙女の気分なのだろうか、雨木薫がロマンチックに言い放った。

「あ、そういえばさ。私、こんなこと聞いたことある」

蘭は、ついさっき思い出した風に言った。

『『あの坂の上のお屋敷には吸血鬼がいるらしい』って言葉。しってる？」

「しらなぁい」

「吸血鬼？」

「そう。あの屋敷っていうのは、昔このあたりに建っていたお屋敷のことらしいんだけど、なんでも吸血鬼が住んでいたんだって」

「ばっかみたぁい」

雨木薫が間延びした声で言った。雨木薫とはそこまでシンパシーが合うわけではないが、さすがに今回は同意だった。いまどき吸血鬼なんているわけがない。

「やっぱそうだよなあ。でも、血まみれな画像みてちょっと思い出したんだよな」

「ねえ、思ったんだけど」水姫は怪しい話題を避けようとした。「犯

人がＬＥＮＳを使用していたとしたら、殺害当時のデータがネットに落ちていたりしないのかな？」
「あああ、それはないんじゃないかなあ。よっぽどなバカじゃない限り、ネットに自分の殺人の記録とか上げないよ」と蘭。
「それに、もしかしたらＬＥＮＳ使ってないかもよ」薫が援護射撃をする。
「そっか」
「水姫、ＬＥＮＳ使い始めたんだ？」
「まあ、うん」
蘭と薫は物珍しそうな視線を向けてきた。これまで非接触型のデバイスしか用いてなかったから、どういう心変わりだろうと思っているに違いない。
「でも水姫は昔のコンピュータのオタクだから、ＬＥＮＳを使いこなすのもすぐなんじゃない？」
「まあね、初めて使った時はびっくりしたけれど、何回か使ったらもう慣れたよ」
「さすがだなあ。やっぱ理系なだけある」と蘭がニコニコして言った。
水姫は少し得意げになった。他人に褒められるのは気持ちがいいものだ。顔の筋肉を制御して、にやつくのを堪えたが、無駄だったらしい。
「水姫、それ半分悪口だよ」
薫の言葉は晴天の霹靂だった。
喪仁田蘭の部屋で学校の宿題を片付けると、夕方の六時半を過ぎていたので、水姫は帰り支度をした。二人に数学を教えた報酬として、高級そうなお菓子を貰った。蘭によれば、喪仁田影像が探偵の依頼を解決したお礼として持ってくる依頼主がそれなりにいるらしい。しかし、当の本人は軽度の糖尿病を患っているらしく、お菓子の類はすべて蘭のもとにいくのだ。
廊下に出て事務所に通じるドアに耳を当ててみると、物音は何も聞こえてこなかった。吉村はすでに帰宅したのかもしれないと思い、カバンを背負って部屋を扉を開けた。吉村の姿はすでになく、わずかに聞こえる寝息だけが静かになっていた。喪仁田影像が焦げ茶色の皮張り椅子に掛けて、眠っているのだった。
「ああ、うちのじいちゃん、厄介な仕事押し付けられると仮眠をとって無理やり気合をいれるんだよ。それが長く仕事を続ける秘訣なんだってさ」
後ろから蘭が、仕事場を覗き込みながら言った。要するに吉村の仕事は、影像の悩みの種になのだ。
喪仁田探偵事務所を出た。雨木薫はまだ蘭の家にいる。薄暗く、ぼろ臭い階段を降りると通りに出る。人通りは少なく、まだ梅雨だというのに、うすら寒さすら感じるほどだ。これは幽霊がでてもおかしくないな、と、科学主義の水姫にしてはありえない冗談も言いたくなるほど閑散とした通りだ。
通りに一歩踏み出して、事務所の一階に位置する喫茶店『エラリイ』のガラス張りから店内を覗き込んでみた。厨房の奥に座って、暇そうにしている年老いた女店主。中の壁にメニューが書いてあった。コーヒー一杯五〇〇円もするらしい。学生の財布には痛い値段設定だ。この値段が商店街の活気を盛り下げている一因とも考えら

れる、と水姫は多分に失礼な空想をして一人で笑った。天井には空気を攪拌するためのシーリングファンが回っている。椅子とテーブルは木製だ。
店内をじろじろ見つめていると、店の奥の方の席に、制服姿の人物が座っていることに気が付いた。その人物を認めて、水姫はあたふたと店のドアを開けた。
「いらっしゃい」
しわがれた店員の挨拶を聞き流して水姫はそのテーブルの向かい側へと座った。
「こんにちは、明」
明は水姫を見上げた。そして、無理やり作ったような笑顔で水姫を出迎えた。
「やあ」
水姫が席に着くと、明はテーブルに乗ったコーヒーを見つめた。湯気が出ていない。注文してからしばらく経っているらしい。
女店主が腰を曲げながらメニューをテーブルに置いた。水姫は財布の中身を思いながら、一番安いブレンドコーヒーを注文した。
中に入ると、店に対する解像度が上がった。厨房がのぞける壁の前の木製箪笥にはアンティークな小物や昔の人形が置いてあったりするし、床は一見汚く見えるが、実際それは床の模様で、よく見ると埃一つないように保たれていた。席について落ち着くと、ニュースらしい音声がわずかな音量で放送されていることに気が付いた。周囲を見回すと、店の奥の、空のテーブル群の奥に、縮こまっているようにテレビが掛けられていた。夕方のニュースを流していた。
明はというと、考え込むようにずっとコーヒーの表面を見ている。照明の暖色が茶色に染められて反射している。
「明、なんか元気がなさそうだけど」
「そう見える？」明は少し顔を上げた。それが上目遣いになって、明としては珍しい表情だと水姫は思う。
「その」
「なんで僕がここにいるのか、聞きたいんだろ」
ずばり的中。学校で別れたあと、探偵事務所に行っている間に、明は一人でずっとここにいたのだろうか。
「この上に住んでる喪仁田影像先生とは、知り合いなんだ」
「そうなんだ」どこで、どういう風に知り合いになったのかを聞くのが躊躇われる。
「うん」明はしみじみと言った。「やさしいおじいちゃんだよ」
女店主がおぼんを持ってやってくる。腰曲がりの老女がゆっくりゆっくりとやってくるものだから、水姫はその間、じっと老女の動きを見ていて、明への返答はできなかった。お盆にはブレンドコーヒーとちんまりとしたケーキが二つ載っていた。トップがレモンジュレのレイヤーで、レモンピールが混じっている。その下の層は黄色がかった白いムース生地。おそらくレアチーズケーキだろうと推測をした。水姫は大のスイーツ好きだった。
「サービスだよ」女店主がしわがれた声で言う。この調子では相当年齢を食っているな、と水姫は思う。
「ありがとうございます」
「ありがとう、おばあちゃん」
老女はおぼんを脇に抱えると、じっと黙り込んで水姫を見た。
「友達かい？」

「うん。秋野さんっていうんだ」明が答えた。
「上から降りてきただろ。うちのはどうしてた？」
「うちの？」水姫は訊き返した。
「この人は、上の喪仁田影像先生の奥さんなんだよ」
「へええ……」そういわれてやっと理解できた。この老女は喪仁田影像を『うちの』と呼んでいるのだ。老人は概して説明不足に陥る傾向がある。
　言われてみれば、二人の年齢は同じくらいな気がした。腰曲がりのおばあちゃんと、でっぷりとしたおじいちゃんで、よく考えてみるとお似合いの気がする。
「あの、なんだかお客さんがきて、依頼を受けているようでした」
「客？　こんな寂れたところに……」老婦人は目を細めて言うと、すごすごと厨房に戻っていく。
「客って、どんな人？」
「なんだか、仕事人って感じの人。『彩の輝き』の人だって」水姫はケーキをフォークで切り分けながら言った。
『『彩の輝き』？　もしかしてだけど、吉村って名乗ってなかった？」
「あ、そうそう。そういえばそう言ってた」水姫はフォークを置いて、先ほど渡された名刺をポケットから取り出して明に手渡した。
　水姫はケーキを口に運んだ。そのケーキは、口に運び込まれるまで、フォークの上でぷるぷるとゼラチン質の振動を受けていた。水姫が瞬時に観察した結果によると、ケーキの層は全部で三段で、前述したとおり、一段目はレモンジュレ、二段目はムース、そして三段目は薄いタルト生地の台座だった。水姫が口に入れた瞬間、舌の上で横倒しになったケーキの三種類の感触が伝わってきた。それを味わいながら食べると、水姫にはとある感情が湧いてきた。それは感謝である。レアチーズケーキで一番肝心なのは、真ん中のムース生地である。これは普通クリームチーズと生クリーム、そして砂糖の混合で成り立っているのだが、このケーキにおいてはレモン果汁と果肉が加えられていた。さらに特筆すべきは一段目のジュレの中に入っているレモンピールである。これはレモンの皮が刻まれたものだ。ほのかな苦みがジュレに埋め込まれているのである。ジュレとムースで、果肉とピールがそれぞれに入っていた。つまりこれは、同時に食べることでレモンを再現しつつ、チーズケーキとしての格を向上させているのだ。そこで忘れてはいけないのが、台座に使用されているさくさくのタルト生地である。なぜならば、軟質な一段目、二段目に対し、硬質なタルト生地がよりポテンシャルを引き立てる役目を果たしている。軟と硬の二元論的対比が、お互いを補い合い、相克しあって全体の完成度を高めている。またはこうも言える。ジュレ、ムース、タルトはそれぞれ、音楽の三要素、リズム、メロディ、ハーモニーに対応している。流れるような思考が頭の中に鳴り響き、壮大な物語を読んだあとのような、心地のいい疲労感が水姫を襲った。こんなところに、隠れた名店があったなんて……。
「おいしい」
　厨房の老婦人を見ると、こちらを見つめてにっこりと微笑んだ。
「やっぱりそうか……」水姫がケーキを味わって食べている間、じっと名刺を見つめていた明が、ぽつりとつぶやいた。「吉村だ」
「あれ、知り合いだったの？」
「まあね」明は自分のコーヒーを飲み干した。「僕の苗字が神岡（かみおか）、っていうことは知っているよね？」

数秒の思考が水姫の中で行われる。その質問を改めてするとはどういうことか。
「もしかして、神岡グループの神岡？」
「そのとおり。いつかは気づくかと思ったけどね」
まさか、あの神岡だったとは……。
淡い感動を覚えた。
神岡グループと言えば、日本の企業の中でもトップレベルに規模の大きいグループだ。インターネットやソフトウェアを始めとしたＩＴ事業はもちろん、ハードウェア、自動車、家電製品、医療、芸能、音楽、日用品、化粧品、食料品、玩具、書籍など、多岐にわたった事業を展開している。なぜ今まで気が付かなかったのかというと、その名前を直接目にすることは少ないからだ。例えば、インターネット事業はＫＮＣ（神岡ネットワークコミュニケーション）、医療はＭｅｄｉＫａｌ（メヂカル）、音楽はＭｕｓｉＫａ（ムジカ）、化粧品はＭｉｌｌａｒＫａ（ミラーカ）という企業が請け負っている。ちなみに、ミラーカというのは昔のドキュメントに出てきた妖艶な吸血鬼を表しているらしい。要するに、『神岡』という言葉が直接使われるのは『神岡グループ』という場合だけで、それぞれの企業の名前には一切使われていないのだ。
「神岡はもともと、明治時代にできた企業だったんだ。一度は没落したけれど、戦後のある時期から急成長したと聞いている。それは、会長が今の会長に変わったとき。神岡グループの現会長が、僕の曾祖母だ」
トップの名前を水姫は思い出そうとした。思考が鈍いことに自覚的になる。名前を探り当てるまでに多少時間がかかった。神岡グループのトップは神岡優子（ゆうこ）という女性だったはず。若い頃の顔写真をネットで見たことがあったが、目つきのするどい顔つきをしていたと記憶している。
「そんな話、一度も……」
「しなかった。する必要はないと思ってた」
「うん」確かにそう思う。というよりもむしろ、明が神岡グループの、いわば令嬢であるということを知っていて明に近づいたと思われたら、今ほどの関係は築けなかったかもしれない。「神岡グループと吉村さんはどういう関係なの？」
「吉村黎は神岡グループ本社の一員だった。昔、家族ぐるみで付き合っていたことがある」
「ああ、それで……」
吉村黎という男が神岡と関係のある男ならば、明が彼を知っていることにも納得がいく。
「吉村は良い人だったよ。誕生日にプレゼントをくれたこともあった」
明は思い出を懐かしむように言った。水姫は面白くなかった。話を戻すことにする。
「それで、その吉村さんが事務所にいたわけなんだけど」
水姫は事務所での出来事を語った。音楽用語や、『鹿目』という単語が聞こえたというくだりに入ると、明の眼がわずかに見開かれ、ケーキを食べる回数が増えたようだった。何か心当たりがあるに違いない。
「鹿目……」明がぽつりとつぶやく
「なにか、知っていることがあるんでしょう」少し尖った言い方に

なったかもしれない、と反省する。
「まあ、ね」
「どんなこと？」
「鹿目辰巳……世界的なピアニストなんだ」
「ピアニスト？」
「そう。出身はこのＹ市」
「嘘、そんな有名人がいたなんて」
流行に疎いということだろうか。たしかに水姫の流行りもの嫌いは有名だ。ＬＥＮＳを使用するのにも、それなりに抵抗はあった。
「その鹿目さんが、なんで」
「鹿目辰巳はね、神岡グループの音楽企業『ＭｕｓｉＫａ』がスポンサーしているんだ」
繋がった、と水姫は思う。三宅京子殺人事件は、吉村と神岡、そして鹿目辰巳が絡んでいることが分かった。
「これは推測だけど、吉村がこの事件を調査しているのは、三宅京子が『彩の輝き』の一員だから、というよりも、三宅京子から何らかの鹿目辰巳についての情報が出てきたから、と考えた方が自然な気がするな」
最初、吉村は『彩の輝き』サイドから調査を任じられた。しかし実際に調べてみると、神岡グループがスポンサーしている鹿目辰巳が、三宅京子に関連していることが判明、それが神岡グループのイメージダウンに繋がるかを懸念した結果、喪仁田影像に協力を仰ぎに来たというところだろう。
「ねえ、水姫。今度うちに遊びに来なよ」
明が、まっすぐ水姫の瞳を覗き込んで言う。まるで万華鏡のように深い眼光がこちらを見据えていた。
「突然どうしたの？」
「たまにはいいだろ」
「たまにはね」
珍しいこともあるものだ、と水姫は恍惚とした頭で思考した。今まで一度も明の家に行ったことがない。中学校から数えて四年目なのに。
しかし、それもそうかと思考を修正する。神岡明が神岡グループの令嬢だと判明した現在、明が家に誰も呼ばないことに、納得のいく理由がいくつも付けられる。
二人は喫茶『エラリィ』を辞した。ここのケーキを水姫は脳に刻み込んだ。今度、あの老女からレシピを聞き出してやろうと意気込む。
時刻はすでに七時を回っていた。思ったよりも長話をしていたようだ。
通りはやはり寂れている。薄暗い暖色の街灯が通りを照らし、明かりを受けて両側のシャッターが曖昧に照らされる。輪郭のはっきりしない様は、まるで亡霊のようだった。二人が歩く音が周囲に虚しく響く。
「エラリー・クイーンの中期の小説に、架空の町が出てくる」
「喫茶店の名前？」
「ちがうよ。昔のアメリカ人作家だ」
「へえ」
「この町は、その町のイメージと合っているように感じる」
「ここみたいに寂れているの？」

「これほどまでじゃないと思う。でも、なんとなく雰囲気がね」
「そうなんだ」
それきりの沈黙。水姫のデータベースには、小説のことはほとんど登録されていない。今度、明から紙の本でも借りて読んでみようかしら。
通りを抜けると、もとの放射状に延びる駅前ロータリーにでた。ふと空を見上げたが、月はどこにも上っていない。夏の熱気を孕んだ大気に吸収された、星の散布図があるだけである。
二駅乗って最寄り駅までついた。二駅といっても距離としては約二キロメートル、朝に弱い水姫はこのスケールの小ささに有難みを覚えている。
駅前の分岐路で明と別れる。去り際に水姫の方を少しだけ向いて、右手を上げる仕草は出会ったときと変わっていない、水姫の脳にはそのように記憶されていた。しかし、今日はその仕草に若干の歪み、そしてタイムラグがあったような気がした。気のせいかもしれないが、感覚的定量評価が癖になっている水姫にしては無視できないほどの大きさの誤差だった。
そういえば、明は喪仁田事務所に用があったのではないのだろうか？　何のために喫茶店でコーヒーを啜っていたのだろう？
夕食後、部屋に籠ってコンピュータを操作していた。水姫が趣味でやっているプログラミングだ。父は工学が専門だったから、教わりながらまずは簡単な数値シミュレーションを動かすことから始めた。質量の同じボールをぶつけた時に、速度が交換されることや、木の上のサルを狙ってボールを投げる場合の振舞いなどだ。物理学の公式で記述されることはわかっていても、経験的に理解できなければ真の理解とは呼べないだろう。様々な仮定や境界条件のもとに、どのように振舞いが変化するのかを確かめることで、次第に現実世界における実験と遜色ないレベルで理解していった。
一次元、二次元におけるシミュレーションは平面に記述されるから理解がたやすい。問題は三次元の場合だ。一般的な人間の脳は二次元までなら容易に認識が可能だ。だが三次元になると途端に認識に混乱が生じやすくなる。これは大まかには人間の眼が左右に二つ付いていることと、光線が直線的に進むことによると思う。要するに、光線がまっすぐ進むことで、物質による物質の掩蔽が起こった場合に情報が得られないこと、そして人間の二つの眼が認識できるのは平面的な視点でしかないからである。
次元にとらわれずあらゆる視点を持ちうるのは神だろうか？
最近では、水姫が独自に構想した物理エンジンを用いて様々な仮想実験を行っていた。物理エンジン内で、水姫は何度も地球を滅亡させたり、チャンドラセカール質量に達した白色矮星を爆発させたりしていた。だが、これらは単純な初期条件の産物に過ぎず、現実的にあり得そうな仮定を置いた途端に破綻した。
その問題を解決するために、よりよい物理エンジンを構築しようとすると、動作がおかしくなったり、処理が重くなったりする。後者の問題はコンピュータ部品を高性能なものに換装することで一応の解決をみることができるので、最近では通販でコンピュータ部品を注文することが増えた。父から許可は受けているが、母からいい顔をされたことはないと記憶している。
こうして物理エンジンをいじっていると、自身をまるで宇宙を想

像した神のように感じることがある。
子供の頃に読んだ本に、こんなことが書いてあった。多元宇宙論と言って、いま我々が住んでいるこの宇宙は、沢山ある宇宙の中の一つに過ぎないという考えだ。そもそもこの宇宙の、創生の謎も、その動力も明らかになっていないのに、突拍子もないことを考える人がいたものだ。しかし、その妙に魅力的なアイデアに水姫は好意を寄せていた。
父がおいて行った本だ。古臭い紙媒体のドキュメントだが、幼い時に父から読み聞かされていたおかげで、今は水姫が抵抗なく読める数少ない本の中の一冊だった。
一般相対論然り、黒体放射スペクトル然り、自分の常識をよりマクロな現象の一部として理解するには、まずはミクロな動きを理解しなければならないというのが定石だ。しかし、別の人がこのように言っていた。世の中の動きは、ミクロな行動様式にではなく、マクロな調和としてみることが重要だとも。評価の高い曲が曲として成り立っているのは、音符と音符のつながりに意義があるのではなく、全体としてみた時のハーモニーによるものだ。
ミクロな原理を理解するのか、マクロに全体の様子を観察するのか、
観測事実から攻めるか、解から攻めるか、
何がアプローチとして正しいのだろう？
わからない……。
目が疲れたので、操作を終了してベッドに転がる。夕食を食べてからずっとコンピュータの画面に向き合っていたようだ。すでに日付を跨ぎ、部屋の外からは何も聞こえず、自分の衣擦れの音だけが顕著だった。
目がじんじんとしていた。初めてＬＥＮＳを使用した日から一週間程度たっていた。どうもＬＥＮＳを使う気にはならない。無味乾燥なインターネット空間は、やはり現実感が希薄すぎた。
ベッドに転がると、背を曲げていたことで生じていた背中の軋みが幾分か解消された。コンピュータに没頭していると、どうしても無意識に猫背になっているのだ。水姫は猫背という言葉に含まれる愛玩動物の存在に一人くすくすと笑った。
視線を上げると、閉ざされたカーテンとガラス窓の隙間から、月の青白い光が辺りを照らしていることに気づいた。夕方には見当たらなかった。おそらく夜行性の月なのだろうと水姫は予想を立てた。
ほのかな優しい明かりは、水姫をまどろみへと誘った。数値計算では得られない経験である。目を閉じ、脳のモジュールをひとつひとつシャットダウンするイメージで、意識のレベルを落としていく。これは水姫が最近身に着けた自己暗示の方法だった。人間の意識構造はコンピュータと似ている。感覚器官を通して入力を受け取り、脳内で処理を行い、スクリーンに描画するように、脳内にイメージする。複数段階に別れたコンピュータは、末端からシャットダウンするのが基本的だが、人間の脳も同じように考えれば良い。
意識のレベルを落とすと、自然に交感神経が落ち着きだし、世界に対する感覚が鈍くなる。人間はこのようにして世界とのつながりを一時的に絶つのである。

四

秋野水姫は驚愕した。
水姫と明の家を分かつ分岐路の反対に進んできたのだが、途中までは普段と変わらない道だった。しかし、細長い川にかかる橋を渡ると、そこを境にして突然雰囲気が変わったようだった。それまで無機質な白いボックス型の住宅地だったのに対し、川より向こう側は空き地や田圃が多かった。住宅の白や道路の黒灰色は割合を落とし、土色や木々の色が顕著に増していた。
橋を渡ってから体感で五〇〇メートルほど歩いた。すると道の左側に灰色のコンクリートブロック塀が出現した。水姫はブロック塀の表面を見た。奇数段と偶数段でブロックの境目が半周期ほどずれている。このタイプの塀は、周期がずれていない座標平面タイプの塀と違って、端のブロックを半分にする必要がある。その分の費用が多少上乗せされるのだろうか。気を抜いて歩いていると、周囲の景色についてつまらないことを考える癖がある。
塀を歩いていくと、少し奥まったところに木製の門があった。スライド式のドアと同等の形をしているのだが、スライドするドア板には無数のスリットが開いており、向こうの景色が貫通して見える。門の上には小さな瓦屋根が乗っており、周りの支柱がそれを支えている。柱に張り付けられたネームプレートには神岡とある。明の自宅は広大な敷地を有した日本家屋なのだ。
ネームプレートの下に取り付けられた不似合いなインターホンを押すと、ややあって「はい」という電子音が聞こえた。通話の時よりもさらに角張り、ノイズの入った音だった。
「秋野水姫です」
「あ、まってて」
それから一分ほど待ったが、明が来る気配はなかった。水姫は門のスリットの間から覗いてみた。灰色の通路が奥まで伸びているのが見えた。その左右には、道路とは明らかに質の違う白っぽい砂が敷かれている。
奥から明が歩いてくるのが見える。歩きに合わせてゆらゆらと服が左右に揺れているようだ。スリットがノイズとなってモザイク画のようになっているが、歩き方に明の癖が出ていた。
門のロックを解除する音がして、スライド式の板戸が開けられた。今日の明は幾分かブルーがかった白のワンピースを着ている。凛とした表情で、何か決心をしたというような印象である。
「それ」
水姫が明の首元を指さした。首に巻かれた黒色の生地のチョーカーの中央に、小型の金のペンダントが縫い付けられている。
「これね、お母さんに貰ったんだ。昔」
「素敵」
「行こうか、こっちだよ」
敷石の通路を歩いていく。水姫の革靴が反響して周囲に吸収されていった。左右の砂は見たところ、それなりにさらさらとした質感のようだ。海岸の砂よりも多少粒が大きいという程度だろうか。
水姫の前を明が歩いている。ゆったりとした歩き方で、制服の時よりも動きが緩やかな気がする。水姫はキョロキョロとあたりを観察してみた。通路の左手には、ただ白い砂があるだけ、と思いきや奥の方は地面が湿った土色をしている。どうやら、白い砂は中央通路付近にしか撒かれていないらしい。右手側も似たような風景だっ

たが、建物の影になるあたりに物置や、井戸のようなオブジェクトが見えた。よく見ると井戸は薄汚れている。また、蓋がしてあり、上にスイカほどの石が載せてある。物置はところどころ、べこべこに凹んでいた。通路はおよそ三十メートルほどあり、やはり広大な敷地であることを実感する。

母屋は古かった。昔の邦画でしか見ないような和風の佇まいである。玄関は門と同じような板戸だが、曇り硝子になっている。少し昔の日本家屋の平均的な玄関である。左右へ目をやると、大きな窓がありそこから室内が少しだけ覗ける。

「年季が入ってるだろ」

「うん。こういうの初めて」

明は玄関を開けた。ガラガラという原始的な音が鳴る。内装もやはり、昔の邦画のイメージとそのままだった。靴を脱いで土間にそろえて置くと、周りの風景と靴のミスマッチが目立った。

薄暗い廊下を歩くと二人分軋む音がする。水姫の部屋へ向かう途中の部屋は、どれもあまり使われていないようだった。それなのに、壁や柱の傷は目立つ。水姫の正直な感想としては『襤褸いな』ということだった。神岡と言えば超巨大グループである。それなのに、令嬢である明の家は、こんなものなのか。

明の部屋に入らせてもらう。ほかの部屋はドアがなく開放されていたが、この部屋にはドアがあった。おそらくここだけ改造したのだろう。ドアを開けて中に入り、スイッチを押すと、暖かい光で室内が照らされた。まず目に入ったのは、大量の本である。壁に立てかけられた本棚は幅が一メートルほど、それが数台横に並んでいる。一台当たりの高さは明の身長よりも高い。それなのに、本棚の充填率は八割と言ったところで、要するに沢山の本が詰められているのだ。

本棚のタイトルに目をやる。一番右上から左に目線をずらしていくと、チャン『息吹』、ヘミングウェイ『老人と海』、サリンジャー『キャッチャー・イン・ザ・ライ』、コエーリョ『不倫』、ストーカー『吸血鬼ドラキュラ』、ジッド『狭き門』、ギュスターブ『ボヴァリー夫人』、パウル『ある神経病者の回想録』、サガン『悲しみよ　こんにちは』、エーコ『薔薇の名前』、ツルゲーネフ『初恋』と言った海外文学が立ち並んでいた。二段目には日本人作家の小説が収められていて、笠井潔『吸血鬼と精神分析』、角田光代『八日目の蝉』、五月雨三郎『寵児の書式』、二葉亭四迷『浮雲』、若林雪子『吸血鬼はここにいる』、谷崎潤一郎『細雪』、奈須黄名子『吸月姫』、三島由紀夫『鹿鳴館』、二階堂黎人『人狼城の恐怖』など……。

「すごい、こんなにたくさんの本、見たことない」

「驚いたかい？　実はね、ほとんどは父親からのもらい物なんだよ」

よく見るとところどころ本の背表紙は擦り傷があったり、シミがついていたりする。

次に目に入ったのは、壁に架けられた絵画だった。右の壁に、一枚だけ額縁に入れて飾られている。深海のような青は空を表している。近づくと、絵の表面の凸凹が目に入った。油絵なのだ。中央には真っ黒の円がぽっかりと開いている。

変わった絵だと思う。周りには自転車が浮いていたり、星々が花びらだったりと、かすかな幻想を描いている。水姫は、月並みな表現の感想が浮かんだ。それはまるで夢を描いているようなのだ。

本来月があるべき場所からはその姿がきえている。というよりも

隠されているというべきだろうか。青の上に黒で塗りつぶしているから、わずかではあるが月がそこにあることの意味を残している。月がないことを強調したいなら、青で塗ってしまえばいいのだ。

ところで、この絵には見覚えがあった。記憶の引き出しを開けようとすると、ほかの絵が脇の壁に立てかけられているのを見つけた。

様々な種類の絵がある。技法に関して言えば水彩画、水墨画、アクリル画など、描写の対象にカテゴライズすると、人物画、風景画、静物画、宗教画のようなものまで。一人の人間が描いたにしては、多彩なレパートリーである。

しかし、全体の印象としては、無味乾燥としたものだった。本と絵画とベッドと、書き物机があるだけで、かわいらしいぬいぐるみなどは一切置かれていない。喪仁田蘭の部屋には、自分の部屋を彩ろうとする意図が感じられた。しかし、明の部屋はそれがなかった。

明は自分のベッドに腰かけた。水姫も恐る恐るベッドに近づくと

「座っていいよ」と明が言うので、安心して腰を下ろした。

「事件の話をしよう」

明は枕元に置いてあった古そうな本を手でもてあそびながら話し始めた。

「吉村は、喪仁田のおじいちゃんのところに、三宅京子の事件の解明を頼みに来た。その際、鹿目辰巳という人物の名前をだしたことは確実だ。なぜだろう？　なぜ、三宅京子から鹿目辰巳の名前が出たのか？　僕の予想なんだけど、三宅京子は鹿目辰巳と仲が良かったんじゃないかな」

「そう……なのかな」

「実はこれには根拠がある」

水姫は明の顔を見た。無表情で淡々と語っていた。

「鹿目辰巳は、有名なピアニストだった。それなのに唐突に失踪してしまった。実はね、失踪する直前に行われたコンサートの映像がインターネットで配信されていたんだ」

「コンサートしてたんだ」

「そうなんだよ。今年の三月、僕たちが高校に上がる直前かな。ここら辺から、鹿目辰巳は表舞台から姿を消したんだ。後で見せてあげるよ」

「ねえ、明。なんで犯人は、死体にペンキをかけたのかな？」

「うーん」

明はベッドに倒れこんだ。スプリングが跳ねて水姫の身体に振動が伝わった。

「わからないなあ。死体を塗ることによって、犯人は何をしたかったんだろう」

「死体を隠したかったとか」

「死体を隠したいのなら、どこかに死体を持ち去ればいいんじゃない？」

「あ、そういうことじゃなくて」水姫は両手を左右振った。「ペンキで顔や特徴的な部分を隠して、身元をわからなくする、とか」

「ああ、うーん、でも、顔は目元しか隠れていなかったし、どうにも中途半端な塗り方だったし、それはないんじゃないかなあ」

「そう……。あ、でも、三宅さんが双子だったらどう？　顔が似ているなら、目元を隠して、制服を着せれば、なかなか気が付かないんじゃないかな」

「その場合、犯人は三宅京子の姉か妹が犯人かもしれないね」

「なんで？」
「顔のない死体のトリックは、だいたい入れ替わった人物が犯人なのさ」
「ふうん……」
「と、水姫がミステリらしいアイデアを出してくれたところだけど、実は三宅京子は一人娘なんだ。双子の姉妹はいない」
「なんで？」
「一条先生が教えてくれた」
「そうなんだ……」
なんだか少し、腹が立った。
それから事件のことを話したが、結局、現在わかっている情報の整理に収まった。
「そろそろコンサートの映像を見よう」
明はテレビの下の台を開き、一枚のディスクを取り出した。有形メディア媒体も今では珍しい。水姫もそこまで使わない。体外はクラウドサービスなどで無形のデータ送受信である。
ディスクをレコーダに読み込ませると、テレビの画面が録画情報に切り替わった。綺麗な見た目をした青年が出てくる。年齢は自分と二、三しか違わないはずだが、大人びた雰囲気だ。しかし、どこか、その顔には焦りの表情のようなものが浮かんでいるようだ。青年がピアノにたどり着くまで、拍手で迎えられる。
観客席のズームイン。
一列目と二列目の男女が映し出される。
「ここだ。この二列目の真ん中あたりの女性」
舞台上とは対照的に観客席は薄暗く、よく目を凝らさないと顔を識別できない。よく見るとそれは、確かに三宅京子の顔写真と似ている。人間の眼は、一般におよそ七十パーセントほどの鑑識眼を持つ。これは水姫の経験則だが、確かにその信頼区間には入るように思われた。
拍手の音は止み、鹿目辰巳がピアノに指を置く。よく見ると、ピアノに置かれた右手には、指が四本しかなかった。薬指だけが欠損している。そして、手先がわずかに震えている。一本指が欠損していることが、ピアノ演奏にハンディとなることはないのだろうか？いや、おそらくならないのだろう。なっていたら、鹿目辰巳はこの場に立っていないのだから。
一曲目の曲は、ピアニッシモの弱弱しい音階から始まる。これを基本として、高い音が主旋律を構成する。幾度か繰り返される三連符が心地よい。さらにその三連符を発展させ、力強い演奏で同じフレーズを繰り返す。そのフェーズが終わると、合間を縫って姿を見せたうつろな旋律は、まるであっちへいったりこっちへいったりと、胡乱な世界を歩き回るような印象を抱かせる。そんな曖昧な世界を抜けると、光に導かれるように高い音階。それでもやはり戻ってくる、終わりのない世界。
しかし、その世界観にノイズが入り込むように、ミスタッチしているのが、素人目の水姫にもわかった。やはり指の欠損のためだろうか？　いや、そうではない。鹿目辰巳は緊張しているのだ。曲の滑らかさに、ところどころ角ばった部分が見える。力がこもりすぎている。
初めの曲は五分ほどで終わった。拍手はまばらだ。観客も水姫と同じことを思ったに違いない。

「今のは、ドビュッシー作曲の『夢』だ」
二曲目が始まるのを、じっと待っていた。しかし、一向に始まらない。観客席から聞こえてくる咳の音、ざわめき、それらが顕著になってくる。鹿目辰巳を見ると、顎から汗がしたたり落ちるようだった。
突然、鹿目辰巳は勢いよく立ち上がった。ナーバスな顔つきのまま、躍り出るように舞台を飛び出していった。観客席のざわめきは大きくなる。以上を察知した運営側が、舞台の幕を下ろしたところで、映像は終了した。
「今回のコンサートは、鹿目辰巳のドビュッシー演奏会だったんだ。次に演奏される予定だったのは、ベルガマスク組曲『月の光』」
「月の光……」
「そうだ、僕が弾いてあげるよ。実はこう見えてもピアノを弾くのは得意なんだ」
「ぜひ聞かせてほしいな」
「まかせなさい」明は胸を張って偉そうにいう。
部屋を出ると、静かな雨音が聞こえてきた。開放的な日本家屋だからこそ、環境音がよく聞こえる設計になっているのだろう。廊下をさらに奥の方に進むと、縁側にでる。屋根に雨粒が当たる音が心地よかった。庭に降り注ぐ雨が草木を濡らす。雨粒の力積によって押された茎と葉は、自身の持つ弾性力で幾度も跳ねた。
縁側沿いの廊下に面した障子を開けると、畳の上に場違いに思える大きなグランドピアノが鎮座していた。
「そこらへんに座って聞いていてね」
明はそう言うが、座布団や椅子が見当たらなかったので、仕方なく立っていた。気にする風でもなく明は腰を落ち着けて鍵盤に両手を置いた。
その姿勢は、鹿目辰巳のものよりも様になっている。背筋はぴんと伸び、肩は落ち着き、身体の重心は腰に置かれている。
両手が動き出すと、第一音が紡がれる。こちらも弱弱しい音から始まる。ぼんやりとした明かりを浴びているような感じ。落ち着いた曲調だ。それから両手は激しく上下するフェーズがあると思うと、急にまた弱くなる。湖面に反射する月を思い浮かべる。湖面が激しく揺れ、円は歪む。揺らすのは誰だろう。その揺らす存在のおかげでドビュッシーはこの曲を弾くことができたのだろう。さらに弱い旋律。これが誰かの心象を表していたとしたらどうだろう。すぐにでも割れてしまいそうだ。そうして、明の演奏は零に漸近するほどの弱さで終了した。
自然に手が動き、静かな空間に破裂音がこだまする。観客は自分だけだ。こんな演奏を自分は独り占めすることができる。その贅沢に最大限の感謝をした。
「明はコンサートとかでないの？　こんなにすごい演奏できるなら、優勝間違いなしだよ」
明は苦笑いをしながら手を振った。「僕は、誰かに見せるためにやっているわけじゃない」
「ええ、もったいないなあ」
「僕は今のままでいいよ。それよりもさ」明は立ち上がって言った。
「今は事件の調査の方が大事だろ」
「あれ、そうだっけ？」
明はかまわずに自分の部屋へと歩き出した。水姫もついて言った。

その日はずっと明の部屋で過ごした。本棚に置いてあった本を、何冊か明から押し付けられた。それは、あの喫茶店の名前を有するアメリカ人推理作家の著作で、いろいろな国の名前が入っているシリーズものだった。明曰く、「とりあえず読もう」ということらしい。

五

二人は、街はずれにある教会へ行くことにした。なんでも、この聖ブラウン教会では孤児を世話していたらしく、鹿目辰巳が育った場所でもあるらしい。水姫の印象で言えば、その教会は寂れている。街のはずれにあるためほとんど誰も寄り付かないし、誰がいるのかもわからない。

明がよくいくあの海岸から、道のりにしておよそ五、六〇〇メートルほど離れている。鬱蒼とした森林の途中で曲がらずに、まっすぐ向かうと、突き当りに大きな広場があり、教会が建っているのだ。

すでに雨は上がっており、ひんやりとした空気が暑さを緩和させていた。それに、地面がコンクリートではないから、水姫の家の周りよりも過ごしやすいと思う。

教会はこぢんまりとしていて、三角屋根の頂点から、灰色の十字架が町内を見下ろしている。正面の扉を開けて、中に入ると、静寂がつまっているかのような礼拝堂が現れる。真正面の壁には十字架と、聖者の像、その上部にはカラフルなステンドグラス。曇り空の弱弱しい明かりがステンドグラスを通過して、床に色を投げかけていた。

「こんにちは」

明が言葉を投げかけると、周囲に反響して、零に漸近して消えた。何度か呼びかけると、奥の扉から何者かがのそのそと姿を現した。

「こんにちは」

「こんにちは」

「こんにちは」

三人の挨拶が反響した。背筋を伸ばしながら、老女が歩いてくる。おそらく聖ブラウン教会のシスターであろう。その歩き方から、年齢的には六十から七十歳くらいに思えた。じっと見てみると日本人らしい顔つきをしていて、皺の多さで実際はもう少し歳をとっているかもしれないと推測を修正した。

「どちらさまですか？」

「あ、秋野水姫といいます」

「ええと、僕たち、鹿目辰巳さんについて調べてるんです。神岡明と言います」

「神岡……」

シスターの女性はわずかに目を見開いた。

「もしかして、あなた、神岡優子さんの……」

「神岡優子は、僕の曾祖母です」

「まあまあ」シスターはにこやかな顔つきになる。皺がたくさんあるけれど、魅力的な仕草だった。「私、以前は神岡優子様に、大変にお世話になりました」

「そうですか。失礼ですが、あなたは……」

「シスター・バーバラと申します。私が幼い頃、神岡家へ女中として勤めていたのです」

「なるほど。それで……」明は頷いた。
その時、扉のきしむ音がした。水姫がそちらに目をやると、まさに扉が開き、中から誰かが出てきた。男女の二人組だった。
「吉村！　それに一条早雪先生」
「あれ、あなたたち、どうしたの？」
一条早雪はいつもの白衣は身に着けておらず、夏用のブラウスに黒いスラックスである。よく見るとスラックスの左右にはスリットが入っており、ふくらはぎが覗いていた。最近はやっているファッションである。吉村はというと、事務所で見た時と変わらずワイシャツ姿と手袋で、汗をかいている。
「君は、この間事務所にいた子だね」水姫を一瞥してから、明に目を向けた。「明の友達だったんだね。二人してどうしたんだい」
「こっちのセリフだよ。なんでここにいるの？」
「それはね……」
「それはね」一条早雪が食い気味に被せた。「三宅京子殺害事件に関して、鹿目辰巳さんが深くかかわっているという事実に、同じタイミングで至ったからなのよ」
「ああ、なんだ」明は長椅子に座り込んだ。それにつられて残り全員が、長椅子に円形に座った。
明はこれまでのいきさつを話した。シスター・バーバラは悲痛な面持ちになる。彼女はほとんど鹿目辰巳を我が息子として育ててきたに違いない。その友達が殺害されてしまったのだ。
しかし、『彩の輝き』から調査を命じられたという吉村黎はともかく、一条早雪はなぜこの場にいるのだろうか？
「なんだ、君たち、事務所での会話を盗み聞きしていたのかい」
吉村が頭を掻きながら、呆れた声で言った。
「僕は聞いてないよ。盗み聞きしたのは水姫だ」
「え？　いや、まあ、うん、そういうことにはなるけど」キラーパスを受け止めきれずに取りこぼしたと水姫は感じる。もともと盗み聞きしようと言い出したのは喪仁田蘭なのだが、結果的には同じことだ。
「僕らの目的も多分おなじだよ」と吉村。「鹿目辰巳さんがどういった人物で、どのように育ったのか、それを知るためにここに来たんだ」
「それに、うちの学校の生徒の話だものね」早雪が腕を組みながら言う。
水姫は空想を膨らませる。ひょっとしてこの二人、交際しているのではないだろうか？　一条早雪は見た目からして二十代半ばから後半である。吉村は三十台中盤程度だろう。別に交際していてもおかしくない。大多数のペアのうち、七十パーセントがこの年齢差に収まるだろう。水姫も平均的な女子高生だから、そういった話には平均的な興味があるのだ。
「あの、鹿目さんは、最近お姿が見えないのです」シスター・バーバラが困惑しながら言った。
「見えない？　いなくなった、ということですか？」と吉村が尋ねる。
「ええ……ピアノコンサートに行ってから、帰ってきていないのです」
「捜索はしているのですか？」
「いいえ、その、向こうから連絡が来るのです。『僕は元気だ』『心

配しなくていい』そのようなことを一言、二言。私が『顔を見せて頂戴』と言って、向こうに切られる、それの繰り返しです」
「シスター・バーバラ、お願いします。辰巳さんの捜索の役に立つかもしれないのです」
明が老女の眼を見て言った。バーバラは、うろたえた様子である。それも当然だろう。デリケートな話題は、そんなにペラペラと話すものではない。コミュニケーションが苦手な水姫でさえ知っていることだった。
「そうは言われましても……」
「お願いします」
明は頭を下げた。吉村と一条もそれに倣う。
バーバラはため息をついたあと、「神岡家の方の頼みですものね、わかりました」と言って、しみじみと話し始めた。
「辰巳さんは、何と言ったらいいか、様々な意味で非凡な子と言いますか。私は、かわいそうに感じてしまうのです。それというのも、辰巳さんが幼い頃、両親が失踪してしまったのです。たった一人、辰巳さんは、この教会の前で、ダンボールに入れられて置き去りにされていたのです。天使のように可愛らしい子でしたが、その子には指が一本ありませんでした」
「両親が消えてしまった理由は、ご存知ないのですか？」明が尋ねる。
「ええ、全く。しかし、幸いにもご両親は最低限の情報を置いていったのです。辰巳さんの首に架けられていた大振りのペンダントに、写真が入っておりました」
「写真？」
「ご両親が、赤子を抱いている写真です。写真はうまく接着されていなかったので、裏面を見ることができました。そこに誕生日と名前が」
「見せていただくことはできますか」
「申し訳ありませんが、それはできません」バーバラは、これまでとは違うきっぱりとした声で拒絶した。
「……そうですか。分かりました」明は素直に引き下がる。
「鹿目さんは」バーバラが話を再会する。「幼い頃から、教会の奥の部屋に置かれていたオルガンに興味を示しました。私がまず、簡単な曲を教えると、指のことなど全く気にせず、すぐに弾きこなしてしまいました。本人が、もっと楽しい曲が弾きたいというので、私は次々に楽譜を買って差し上げて、読み方や弾き方のコツを教えてあげました。辰巳さんはすぐにそれらを吸収していって、いつの間にか私よりも上達し、今ではコンサートに呼ばれるようにまでなったのです」
「すごい才能の持ち主だったんですね」
「そうですねえ。でも、私はそんなことよりも、両親を失ったあの子が、ピアノに向き合っているときは無邪気に笑っていることが何よりもうれしかったのですよ。
でもねえ、小学校、中学校から帰ってきた日は、あまりいい顔はしていませんでしたねえ。涙を流しながら、悔しそうに帰ってきた日もありました。なにがあったのかを聞くと、親がいないことや指が一本ないことをからかわれた、とか。そんなとき私は、悲しくなりましたねえ」
しんみりとした口調でシスター・バーバラはいう。

「あまり友達ができなかったんでしょうね。それでも、何人かはいたみたいですけどね。高校に上がってから、辰巳さんは私とはあまり口を利かなくなりました。当初は悲しかったものですけれど、今思うと、あれは高校生くらいの男子だとよくあることみたいですね。

そうだ、こんなことがありました。辰巳さんが、女の子を連れてきたんですよ。たぶん同級生だと思うんですけどね、かわいらしいけどしっかりした子で、私が女中だったころの、一番しっかりしていたお姉さまを思い出させました。去年の暮のことでしたから、辰巳さんは高校二年生の時ですかねえ」

「その女子生徒は、三宅京子、という名前ではありませんか」

明が尋ねると、バーバラは数秒間考えて「ああ、確かに、そうだったかもしれません」と言った。

「辰巳さんが『キョウコ』と言っていたような気がします」

「そうですか」

間違いない。三宅京子のことである。

「まさか、京子さんが殺されてしまうなんて……。それに、ちょっと前にも殺人事件が起こったと聞きました……恐ろしい……ああ、神よ！」

バーバラは、手早い動作で十字を切った。一条と吉村はじっと見つめていた。水姫には、二人の感情を読み取ることができなかった。

「バーバラ、鹿目さんになにか変わった点はありませんでしたか」

明は継続して質問をつづけた。まるで、ドラマ中に出てくる警察の取り調べのようだな、と水姫は思った。

「そういえば、最近流行っている、コンタクトレンズみたいなものがありますでしょう。あれを付けていましたねえ」

「ＬＥＮＳのことですね」一条早雪が口をはさみ、バーバラに説明をした。

「はあ、そういったものが出てきたのですねえ。最近の技術は私にはわかりませんもので……」

「それで、ＬＥＮＳを付けた辰巳さんに、何か変わったことは？」と明。

「なんだかねえ、びくびくとしたような気がしていたかもしれませんね。まるで怯えるような感じで」

「怯える？」

「と言っても、あの子には昔からそういうところがありましたから。私が辰巳さんのピアノ演奏会を見に行った時なんて、あの子緊張で震えてしまって。小、中学校でいやな目にあったんでしょうかねえ」

視線が怖いという人は一定数いる。鹿目辰巳の人生は、大多数の平均からかなり外れている。そのことで、周囲から遠ざけられたこともあったろう。それに精神が参ってしまうのだ。水姫にも経験がないわけではない。ただ、それをコントロールするのが多少うまいだけである。

「ありがとうございました」

この後、鹿目辰巳に関することをいくつか聞いていたのだが、事件に関連しそうなエピソードはないように思われた。ただ、バーバラの語りに母性のような温かさを感じて、全員がその場にとどまっていたのである。

教会を去る間際、シスター・バーバラの顔には、鹿目辰巳が失踪したことに対する不安と、長年ため込んできた様々な感情を吐露したことによる安堵が入り混じっていた。黒く塗りつぶされた森林の

影が、夕闇に変わりつつある空を切り取っている。土日を事件の調査のために費やしたわけだが、疲労感はなく、むしろ明のことについても知れたような充足感があった。シスター・バーバラに見送られながら、四人は教会を後にする。
「それじゃあ、私はこの辺で」吉村が片手を上げて小走りで去っていく。
「忙しい人だね」水姫が素直な感想を口にした。
「彩の輝きと神岡家に挟まれているからね」一条早雪が胸ポケットから煙草を取り出しながら言った。
「そういえば先生、吉村さんと知り合いだったんですか？」
「いや、知り合いってほどではないわ」
「知り合いってほどでもないなら、赤の他人ということですか？」
「そこまででもない」
曖昧な返事をすると、煙草を咥えて火をつけた。
「一条先生、探偵小説がお好きなんですね？」
来た道を戻りながら、明が尋ねると、一条は煙を吐いた。
「よくわかったわね」
「保健室の本棚に探偵小説が何冊かありましたから」
今時古めかしい紙媒体のドキュメントを水姫は覚えていた。明の家で見せてもらった小説も探偵小説だったから、二人はきっと話が合うことだろう。
「そう。最近のミステリはあまり読まないのだけれどね。兄が古典的なミステリ小説を沢山所有していたから、何冊か借りて読ませてもらっているの」
「僕も、まあそんな感じです。どうですか、そこらへんの店で話しませんか」
「いいでしょう。気分次第ではおごってあげます」
三人は適当に目についたファミレスに入った。店内は混んでいない。日曜の夜というのは、明日に備えて準備をする時間か、または明日を思って憂鬱になる時間に二分されるから、多くの人は家にいる傾向がある。
店内は禁煙のようだった。一条は煙草を最後まで吸いきってから入店する。禁煙で、一条の気分のパラメータは負の方向に傾いたはずだ。タダ飯が少し遠くなった、と水姫は失礼なことを思った。
「古典的な本格推理小説には二つのタイプがあると思っています」注文を終えてから明が切り出した。「一つは、謎自体は割とスケールの小さいものですが、些細な矛盾点に気が付き、そこからロジックを構成するもの。この場合は、ロジックの美しさ、強さが主に評価されます。もう一つは、トリックに重きを置いたもの。こちらはスケールがある程度大きくなる傾向があります。この場合、ロジックよりもトリックの秀逸さが評価の基準にされるでしょう」
「そこに異論はありません。個人的な好みを言えば、私はトリックが派手な方がすきだけどね」
「著名な推理作家の名前を拝借して、前者をクイーン型、後者をカー型と呼ぶことにします。まず、僕の立場をはっきりさせておくことにすると、僕はクイーン型を好んでいます。先生はカー型ですね」
水姫がこの間借りた本は、まさに前者のタイプのようだった。明のオススメするものを借りたのだから当然だが。
「僕が最近気になっていることというのは、カー型の探偵が提出した推理は、どの程度まで真理なのか、ということです」

「どういうこと？」
「推理小説においてロジックというのは、真理を探究する試みに用いられるわけですよね。つまり、論理に論理を重ねて演繹的に推理を行うことが本来の推理小説の営みなわけです。これは、クイーン型のミステリでは問題なく遂行されていると考えられます。しかし、トリック重視のカー型では、論理よりもトリックがメインコンテンツとなっている」
「続けて」
「例えば、とある密室殺人事件がテーマになっていたとします。登場人物たちは、その密室を解き破る方法を必死に考える。そして物語の最後には名探偵がいかなるトリックで密室から犯人が抜け出したのかを説明し、犯人が明らかになる。
　しかしこれは、名探偵が提示した真相の、可能性の一つにほかなりません。見破った真相が、真の真相であるのか、偽の真相であるのかは、誰にも判断できない。では、カー型の推理小説が推理小説として成り立っているのはなぜなのでしょう？」
「あなたの疑問は至極一般的で、合理的。だからおそらくは、これまで何度も議論されてきたことでしょう。
　クイーンとカーが作家デビューをした年台はどちらも一九三〇年前後。その先輩に、チェスタトンという推理作家がいる。ブラウン神父のシリーズで有名な彼の作家デビューは一九一〇年前後。クイーンとカー、両名が言及しているように、彼らはチェスタトンから多大なる影響を受けている。年代的に見ても、チェスタトンを読んで育った彼らが推理作家を志望したのもうなずけるでしょう。つまり、タイプの異なる二名の作家は、一人の作家の影響が二つに分かれ、相反する性質を帯びた結果なのよ」
「要するに、チェスタトンを読み込めば、この問題に解決を望めるわけですか」
「ところがそうはいかない。なぜなら、チェスタトンはミステリから受けた影響や、メタ意見を述べたわけではないから。確かにチェスタトンを読めばヒントは得られるかもしれないが、一度別れたものをどのように再定義しなおすかについては何とも言えないんだ。
　ではどうするのかというと、こういうのは大抵、クイーンやカー以降の作家の中で、二つの性質をうまく融合させたミステリを探せば、その潮流に対する回答が得られる」
「そんな作家が明確に規定されますか」
「じつはそうもうまくいかないのよね。ただ、カーの作品に登場する探偵・ＨＭ卿が、こんなことを言っている。『不可能状況を考える際、まずは殺人犯が、この不可能状況を作り出した動機を考えるのが重要だ』。なぜかというと、不可能状況を作り出した動機の考察をすれば、それが殺人の動機につながるわけだから、とまあこういうことをカーが言っているわけ」
「カー自身も同じことを考えていた節があるのですね」
「そうらしいわね」
「カーは、そこの論理が詰められないことは、ホワイダニットによって定めようとしたのですね」
「そういうことになる」
「なんだかパッとしないような」
「そう。だから推理小説というのは、完全な論理の世界には収まっていないの。ある程度は帰納法的な推理の仕方が展開されている」

「となると、名探偵の推理法にも関わってきますよね。論理型の探偵はカー型ミステリとは相性が悪く、直観型の探偵は逆に、クイーン型のミステリと相性が悪い」
「そうね。まあその両方が融合した場合もなくはない。そういう論評を読んだことがあって、論理の飛躍をあえて許すという方法。論理のアクロバットというんだけど、これはカー型のホワイダニットから逆算して論理を構築し、クイーン型に落とし込むことができる」
「ああ、なるほど。納得できました」
「まあ、唯物論的に考えれば、ホワイダニットというのは些末なことで、明のいうように、真の真理にたどり着いているとは言えないかもしれないわね」
「推理小説では、探偵の言うことが真理であるという暗黙の仮定が置かれているんです。だから、後期クイーン問題といった議論もされるんですね」
「だから、その仮定を外した時に、いかにして真理を規定するかは重要な課題になるのじゃないかしら」
「もしも、世界をシミュレーションによって駆動することができるなら」
　それまで黙り込んでいた水姫が口をはさむ。場はぴしゃりと、水を打ったように静かになった。より厳密にいえば、周囲の騒音がノイズレベルで、そしてノイズを無視できるレベルで、その場の沈黙は支配的なものとなったのだ。
「唯物論的に、世界の状況を描写し、コンピュータ上で動かすことができるのなら、そして、殺害現場やその他の状況を再現できるのならば」
「観測事実をシミュレーションによって明らかにしようという試み？」
　一条早雪は、表情を固定している。感情を悟られないためだろうか。
「たしかにそれなら……」明は口元に手をあて、考え込んでいる。
「確かに簡単な状況なら数値シミュレーションを行うことはたやすいかもしれない。しかし、実際の犯罪状況というのは、世界の動きと連動して偶然生まれた閃光のようなものよ。そう簡単にコンピュータ上で再現できるはずがない」
「でも、銀河の誕生を再現したシミュレーションはあります。これは重力相互作用によって規定されたN体シミュレーションですから、人間の数よりもはるかに多い天体の数のシミュレーションはすでに成功しています」
「無機物の場合で、しかも重力しか考慮にいれないなら成功するでしょう。でもこの世界は人間一人を動かすにも沢山のパラメータが必要なのよ。ミステリ的な状況を考えると、人数が十人程度に収まっても、パラメータは膨大になる。物理相互作用以外にも、人間同士の相互作用が存在する。唯物論的に考えるなら無視してもいいというわけ？　でも、この世界は唯物論だけで成り立っているわけではないわ。どうやって解決するつもりなの？」
「すべてを再現してしまえばいいではないですか」
　水姫の発言に、一条早雪は言葉を失った。
「人間の意思は、周囲からの相互作用を少なからず受けて変動している。しかし、周囲の他人もまた人ですから、何らかの相互作用を受けている。そのように考えていくと、やがては人間の誕生、生命

の誕生、宇宙の誕生までさかのぼることになる。私たちは、宇宙で生まれてきた元素によって構成されています。その元素に含まれる電子や素粒子の動きによって私たちの行動が規定されている。したがって、これらすべてをこの世界の境界条件と完全に一致させた数値シミュレーションを行えば、見えない部分で何を行われたのかを解明することができるのではないでしょうか」

「ふん、馬鹿らしい……」

一条早雪は立ち上がる。

「私は気分を害しました。帰ります。さようなら」

一条早雪の食べかけのハンバーグステーキがぽつりと残されている。水姫と明は向かいあって座りなおした。

「おこらせちゃったかな」

「君は一条先生が嫌いなのか？　この間といい」

「そ、そんなわけじゃないけどさ」

「あの先生、お金払わずに出て行ったよ」

「もったいないねこのハンバーグ、二人で食べちゃおう」

「当然だ」

日曜は奇妙な幕の閉じ方をする。嵐の前の静けさというべきか、今後起こりうる悲劇を妙に暗示させた。

六

そして数日後。

月の見えない夜に、鹿目辰巳は死んだ。

七

鹿目辰巳の死を知らされたのは、喪仁田蘭の部屋で学校の宿題を片付けているときだった。この日は珍しく明も参加して、雨木薫を含めた四人で宿題を終わらせようとしていたのだ。というのも、どこか気分の優れなさそうな明を見て、蘭が誘ったのだった。この数日、どたばたとしていたから無理もない。明は首に絆創膏を張り、時々手で押さえては顔をしかめた。蘭の方はと言えば、ここ数日間はとくに何事もなかったようだ。

宿題が終わり、みんなで喪仁田影像と話でもしようというときに、吉村黎が現れ、鹿目辰巳の死を告げた。

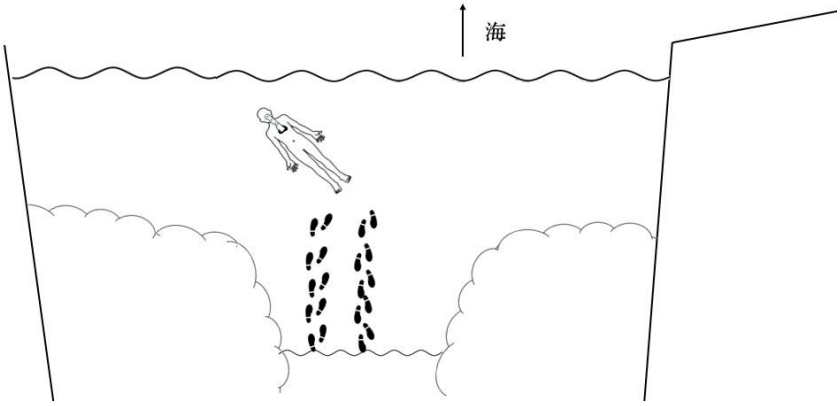
水姫と明の驚きようはすさまじく、明に至っては昏倒しそうなほど頭をふらつかせていた。

正直にいうならば、水姫は、三宅京子の殺害犯は鹿目辰巳ではないかと予想していた。当然の帰結だろう。おそらく、三宅京子と最後に会っていたのが鹿目辰巳である。そして、その鹿目辰巳は失踪している。どんなポジティブな見方をしても、鹿目辰巳への疑念は晴れることはなかったのだ。

喪仁田影像にこれまでの調査の成り行きを話し、さらには吉村が鹿目辰巳発見の現場を説明することで、その場にいた全員が二つの事件の現状を了解した。

事件の概要を聞いて、水姫はさらに驚愕した。その殺害現場というのが、明とよく訪れるあの海岸だったからである。

吉村が説明する。
「現場となった海岸で、鹿目辰巳は刺殺されていました。胸に突き刺さったナイフが原因だと考えられています。死亡推定時刻は夜中の〇時から二時の間ですね」
吉村はメモ用紙を広げ、現場の絵を描いた。
「海岸にたどり着くまでに、森林があります。森林に空いた道を通っていくと、視界が左右に開け、砂浜が現れる。この砂浜に、鹿目辰巳が横たわっているのを発見されました。この海岸は巨大な岸壁の間に形成された小さなもので、岸壁の間に森林と砂浜が収まっています。
特筆すべきことがあります。それは、砂浜に向かうまでの道に、犯人のものと思われる足跡が残っていたことです」
「足跡ぉ？」
蘭が怪訝な顔をする。
「そうなんです。こんな感じで、行きと帰りの往復で」
「それじゃ犯人すぐわかっちゃうじゃん」
「それが、この靴の持ち主がだれだかわかっていないのですよ。警察との協力の下で捜査をしています。といっても、警察は二、三人しか動員されていないようですが」
「なんで吉村さんが警察と協力して探してるの？　それになんでそんなに少ないの？」
「彩の輝きの治安維持隊として調査をまた命じられまして……、それに、神岡グループからも、この件は極力内密に、と」
「つまりじゃな」喪仁田影像が博士のような口調で解説をする。「鹿目辰巳くんは神岡グループにスポンサーを受けていたじゃろ？　そんな人が不祥事に巻き込まれたとなると、いろいろと面倒なんじゃよ」
「ふうん」蘭は吉村の方向に向き直る。「ちなみに、どんな靴跡なの？」
吉村は資料の入っていた封筒から、一枚の写真を取り出した。その写真には、砂浜に刻まれた一対の靴跡が掲載されていた。右足の小指の少し下の膨らんだ部分に、傷がついている。そして、土踏まずの部分に線が入っている。
「今時、紙の写真かあ」
「すみません。ＬＥＮＳでの情報共有は、ＬＥＮＳ使用者の間でしか行えないものでして」
「機械によわいのじゃ、すまんのう」
喪仁田影像は眼鏡を拭きながら言った。
「しかし、この状況を見てみると、いささか疑問に思う点がある」
「どういうこと？　おじいちゃん」



「鹿目辰巳くんはどこからやってきたのじゃろうな？」
あっ、と水姫は声をあげた。確かにそうだ。靴跡が犯人の分の行きと帰りしかない、ということは、鹿目辰巳の足跡が無くなってしまう。
「きっと、犯人は幽霊なんだ！」
「そんなことあるわけなかろう」
「現実的な解答をしてほしいな」
影像と吉村の両者から否定され、落ち込んだようだ。
「それじゃあ、次はあたしの番ね」雨木薫が身体をくねらせ、吉村に上目遣いを決めながら意見を言う。「この靴跡が実は鹿目さんのもので、犯人はその足跡を踏んでいった。鹿目辰巳を殺害した後、犯人が鹿目さんの靴に履き替え、砂浜を出て行った。犯人はそのとき、自分の靴を手に持っていた。これなら、どうかしらぁ？」
水姫は感心した。雨木薫は得体の知れない、頭の緩そうな人物だと思っていたのだが、その意見は大分堅実なアイデアだった。しかし、吉村は冷静に反論をした。
「それはないんじゃないかな。靴の上を踏んで歩いたら、土踏まずの部分の砂がつぶれてしまうことになってしまいますからね」
「それじゃあ、犯人は裸足でつま先立ちをして、土踏まずを踏まないように歩いた、これならどう？」
「砂浜が始まる部分から殺害現場まで十メートルくらいある。その距離をつま先立ちで、靴跡の狭い領域を歩いていくのはかなり難しいと思うな」
「そっかぁ。残念」
雨木薫は諦めて引き下がった。場が静まり返る。ほかに意見は出そうになかった。
「喪仁田先生、いかがですか。犯人はお判りになりましたか」
喪仁田影像は、でっぷりとしたお腹を椅子に沈ませていった。
「わからんのぉ、条件が足りなすぎる。それに、殺人現場はここから二、三キロは離れておる。老体には大変だよ」
「そうですか……」吉村は無表情で頷いた。さすがに落胆しているだろうが、顔には表さない。
この場はこれでお開きになりそうだった。明の様子を見ると、具合が悪そうに口をおさえている。
「私たち、帰ります」
水姫は荷物を持って立ち上がった。明を無理やり立たせようとする。その時、明の体重が水姫にかかり、二人はソファーから転げ落ちた。
「あんまり無理しないで。僕が車で連れて行くよ」
「ありがとう……吉村」
吉村の車は、事務所一階の喫茶店の目の前に停められていた。周りの寂れた空間に、傷一つないピカピカな流線形の車が妙に浮かんで見えた。車は海のように青く、車両後部のリアスポイラーは比較的大きい。これで空気抵抗を小さくするのだろう。前方から見ると、ナンバープレートの上に、赤いエンブレムが光っている。座席も赤い。水姫が後から調べたところでは、シビックという車種らしい。
後部座席に二人が乗り込み、吉村が車を発射させた。走行音は小さく、わずかな揺れの周期が妙に心地よくて眠ってしまいそうだった。明はすでに寝息を立てている。
「秋野さん、だっけ」吉村が運転席から語り掛けてくる。

「はい」
「明の親友なんだってね」
「……はい」
「ありがとうね」
「はい」
窓の外は、寂れている。アメリカの推理作家の小説に登場する架空の町と似ていると明は言っていたが、果たしてそうなのだろうか……。水姫は読んだことがないから判断はできない。駅から離れると、遠く離れた家々の窓から漏れる明かりが集まって、視界の横軸に沿って移動していく。灯篭流しのようできれいだなと思った。実際に動いているのは水姫の視線の方なのだが、物質の関係とは常に相対的なものである。
車の前方に目をやると、バックミラーのそばにストラップがぶら下がっていた。アルファベットのSに横棒を加えたような形だ。『彩の輝き』のエンブレムである。信者は全員、何らかの形で所有している必要がある。中には入れ墨として肌に刻む人もいるという。
突然、車のスピーカーから曲が流れ始めた。古めかしい男性ボーカルで、水姫でさえ聞いたことのあるほど、出だしが有名な曲だ。どこか懐かしさを感じさせる曲調、そして音質だった。吉村がLENSを操作して曲をかけたのだろう。
「吉村さんは、LENS使用者なんですね」
「そうだよ。便利だからね。喪仁田先生は使えないみたいだから、先生の所に行くときは紙の資料を作っていくんだけどね」
LENSの音声解析ソフトを使用すると、一九六〇年台の曲だということが判明した。視界に歌詞が表示される。暗闇の中にいてもつながることのできる勇気の曲だ、という印象を抱いた。ずっと昔のものを好むという点では、吉村は明とそこまで変わらないのかもしれない。そして、曲に込められた情景のあまりの野暮ったさを、水姫は嫌いではない。
「あの、吉村さんは以前、神岡家と親しい関係だったと、明から聞きました。その、現在は……」
「ああ……」吉村は水姫を横目でちらりと見た。「聞きたい？」
水姫は少し躊躇ってから、「はい」と答えた。
「うーん、そうだなあ」吉村は両サイドの窓を開けてから、左胸ポケットから煙草の箱を取り出した。片手で器用に箱を開けて、中に入っていたものを口に咥え、ライターで火をつけた。
「煙草が最近は高くなっていけないね。僕がガキの頃はひと箱四〇〇円だった」煙を外に吐き出しながら吉村が言った。微量の煙が窓から逃げ切れず、後部座席まで循環してきた。水姫は顔をしかめた。
「神岡家はね、良い家庭だったと思うよ。傷ついた僕を優しく受け入れてくれたし、それにお給料は良いし、明が僕になついてくれていたのは嬉しかったな」
吉村は煙を吐き出してしみじみと語り始めた。
「神岡家に勤めるようになったのは今から十五年くらい前だった。さらにそれから五年ほど前、大学生だった僕には、交際していた女性がいたんだよ。僕らはお互いを愛し合って、いつかは必ず結ばれるものだと信じて疑わなかった」
人が過去を語るとき、どうしてこんなに俯瞰的な口調になるのだろう。人間は常に情報を更新して生きる生物だ。過去を達観して他人に語れるほど余裕がある人なんていないのではないだろうか。吉

村の後頭部を見ながら水姫はそう思った。
「こんな言葉を知っているかい？　『あの坂の上のお屋敷には吸血鬼がいるらしい』」
「あ……」
事務所で、喪仁田蘭が言っていたことだ。あの時は吸血鬼なんているわけがない、と思って即座に切り捨てた。否、今だってその考えは変わらない。だから吉村の口から再びその言葉を聞かされて、身体が固まった。
「僕たちはその言葉が気になって、坂の上の屋敷に行ってみようと思ったんだ。坂の上にあるのが神岡屋敷だった。はじめは彼女は照れくさそうに笑うだけだった。しかし、坂を上っていくとだんだんと具合が悪くなっていくように見えた。僕は歩みの止まった彼女を連れて家まで帰したんだ。
数日後に僕が彼女のもとを訪ねると、なんだか様子がおかしかった。目つきがいつもより鋭い感じがして、イライラしているような、ちょっと近づきがたい感じがしていた。
『どうしたんだい？』
と僕が聞くと、鬼のような形相でこんなことを言った。
『うるさい！　あんたがいるせいでこっちは大迷惑なのよ！』
ってね。それから僕は追い出されて、途方に暮れたよ」
「どうして、そんなことに？」
吉村は水姫の方をちらりと見て言った。
「それがわからないんだ。不吉な噂話を確かめるために彼女を連れて行ったせいかもしれない。
途方に暮れた僕は大学にもいかなくなり、毎日放浪生活さ。大学の勉強なんか手につかない。自堕落な生活を繰り返したよ。
そんな時、あるものを見てしまった。僕を捨てた彼女が、見知らぬ男と腕を組んで歩いているところをね……」
水姫の角度からは吉村の斜め後ろしか見えない。もしかしたら煙草の灰を窓から捨てているかもしれないな、と思う。
「僕は打ちのめされてしまって、もうだめかと思ったよ。だからね、僕はこう思うようにしたんだ。『彼女がおかしくなったのは、吸血鬼の呪いだ』ってね」
「え？」
「そう、呪いだよ。そう思わないと説明がつかないじゃないか。彼女は吸血鬼の呪いに侵されて、正常な判断ができなくなってしまったんじゃないか、この考えが……熱ぁっち！」
吉村がいきなり右手を大きく動かした。どうやら窓の外に煙草を放り投げたようだ。
「しゃべりに夢中で、煙草が短くなっているのに気づかなかったよ。ああ、熱かった。とまあ、とにかく、ダメになっていた僕は、そのあと神岡家に拾ってもらって、奉公をすることにしたんだ」
「なぜ、神岡家に？」
「明の父親が大学の助教をやっていたんだ。その人と授業で仲良くなってね、居候させてもらいながら、神岡の企業の下っ端として働いていたんだ」
「そうなのですね」
「でも、この出会いは必然だったと思っているんだ。実は、僕が彼女に捨てられてから、神岡家に雇ってもらうまでの期間に『彩の輝き』に入信したんだ。吸血鬼の呪いが恐ろしかったから、それに対

抗できるようにね。毎日祈りをささげて、ちょうど入信から一年経った日、神岡家に雇ってもらえた。偶然とは思えないだろ？」
「そうですね」
「これも奇跡だと思って、僕は神岡家と彩の輝きのどちらにも尽くしてきたつもりだ。だから、今の状態にはそれなりに満足しているんだ」
水姫はだんだんと眠くなってきていた。明と一緒に眠ってしまおうか……と思う。
窓から見える風景は、次第に記憶のデータに収束して、最後には完全に見知った土地になっていた。眠る暇もなく明の家の前に着くと、その場で水姫もおろしてもらった。
「いいのかい？」
「はい。ありがとうございました」
「気を付けるんだよ」
そういって吉村は去っていった。

明の家の敷石を歩いて、玄関までたどり着いた。
「水姫……」
「明、あまり無理しないで。家の人は？」
「どっちもいない……」
「え？　どうして？」
明は黙り込んだまま、水姫の瞳を見つめていた。表情から感情を読み取るのは、現象論的な考察が必要になる。水姫にはまだその能力はない。
「水姫、この間、僕はシスター・バーバラに会ったんだ。それで、鹿目辰巳のペンダントを見せてもらった」
「そうなの」
「その写真を見て、驚いた。鹿目辰巳はね……」
頭部にわずかな力積を感じる。次はむき出しの腕。見ると、皮膚はぬれていた。雨は次第に勢いを増す。二人は家の中に入った。木の匂いが懐かしく感じる。世界に満ちている音は、夕立の激しいノイズと、二人が廊下を歩く軋み音だけだった。
明を自室に連れて行き、着替えを手伝い、髪を乾かした。布団に寝かせてやると、よほど疲れていたのか、明はぐっすりと眠りこんでしまった。
結局、明から話は聞き出せなかった。鹿目辰巳のペンダントの写真には、何が写されていたのか、未だに不明だ。
雨が止むまで、雨宿りさせてもらおう。壁にかかった時計に目をやると、すでに午後八時が近い。親が心配しているだろうと思い、電話をした。旧型の非接触型コネクトデバイスを、水姫は学校でそこまで使う機会がない。真面目なのだ、と思う。
しかし、雨はなかなか止む気配を見せない。じっとしているのも何なので、部屋の隅に置かれていた絵の群をじっくり見させてもらうことにした。前回来たときはあまり詳しく見ることができなかった。
やはり、どれもレベルの高い絵である。それぞれの絵のテーマはわかりやすいし、それに沿った技法が用いられている。ところどころに癖がありつつも、絵の全体を見ると、見事な調和をなしているのだ。
ふと絵を裏返してみた。白いキャンバスの右下に、日付と署名が

記されていた。水姫はそれを見て、またしても驚愕した。これらの絵は、すべて明の作なのである。

明を起こさないように、静かに部屋を出た。アトリエがどこかにあるに違いない。家中のふすまを開けて、中を確認して閉める。この作業を何回も繰り返し、ついに探り当てた。アトリエは廊下を進んで突き当りにある大きな部屋だった。中に入ると、薄暗い部屋のなかに、様々な塗料の匂いや黴臭さが入り混じっていた。無造作に重ねられたキャンバスの山々は、骸のようでもあり、繭のようでもある。屋根にあたる雨音が際立って聞こえた。

アトリエの奥にイーゼルに建てられた油絵。

そこに掛かった、ひときわ大きいキャンバスを手に取った。

そして水姫は確信した。

天才だ。

まさに天才だ。

明は、天才なのである。

それは、『脳』と名付けられた絵だ。一見すると、黒い背景に点が描かれているだけに見える。しかしそうではない。

一目みて、その趣旨が理解できた。

人間が星々の連なりに星座を見出したように、その点群にはつながりがあるのである。しかも、二次元平面にとどまらず、三次元空間の立体的な線のつながりが暗闇の中に浮き上がってくる。

すさまじい観察力と表現力が無ければ、こんなのは描けない。

あらゆる視点から世界を見ることができる。

神の視点といってもよいものだ。

視界がくらくらとする。

……。

……。

すでに雨の音は止んでいた。

水姫はアトリエを出た。ふらつく足取りで廊下を歩き、明の部屋のふすまを静かに開ける。自分の荷物を持って部屋を出た。明の顔を見る気にはならなかった。

玄関のたたきを見ると、靴は自分のものと明のものだけである。そういえば、家の中には他者の気配がない。明の家族はどうしているのだろうか？

そろそろと下駄箱を開けてみる。靴が何足か入っている。ブーツやスニーカーなど、一般的な靴だった。

鹿目辰巳の事件のことが脳裏によみがえった。砂浜に靴跡が残っていたという。よもや、そんなわけはない、と思いながら、靴の裏を見てみる。……あった。右足の小指の下あたりに傷がついており、かかとの部分が段差になっていて、土踏まずが隙間になっている。

まさか……。

そんなはずが……。

……。

……。

水姫は隠れるように明の家から出た。低い空には、水姫をあざ笑うかのように、細長い月が上りかけているところだった。

八

次の日、明は学校に来なかった。

九

水姫は久しぶりにＬＥＮＳを使った。やはり眼球に異物を装着するのは慣れない。が、二度目ともなると操作も身についてきた。

再び目線で操作をして、アングラ系掲示板サイトに潜る。著名なピアニストの殺害というセンセーショナルな話題なだけあって、鹿目辰巳に関するスレッドがいくつも立ち上がっていた。その中には死体発見後すぐに様子を見に行ったと思われる投稿もあり、現場写真が鮮明に移されていた。

吐きそうだ……。

撮影されたのは、事務所で鹿目辰巳殺害の知らせを聞いた日の朝方。鹿目辰巳は仰向けに倒れており、胸には銀色のナイフが深々と突き立っていた。様々な角度から移した写真がある。確かに、足跡は生きと帰りの二本しかない。その足跡には傷がついている。上から見下ろした写真があり、わずかに頭が海の方を向いていた。

新しく得られた情報が二つある。一つは、頭の方がわずかに濡れていること。頭髪が濡れて頭に張り付いたような感じだった。

もう一つは、鹿目辰巳の右手付近の砂に刻まれた文字列……。

拡大された写真には、明らかに人工的な、意味を持つ文字列で表されていた。

『ハル』

水姫は、身体から力が抜けた。自分の椅子にもたれこむ。接地部分を通して気力が逃げて行ってしまったようだった。

どうしよう……。

明が殺したのだろうか……。

証拠が多すぎる……。

わからない……。

水姫はふらふらとベッドに転がり込んだ。

時間が解決してくれるだろうか……。

私は……どうすればいいのだろう？

私は……。

明は……。

水姫の意識は、失意のまどろみへと飲み込まれていった。

そして、夢を見る。

ワタシとハルは夜中に公園に集まって、なぜだか目的のない家出をしているのだ。

街灯にイボタガという蛾がゆらゆらと飛んでいた。ワタシが蛾を気味悪がっていると、ハルは指の先に蛾を止まらせ、

「この蛾の羽模様を見てごらん」

そう言って羽の模様が実は綺麗であることについて説明していた。
それでもまだ少し気持ち悪い――そう言うと、
「見たくないものは見なくてもいいんだよ」
と言って蛾を逃がした。
ワタシたちはまず、素晴らしい神社に行こうとした。なぜだか神社がとても尊い場所だと思えたのである。
その神社は見たことも聞いたこともなかったのだが、ハルについていけばたどり着くだろう、そう信じてワタシは歩いた。街の明かり一つない、月明りと星空に照らされた道だった。夜中の星はとても綺麗だった。その世界のワタシとハルは大都市に住んでいて、夜中でも明るすぎて一度も星を見たことがなかったのだ。
初めてみた星空に深い感動を覚えながら、いつの間にか川のそばを、せせらぎとともに歩を進めていた。環境音と、ワタシたちの足音と、話声しかない。
やがて神社に到着した。神社は満開の桜が吹雪のように舞い、花見をしている客が騒いでいた。甘酒をもらってハルと一緒に飲んだ。とても甘い、ワタシはそう言った。
境内で参拝をしていると、その行為は新たな世界に入り込むための儀式のように思えた。参拝が済むころには夜が明けかけていて、朝日が空に紫から白への見事なグラデーションを与えていた。
それから季節は変わり、ワタシたちは梅雨の雨の中、バス停で紫陽花とカタツムリを見つめていた。
「梅雨って言う字は綺麗だ。それが意味することも、『ツユ』っていう響も綺麗だから、僕は雨が結構好きなんだ。大多数の人は、雨を嫌っているふりをして、心の奥底では雨を信仰しているんだよ」
よく分からなかったがハルがそう言うのなら多分そうなのだろう。
バスが到着してワタシたちが乗り込むと、乗客は黒い猫ただ一匹だった。
「猫だ」
「なんだか十九世紀末のイギリスに居そうだよね」
ハルはそう言って猫を膝の上に載せた。
雨に濡れて寒かったワタシは、いつの間にか隣の座席に座っていたハルの肩に頭を乗せ、眠ってしまっていた。
目が覚めればそこは十九世紀末のイギリス、ロンドンのようだ。肌を刺すような冷たい空気に、吐いた息は白く変わる。雨は降り続いていた。
洋風のクラシカルな雰囲気が街中から感じられる。レンガ、煙突、誘蛾灯、敷き詰められたタイルはまさにヴィクトリアン様式を全面に押し出した、装飾の芸術だった。
そうだ、これは記憶の残滓が見せる幻なんだ。その通りだよ、というハルの声。
街を歩く男性は、ミズキの想像する英国紳士そのもの姿だ。黒のトップハットに外套、そして権威を示すためのステッキを手にしている。
「そこの馬車」
目の前を走っていた馬車をハルが引き留めると、御者が近づいてきた。
「へい、お運びいたしましょうか」
「たのむよ、●×△へ」
脳が言葉を認識しなかった。不思議だなあとミズキは呑気に思っ

た。
　馬車に乗り込むと、少しの揺れとともに走り出した。
「この――ロンドン――産業革命の――。価値観の――創作物は今までとは――装飾華美な――多く、大衆に――理解――ような作品も多く――。また全体――多ければ――から、アバンギャルド――理解され――賑やかな芸術も――」
　つらつらと語るハルの言葉が、自然と聞き流される。ハルの横顔は、しゅっとして美しいと思う。
　オペラハウスに到着し、ハルが慣れたように扉を開けた。中からは小気味のいい軽やかな音楽が流れてきて、ドレスを着た女性とタキシードを着た男性のペアが何組もいる。皆が音楽に合わせて優雅に舞踏していた。
　オペラハウスの内壁にはさまざまな絵が飾られている。綺麗なものからおどろおどろしいものまで沢山あった。よく見ると、ミズキの記憶に、ちゃんと記録されているものだ。
「さあ踊ろうミズキ」
　いつの間にか着替えていたワタシたちは踊った。タキシードを着たハルがワタシの手を取って導いてくれる。ハルの中性的な顔立ちとタキシードは見事に調和して、遠目でみたら男性と見間違うほどの麗人と化している。踊り慣れた様子でハルがワタシの手を引いてくれる。そのことにドキドキする。舞踏なんてしたことがないのにワタシはうまく踊れた。
「ニャー」
　黒猫が私たちの周りを跳ねまわっていた。私たちを中心に他の人たちも舞踏をする。ワタシはハルと踊れるのが嬉しかった。
「ニャー！」
　突然、黒猫は驚いたように飛び上がり、扉の方へ駆けて行った。どうしたのだろう？　そちらへ目をやると、黒い影らしきものが大急ぎで扉を開け、逃げていくのが見えた。黒猫はその後を追っていった。
「待て！」
　ハルが素早い動作で追いかける。何が起きたのかわからなかった。ワタシがその後に続こうとすると、ドレスの裾を踏んづけて転んでしまった。裾をつまみ上げてのたのたと走っていく。ハルの姿を見失わない程度に早く走った。雨が冷たく感じられる。ドレスが雨でぬれてしまうのを構わずに足を動かした。
　路地裏の曲がり角から、ニャア……と弱弱しい鳴き声が聞こえた。先ほどの黒猫の鳴き声。よたよたと出てきた黒猫を見て、背筋が凍った。
　血――。
　猫が歩いた後から、点々と血の足跡が判子のように押される。ワタシは猫が歩いていくのをじっと見つめていた。足が硬直していたから動くことができなかった。
　ぞわぞわと首筋に走る悪寒を堪え、何とか歩を進める。
　路地裏には血だまりと、倒れたハルの体と、濃密な闇に嗤う影があった。
「だ、誰……！」
　声が震えて、体がうまく動かなかった。その影はよく知っているようで、しかし決して知りたくないという生理的嫌悪を抱かせる。
　ハルの死体を見下ろす。仰向けに倒れているハルの胸には刺し傷

があり、血がどくどくと湧き水のようにあふれ出ている。
眼――。
眼は、ぽっかりと穴が開き、空洞の奥の肉に、一本の小型のナイフが突き刺さっていた。
――くり抜かれたんだ……！　あのナイフで……！
恐怖と怒りが渦を巻き、それは吐き気としてせり上がってきた。
あの影はまだそこに佇んでいる。
復讐心に駆られる。
殺す。
ワタシが殺してやる。
殺してやる。
殺して吐き気を収めなければいけない。
これは自己防衛感情なのだ。
殺意というのは、殺されないように殺すという気持ちだ。
殺意だけを持って近づいた。
その影の顔を見て、ワタシの脚は唐突に止まった。
その影は厭な顔をしていた。
雨の音が強かった。
うるさいなあ――。
瞬きをする。
そこは学校になった。学校の廊下で、ワタシとハルは腕を組みながら歩いていて、幸せな心地だった。
冬は日が落ちるのが早く、放課後の学校は窓から差し込む夕日に照らされていた。
すでにほかの生徒の姿はなく、ワタシたち二人だけの世界となっている。
「帰ろうか、ミズキ」
「うん」
階段を下りて玄関へと向かう。階段を降りる音、床と上履きの擦れる音、細やかな息遣い、言葉、環境音だけで成立した儚い世界。
ここはワタシのよく知っている学校ではないようだ。いつもの学校よりも少し古臭く感じる。玄関を出て周りの建物を見るとやはり古い感じがした。
学校の門から坂を下っていく。夕日は沈みかけていて、空は紫から夕色への見事なグラデーションを成している。その上に、雲が夕日の逆光によって墨のようにべったりと塗られていた。雲と雲の合間には点々と星が散らばっている。
「あ、星座。あれ何座だろう」
ハルが空を見上げていった。
その星座の形は何かで見たことがある。有名な星座だ。
空には他の星より特別明るく光る星が点在し、それを空想の線で結ぶと大きな砂時計が現れた。
「星座とは、人が点群に見出した鏡のようなものだね」
息を吐き出すと白煙のように上へと昇って行った。なぜ、寒いと息が白くなるのは、普遍的な現象なのだろう。十九世紀ロンドンでも、現在でも。
踏切にさしかかるとライトが赤く点滅してカンカンと規則的に鳴り始めた。
この音はなにかしらの催眠効果があるに違いない、ワタシはよくそう思う。この音を聞くと、少しぼうっとする。

歩を止めたハルが口を開いた。
「僕は、嘘が嫌いなんだ。それは僕が君のことを好きだからだよ」
突然何を言い出すのだろうと思った。まったく文脈が合っていないし。好きをライクととらえるかラブととらえるか、そこが問題なのか。でも嘘が嫌いなこととどうしても結びつかない。不思議な気持ちだった。
「そろそろわかってきたんだ。この夢は、僕が――――――――――――――――」
僕が、何。
通り過ぎる電車の轟音に、ワタシたちの間に満ちていた音は乱されて何も聞き取ることができなかった。
通り過ぎた後、強い風が吹いて髪が舞い上がった。
遮断機が上がるのと同時に再び歩き始める。
階段を上り、ワタシは歩道橋の中央で立ち止まった。もう日が完全に沈みかける瞬間だった。いつの間にか腕は解かれ、ハルはワタシの先で、歩道橋の階段を降りようとしている。
「どうしてハルはそんなに誠実でいられるの」
ワタシは唐突に訊いた。
本心からの言葉だった。ワタシはハルが嘘が嫌いなことを知っていた。ハルが他人の嘘を許さないということは自分にも許さないということだ。決して嘘を吐くことがない彼女は昔からワタシの眼には誠実に映っていた。
彼女は他人に流されることがなく、個として自分を持っていた。
ワタシは自分が嫌いだ。個などなく、なんとなく環境に流される埃のような人間だ。何者でもない自分が昔から嫌いで仕方がなかった。そんなワタシが彼女に好意を抱いたのは必然だ。ワタシはワタシをワタシではなくしてくれる相手が欲しかったのだから。
「それは、本心？」
「え……」
ハルは階段の目の前でこちらを振り向いて言った。
「君は君自身が変わるきっかけを僕に求めているんだろう。でもそれは本当のことかな。僕は、別に君に変わってほしいなんて思っていない。ここはミズキの夢の中なのに、僕がそう思っているのは変じゃないのかな」
「どういうこと……」
「つまり、君が僕に求めているのはこういうこと」
ハルは手を目の前にかざしたと思うと、力を込めて、自分の眼に指を突き刺して、抉り出した。さらさらとした鮮やかな血が滴り落ちる。
ハルはバランスを崩してフラフラと揺れると、階段を転がり落ちて、体中から血を流して、腕と脚を変な方向に曲げて、動かなくなっていた。
「ハル！」
どういうこと。どういうこと。どういうことなの。三回同じ言葉を繰り返し、ワタシはその場にへたり込む。日はもう沈んでいるのにワタシの影がはっきりと見えた。階段の前に落ちた二つの眼球が、ワタシを見つめているような気がした。
ハルは、狂ってしまったのか。
人は、こうも簡単に狂ってしまうのか。
いや。

案外、簡単に狂うものなのかもしれない。
目が乾く。
瞬きをした。
ミズキたちは森とも林ともつかない木々の合間を抜けて、見晴らしのいい小道を進んでいた。とても明るい夜だった。
進む方向から見て右手にはとても大きな満月が見える。月は全身を包むかのように大きく、青白い光を放っている。まるでファンタジーの世界のようだ。
ワタシはハルと一緒に道を進むミズキを見ている。ワタシは二つに分かれていて、ワタシは影だった。ワタシじゃないほうのミズキがハルの車いすを押しているのを、眼というスクリーンを通してみているようだった。
ミズキとハルを横から見てみると、二人は大きな月をバックに小道を歩いていた。二人は月明りでほんのりと白く光っているように見えた。
ミズキ、そう呼ぶ声が聞こえた。
「僕は綺麗な世界しか見られない。人が見る世界は人によってさまざまだけど、僕はその世界が人よりすこし綺麗に映る。それだけ」
「そうなんだ、羨ましいな」
「できることなら見せてあげたいな。そうだ、僕が死んだら僕の眼を君に移植するといいよ。綺麗に見えるはずだ」
「なに言ってるのハル。縁起でもないこと言わないでよ」
クスクスと笑うミズキとハル。ワタシは幸せそうな彼女たちをじっと見つめているだけだ。ワタシは嫉妬していた。
彼女の瞳は綺麗だ。まるで月のように輝いて美しい。見た目が美しいと見る世界も美しいのだと思った。
二人はどんどん進み、やがて再び森が現れた。森の中は草木が邪魔して、車いすで進むには難しいようだ。
ハルの病気はとても重いようだ。やせ細り、車いすに沈み込むように深く座っている。だが、苦しそうな様子はない。
でも、顔は綺麗なままで、ワタシのよく知っているハルの顔と同じだった。
森の中に、小さい広場のような場所を見つけた。太い一本の木を中心に草が少なくなり、ところどころ茶色い土が剥げ出ている。
大木は二人を歓迎するように神秘的な香りを放ち、意思を持っているかのように微小な空気のゆれを作っている。
ミズキはハルを支えながら車いすから降ろすと、太い木のそばに座らせた。ミズキもその横に腰を下ろす。
「やっと到着した。別れの前にこれてよかった。この世界一美しいと言われる宝石の木を僕の墓標にしよう」
「そうだね。ふふ」
月明りが広場へと差し込む。二人は肩を寄せ合い、スポットライトのように月光に照らされている。
ミズキ、とハルが言う。
何、とミズキが答える。
「ありがとう」
そしてハルは眼を閉じ、一言
「綺麗だ」
と呟き、宝石のようにきらきらと固まってしまった。青白い光を反射して、世界一美しい木にふさわしい輝きだった。

ミズキは頬に一筋の涙を流しながら目を閉じた。
水姫は頬に一筋の涙を流しながら目を覚ました。

十

放課後、水姫は学校の保健室へ向かった。一条早雪はデスクでコーヒーに沢山の角砂糖を入れているところだった。
「こんにちは、先生」
「あら、今日は眼鏡をしていないのね」
水姫はパイプ椅子を広げて座る。カーテンの向こうのベッドからは人の気配を感じない。
「この間は怒らせてしまってごめんなさい」
「いいえ、むしろあなたのアイデアに感情を乱してしまった私の方が悪かった。あなたの、数値シミュレーションによって犯行現場を再現しようという試みは、壮大だけど面白いと思う。ただ、私が個人的に好きになれないだけ」
「確かに私も、後になって考えると無謀すぎるアイデアかもしれないと思いました」
「私ね、探偵が好きなの。かっこいいじゃない。トリックが派手な方が好きだけれど、論理型のミステリも本当は好きなのよ」
「その気持ちは、わかります。この間、明に貸してもらった本は全部読みました」
「そう。探偵というのは、本格ミステリを構成する主要素の一つと言ってもいい。なぜなら探偵の存在は、その小説における解答だものね」
「はい、読んでいてそう感じました」今日の本題はそんなことではないのだが、一条のミステリ談義が始まってしまったので、仕方なく水姫は話に付き合うことにした。
「しかし、私はこう思ってもいる。探偵とは、犯人の裏の顔だとね。
本格ミステリとは、犯人と探偵の犯罪ゲームなのよ。犯人と探偵が、盤上で手がかりを操作しながら相手を打ち負かすゲームを行う。それが本格ミステリの醍醐味でもある。
犯人は、なぜ密室を作るのでしょう。完全犯罪を狙いたいなら、人の多い通りでこっそりと殺すとか、死体が見つからないようにするとか、いろいろある。不可能状況を作るなんて言うのは、異常を周りに示すようなもの。
それはね、犯人が探偵に頭脳ゲームを挑んでいるから。だからね、犯人と探偵は、物語における特権者でなければならない。わかる？」
「ええ、なんとか」
「犯人と探偵は、犯罪の真実を持ちながら、周囲の動きを見ている。本格ミステリとはまるで、パノプティコンみたいな構造を持っているの」
パノプティコンとは、昔の哲学者が考えた刑務所のシステムである。監守がいる塔を真ん中に、囚人たちはその周りの円形の部屋に収監される。監守からは囚人たちが見えるが、囚人たちからは監守が見えない。囚人たちは常にみられているということを意識しながら生活をすることで、自主的に習慣レベルが向上するという仕組みである。

「犯人と探偵は、一方的に登場人物を監視している。登場人物達は、犯人や探偵に翻弄されながら、物語という檻に閉じ込められている、そういうわけですか」
「そういうこと」
「でも先生、私は一つ疑問があります。先生の言葉では、探偵と犯人の二項対立のように感じるのですが、これは犯人が卓越した頭脳を持っているという仮定に基づいているように思います。確かに、頭のいい犯人なら、手の込んだ犯罪状況を作るかもしれない。しかし、もし犯人が素人で、偶然の産物で難解な不可能状況が生まれてしまった場合、犯人には頭脳ゲームを行う意図はありません。これはどのように解釈するのですか」
「その場合は犯人もほかの登場人物と同様、囚人のように場に翻弄されることとなり、特権者は探偵しかいなくなってしまいます。この場合、盤上を支配するのが探偵だけになり、たいていの場合は頭脳ゲームとしての性質は崩壊する。密室を偶然生成してしまった犯人は、なぜ密室になったのかわからず、探偵と自分以外の第三者に怯えることとなる。この第三者というのは、狙って作られた密室のケースの場合の犯人に相当する。しかしもしかしたら、密室の生成にかかわった人物は二人以上いるかもしれない。この場合も、お互いがお互いに疑惑を抱きあう状態となる」
　偶然生成された不可能状況の場合は、密室生成にかかわった人物が、それぞれに対する疑惑を抱く。すると、彼らは自分以外の犯人と、探偵の告発に怯えるというわけだ。
「もしも、犯罪の真相を全員が瞬時に知ることができるなら。パノプティコンの囚人たちが、探偵と同じ特権を持つとしたら」
　水姫の言葉に、一条早雪はぴくりと眉を動かした。
「……そうしたら、探偵の存在は不必要になるね」
「そう、かもしれないですね。パノプティコンの極限のシステムは、おそらく事件が起こらないほどに、囚人たちの習慣レベルが高いこと。異常が起こればすぐに発見されてしまう。探偵小説の人物の大半が、限りなく純真ならば、邪な心を持った犯人は浮き彫りになってしまう。こんな世界に探偵はいらないですね」
「私は、探偵がいた方が好きだけどね」
　ミステリの話にシフトした段階で、水姫の脳内シミュレーションでは一条早雪の考えは完璧にトレースできていた。ここで話を切り上げ、本題に入るのが良い。
「ところで先生、明のことで相談があるんです」
「明が、どうしたの？」
　水姫は、鹿目辰巳殺害の犯人は明の可能性がある、ということを、何段かのニュアンスの層に分けて、明言を避けながら説明した。
「なるほど、明の靴、それとダイイングメッセージね……」
「はい……」
「あなた、ＬＥＮＳを付けてるでしょう。画像を送ってもらえる？」
　今日、水姫は初めてＬＥＮＳを使用して外に出てみた。どうやら、眼鏡をかけないことでＬＥＮＳを付けていることが分かったみたいだ。
　ＬＥＮＳの映像は、外部からの光を屈折させて目に送る方式ではなく、一度ＬＥＮＳの感受部分でデジタル変換され、再構築された映像を目が受け取っている。そのため、自分の眼以上に優れた機能の発揮ができないことを危惧していたのだが、その心配は杞憂だっ

た。外界の情報はクリアに表示され、問題なく動けた。
　水姫は目線でファイルを開き、掲示板から保存した殺害現場の写真数枚を選択する。送信先が表示され、一条早雪のデバイス名が表示される。選択し、送信をすると、自動でプロトコルの識別が行われ、相手のデバイスに表示される。
　一条はふむ、と言ってコーヒーを啜った。
「私は、明は犯人ではないと思うわ」
「え、どうしてですか？」
「このダイイングメッセージは、被害者の左手の先に書かれている」
「はい」
「これは一見、鹿目辰巳が死に際に明を告発したように見える。でも実際に書く場面を想像してみると、おかしなことになる。この手の向きだと、ダイイングメッセージの向きは、写真と上下が逆にならないといけない」
「あぁ……なるほど」
「死に際の人間がわざわざ反対向きで書くはずがない。つまりこのダイイングメッセージは、犯人が明だと思わせるために、鹿目辰巳の死後、真犯人がそこに書いたものなのよ」
　そうかもしれない……と思う。
　鹿目辰巳が、なぜ明の名前を知っていたのか、それが疑問だった。しかしダイイングメッセージが鹿目辰巳のものでなかったとしたら、鹿目辰巳と明の関係性の可能性は希薄になる。靴の足跡だって、真犯人が明の家から盗んだものかもしれない。それに、偶然靴裏に傷がつくこともあるだろう。そこまで思いつめる必要もないのかもしれない。水姫はそのように結論付けた。
「ありがとうございました。さすが名探偵ですね」
「そうでしょう。ふふん」
　鼻を鳴らして自慢げな顔をする一条を尻目にして、水姫はドアを開けた。
「水姫」呼びかけられて、水姫は動作を止めた。「あまり気負わないこと」
「はい」
　保健室を出て、水姫は決意をした。
　自分でももっと調査をしよう。
　そして、明が犯人ではないと証明するのだ。

十一

　シスター・バーバラは、慈悲深い表情で水姫を出迎えた。これが本来のこの人の表情なのだろうな、と思う。前回来たときは鹿目辰巳の死の衝撃で、深い悲しみに包まれていた。
「鹿目辰巳さんの部屋を見せてほしいんです」
「えぇ……いいですよ。明さんのお友達ですからね」
「ありがとうございます」
　教会の礼拝堂を通り、あまり目立たないようにデザインされたドアを開くと、無骨な石造りの廊下へと出た。バーバラが照明のスイッチを押すと、壁の上部に取り付けられた暖色の照明が、やわらかく廊下を照らした。
「西洋的な建築ですから、日本風の家屋と違って狭苦しいかもしれ

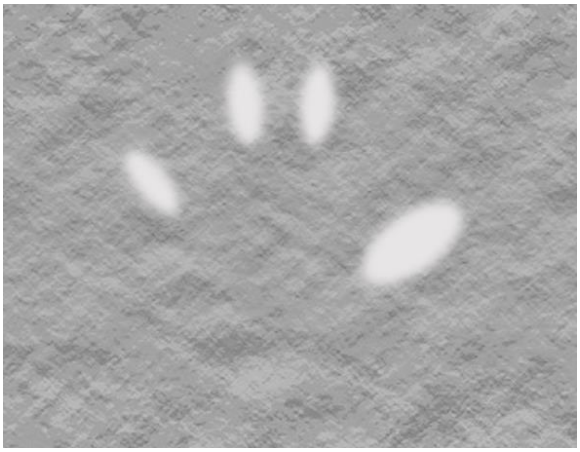
ませんね」
西洋建築は、石造りがベースである。教会内部は、昔の映画などで描写されていた古城の地下のような雰囲気だった。照明を付けずに歩いたら、肝試しにはなるだろう。
二人分の硬い足音が通路に反響する。通路を曲がり、より細い通路に出る。地理的に、これは礼拝堂の横の壁の裏側になるはずである。通路の左手には、木製のドアがいくつも並んでいる。突き当りに到達すると、バーバラが左手のドアを示して、「ここが辰巳さんの部屋です」と言った。
バーバラは懐から鍵束を取り出し、一本の鍵を外してドアを開錠した。外開きのドアが開かれた。入ってすぐ右手の壁に照明のスイッチが取り付けられている。押すと、廊下と同じ照明が部屋中を照らした。
これが鹿目辰巳の部屋……。
無骨なものだ。右手奥に本棚、左手前に書き物机、奥には最低限にしつらえられたベッド。
水姫は部屋に立ち入ってみる。石造りの部屋は、水姫には圧迫感がある。こんな部屋で心が休まるのだろうか。
書き物机には楽譜が何枚も重ねられている。鉛筆による書き込みがあり、パラパラとめくっていると、下に行くにつれて字が汚くなっている。
「机の中を見てもいいですか」
「はい」
バーバラは無表情に頷いた。
引き出しを開けると、中で何かが転がる感覚がした。卵型のペンダントが、ゆらゆらとして動きを止める。光に照らされて、琥珀色に輝いている。上部はチェーンがつながれている。
「辰巳さんのペンダントです」
「これは……両親の写真が収められている、と仰っていたものですね」
「えぇ……」
「見てもいいですか」
「どうぞ」
水姫はペンダントを手に取って、蓋を開けた。丸い枠の中に、家族写真のようなものが収められている。すでに色あせていて、年月の経過を感じさせた。
写真の中央で、椅子に座らされた男児が無表情でこちらを見ている。これが鹿目辰巳だろう。後ろにはその両親らしい二人の姿。男の方は整った昔風の顔で、笑顔がぎこちない。作り笑いが苦手なのだろう。
女性の方は、只者ではない雰囲気を感じる。妖艶な雰囲気を身にまとっている。そしてなんといっても、似ていた。顔の作りが、明とよく似ているのだ。
よく考えてみると、この部屋も、明の部屋と似ている。部屋が表す精神性は、無視できないものだ。つまりは、明と鹿目辰巳の精神性が似通っているということだ。
神岡明は、いったい何者なのだろう。
鹿目辰巳の部屋を出て、礼拝堂に戻った。石の圧迫感から解放されると、ステンドグラスに記された宗教画が、深い意義を持ってい

るように思われてくる。信者からすれば実際はそうなのかもしれないが、無神論者の水姫にさえ、そのように思わせる魅力があった。
「どうでしたか。何か、参考になりそうなものはありましたか」
シスター・バーバラが尋ねた。
「はい、あのペンダントは、特に重要であるように思われます」
「やはり、そうでしょうね」
ペンダントの裏には、バーバラが言っていたように、鹿目辰巳という名前と、誕生日が記載されていた。生年月日から計算すると、死亡時には十八歳だったようだ。
水姫は事件が起きた日の様子を尋ねることにした。
「鹿目さんが死亡したと思われる日、なにか変わったことはありませんでしたか」
「変わったことですか……」
バーバラは考え込んでから、思い出すように言った。
「辰巳さんが天に召されたのは、深夜帯だったと聞いていますが、その前日に吉村さんがいらっしゃいました」
「吉村さんが？」
「えぇ。三宅京子さんの事件の調査をしているということで」
「どのようなお話を？」
「辰巳さんとの関係についてです。携帯端末でコンサートの映像を流して、これは三宅京子さんですか、とか、そういった会話をしました」
明が水姫に見せたものと同じ映像だろう。そのコンサート後に、辰巳が失踪してしまったのである。
「レンズ、というのですかね。私はそういった機械には疎いものですから。吉村さんは仕事柄、いろんな人にお話しを聞くようですから、普通の携帯電話や紙の資料なども持ち歩いているそうです」
「そうなのですね。ほかに何かありませんでしたか？」
「事件の前後では、それ以外のことは特にありませんねぇ」
「わかりました」
水姫が立ち上がると、バーバラは見上げて言った。
「お帰りになられますか？」
「はい。後は事件の現場の調査もしようと思います」
「あの砂浜のこと？」
「はい。結構近いので寄っていこうと思います」
「ああ、あそこはねえ、実は近道があるんですよ」
「えっ、近道？」
初耳だった。今まで誰もそんなことを口にしなかったではないか。
「ここから海岸に行くには、一度森の方へ出て、来た道を戻ってから脇道へ入ることになるでしょう？　でも、辰巳さんなんかは近道の方からよくあの海岸へ行っていましたよ」
「そ、それ、どうやって行くのですか？　教えてください」
これは聞き逃すことのできない重要な情報である。地形の情報はとにかく頭に入れておかなければならない。
「教会の裏側の森に、獣道があります。そこを進んでいくと、断崖に突き当たるのですが、獣道の先にだけ砂浜に通じる洞穴があるのです」
「そんな隠し通路が……」
「ただ、洞窟の内部は起伏が激しく、私みたいな老いぼれには厳しいため、私は全く使いません」

「場所がわかれば大丈夫です。ありがとうございます」
「私も入口までついていきましょうか？」
「いいえ、それには及びません」
「それなら、少し待っていなさい」
バーバラは一度部屋の方へと引き換えし、二分くらいして再び戻ってきた。
「これをもってお行きなさい。暗闇は進むものに暗黒の試練を齎します」
バーバラの手には一本の古びた懐中電灯と、銀のナイフ。水姫はこれらを受け取ると、「行ってきます」と言って教会を出た。バーバラが十字を切って見送ってくれた。
水姫は裏側へ回った。教会の裏側は雑草が生い茂っている。なんとか草の生えていない部分を歩いていくと、かろうじて土が見えるくらいの細い獣道があるのに気が付いた。薄暗い空間の穴が、不安な気持ちを呼び起こさせる。深呼吸をする。水姫は意を決して、足を踏み入れた。
学校を出たのが午後三時半、その時点ではまだ明るかった。現在時刻は午後五時。それでもまだ空は明るい。日が伸びてよかったと思う。冬だったら、寒さと暗さの混合が水姫の立ち入りを硬く拒んだことだろう。
とは言いつつも、夏は夏で、そのいやな部分を全面に押し出してくる。繁茂する雑草、皮膚からにじみ出てくる汗、どこかから飛んでくる虫、肌に張り付く衣服、すべてが煩わしい。季節など、すべて天体現象の結果に過ぎないのに。ニュートン力学を理解した人類も、所詮は自然の奴隷に過ぎないということだ。
長く続いたように思われた獣道は、実測すれば五十メートル程度に過ぎなかった。ＬＥＮＳは測量にも便利なのだ。テクノロジーの進化を実感する。
みたかクソ自然！
これがテクノロジーの力だ！
水姫は息を切らして、汗で張り付いた服をはがしながらそう思った。
断崖にぽっかりと穴が開いている。ここが入口だろう。入口は水姫の肩くらいまでの高さしかない。
そして、異様なにおいに気が付いた。
幸い、腐乱臭ではない。
きわめて人工的な、油臭いにおいだ。
洞窟の内部から漂ってくる。気分が悪くなりそうだ。
鼻を抑えながら、身をかがめて穴に入った。内部は真っ暗だった。
水姫はバーバラから授かった懐中電灯のスイッチを入れた。指向性のある黄色光が洞窟の壁を照らした。
水姫は背筋が凍った。照らされた壁の表面には、赤い液体がべったりと付着していたからである。
まさか……血！
しかし、その赤には見覚えがあった。写真と実際の光景では色合いが異なって見えるが、それは三宅京子の死体にかかっていたペンキなのだ。
光を先まで向けると、壁一面に塗られたペンキは、ずっと続いているようだった。ためしに壁を触ってみると、当然だがすでに乾いていた。多少を強くこすってみると、その部分のペンキは剥がれ、

岩肌が露出した。
洞窟を進んでいく。水姫は外よりも過ごしやすいことに気が付いた。ひんやりとして、湿度も低いのだ。日光が入ってこないから熱放射がないのだろうか。それとも海が近いからだろうか。いずれにしても、不快要素が軽減されるのは助かった。
洞窟内は、バーバラの言っていた通り起伏が激しい。足場は砂と岩が交じり合っているため、通常の靴だと歩きづらい。また、ところどころに水たまりがある。

こうして歩いていると、赤い壁の不規則な凸凹が、まるで体内のように思えてくる。大きな生物の体内を歩いているような恐怖感がじわじわと湧いてくる。
突然、足場が消えたような気がした。右足が宙に浮き、水姫はバランスを大きく崩した。幸い、すぐに地面に着地できたので、なんとか踏みとどまり、体勢を回復した。後ろを振り返って足元を照らしてみると、周りより大きな段差があった。周りの壁を照らしながら歩いていたため、足元に注意が及んでいなかったのだ。暗い中だと危険なポイントだ。
水姫は立ち止まって壁に光を当ててみた。左右の壁は、やはりどちらもペンキで染められている。水姫は違和感に気が付いた。左の壁の出っぱりに、ペンキが小さな楕円形に剝げている部分がある。平均すると。長軸が三センチ、短軸がその半分と言ったところか。楕円は縦に伸びており、一番左の小ぶりものから、少し間隔が開いて中くらいの楕円が二つ、また間隔が開いて、大振りのものが一つ。
鹿目辰巳の暗号だろうか？



それとも、劣化によって偶然できた傷だろうか？
洞窟に入ってから二十分くらい経ったところで、懐中電灯の明かりが弱くなり、不規則に点滅するようになってしまった。水姫は電池を取り外し、またはめなおした。こうすることで多少は延命することができる。乾電池の収納部分には、ひらがなで『たつみ』と書かれていた。これは鹿目辰巳の所有物なのだ。
電池のごまかしはすぐに効果を無くし、懐中電灯は完全に死んでしまった。
そういえばＬＥＮＳにはライト機能はないのだろうか。水姫はコマンドメニューを呼び出してみたが、どうやらライトの機能は無いようだ。さすがに目から光が出るのは、ビジュアル的に良くないと判断されたのかもしれない。
ＬＥＮＳの機能でうまい具合に解決できないだろうか。
いろいろいじっていると、赤外線カメラに設定できる機能を見つけた。切り替えてみると洞窟内の様子がよく見えた。簡易的なフィルタをかけているのか、デジタル処理を施しているのだろう。

しかし、赤外線カメラを通してみると、起伏そのものはわかるものの、さっきまで見えていたペンキの色は、完全に壁と同化してしまった。水姫は頭の中で仮説を立てて、もっともらしいものを結論とした。おそらくペンキと洞窟の壁の、赤外線の反射率が同じために同化してしまったのだろう。

その後も洞窟の道は上がったり下がったりを繰り返した。水姫なら問題ない程度の起伏だが、シスター・バーバラにこの道は難しいだろう。

前方に出口が見えた。この頃になると、ペンキの匂いに慣れてしまって、何も感じなくなった。地面はほとんど砂になっていて、足を取られて歩くのに苦労する。赤外線カメラから通常の視界に切り替えると、出口の向こう側の茂みが見えた。

頭を下げて穴を出ると、目が外界の明かりに強く反応して鋭いまぶしさを覚えた。目が慣れてくると、そこは茂みの中だった。雑草を書き分けて出ると、薄い色の砂に、緑がかった海が広がる。まさに以前、明と訪れた砂浜だった。

「あああぁ、疲れたぁ」

思わず独り言が漏れた。

洞窟の長さは、およそ二〇〇メートル程度だった。道のりでは五〇〇メートル程度だったから、歩く距離にしたら半分以下で、確かにこれは近道である。洞窟の出口から歩いて鹿目辰巳が死んでいたところまで行くと、洞窟の入口から死体現場までは五〇メートルくらいということが分かった。海と反対側は森で覆われている。途中で右手に目を向けると、この砂浜の正規の入口がある。現在は、左右の木々に立ち入り禁止の黄色いテープが何重にも張られ、通行できないようになっていた。調査中の警察や吉村は、近道には気づかなかったのだろうか。

水姫は海岸を調査してみた。この砂浜は見た目よりも急で、傾斜は約二十度程度になっている。その他にも砂の組成や、海水の濃淡、木々の種類の同定、砂浜を三次元座標平面で表した際の、死体が倒れていた地点のマッピング、太陽の位置による光の当たり具合などを調べた。

そして、気が付けば夜は過ぎ朝になっていた。コンクリートによる熱の再放射がないため、半袖だと明け方の空気は肌寒いほどだ。

水姫の身体を張った調査により、次のことが分かった。

まず前提として、砂や海水の成分、木々の種類、光の当たり具合による影響は無視できるほど小さい構成要素に過ぎない。

それを踏まえた上で判明したことの一つ目は、砂浜は水で綺麗に整えられるということだ。これは海水に限らず、雨によっても足跡は消えてしまうということを表す。

鹿目辰巳が殺害される前日、水姫は明の家に行き、その後二人で教会へ向かった。殺害現場は鹿目辰巳殺害の直前に綺麗な状態にリセットされていた。したがって現場の形成を考える場合、事件関係者による影響のみを考慮すればよいのだ。

そして二つ目は、殺害現場のもう一つのルートに関してだ。

死体現場には、犯人と思われる靴が往復した跡しかなかった。鹿目辰巳がどこから来たのかは謎だった。だが、裏道の存在によって一つ新たな可能性が見えた。それは鹿目辰巳が教会から続く裏道から、事件現場まで歩いてきたものの、潮の満ち引きによって足跡が

消されてしまったという仮説である。
水姫はこの可能性を検討してみた。
しかし、その仮説では現場を再現できなかった。
海を半日観察した結果、満ち潮は午前六時と午後六時、引き潮は午前十二時と午後十二時に起こる。地球と月の位置関係の問題で、一日経つと約一時間のずれが生じる。鹿目辰巳が死亡した日から二日経っているため、二時間のずれとなる。したがって、殺害された日には満ち潮は午前四時と午後四時という計算になる。
鹿目辰巳の死亡推定時刻は〇時から二時の間だったから、時間的には足跡を消すのに丁度いい。
ところが、実際はそううまくいかない。干潮時と満潮時では海岸線が五から六メートル前後する。洞窟の出口から死体現場まではまっすぐ直線でつながっていた。その線から海岸線までは、干潮時は六メートル、満潮時でも五十センチメートルの距離がある。
つまり、満潮時でも足跡を消すことはできないのだ。
死体は足を無くしてしまった。そうでなくては足跡を付けずにここまで来ることはできない。
水姫は地面に座り込んだ。昨日、学校を出てから制服のまま教会へいき、家に帰らずに海岸で調査をしていた。身体中が疲労に包まれていた。水姫は砂の上に寝転がった。
服が汚れたって知るものか――。
空はすでに朝焼けの黄金色が雲を照らして、神々しい陰影をなしている。
西の空に行くほど紺色の暗闇が濃くなり、東の空に行くほどにじむような朝焼けが広がっている。水姫は明け方の雲を始めて見た。細切れな雲や、煙のような雲が、波長の短い光に照らされて黄土色を形作っているのだ。昼の純白の雲とは全く違う表情を見せている。
天体の運行、水蒸気の移動、光の散乱……ただの物理現象に過ぎないはずなのに……。
自然とは物理現象の集積に過ぎないはずなのに……。
今、猛烈に神岡明に会いたいと自覚していた。明が犯人だなどと、信じたくはない。親友なのだ。犯人だと思う方がどうにかしている。
涙が流れる。
帰って、ごはんを食べて、しっかり寝て、起きたらまた頑張ろう。
明が無実であることを示すのだ。
水姫はそう決心した。

水姫は教会に引き返すことにした。バーバラに懐中電灯とナイフを返すためである。明け方だから失礼に当たるだろう、とか、眠っているに違いないとか、そういった考えは、今の水姫からは抜け落ちていた。
すぐこなすことのできるタスクだから、すぐこなしてしまおう。
脳のエネルギーの消費を抑えるため、なるべく単純な思考をしているつもりだ。
全身が疲れた状態でもう一度洞窟を通るのは勘弁願いたかったので、森の領域に少しだけ立ち入り、通行禁止テープの脇を抜けて外に出た。
ふらふらと教会への道を歩く。やけに長く感じる。自分の身体が疲れている証拠だった。
そして、教会の扉を開けた。幸い鍵はかかっていなかった。不用

心なのか、それとも、こんな辺鄙なところにだれも来ないから閉めていないのだろうか。
どちらでもいい。早く返して家に帰宅しよう。
「シスター・バーバラ、懐中電灯とナイフを返しに来ました」
しかし、水姫の声は空虚に響くだけだった。当然かもしれない。こんな明け方にいきなり来て、対応できる方がおかしい。
念のためもう一度呼びかけた。
「シスター・バーバラ、いますか？」
その時、何者かの気配がした。水姫は驚いて、その場に凍り付いた。
服の衣擦れの音だ。それから、「うぅーん」という声があたりに響いた。長椅子の背に隠れていた人物が身体を起こした。
「明？」
その姿は、明とよく似ている。
「よく寝たわ」
いや、明ではない。雰囲気が明とは異なっている。明よりも大人びた仕草と、声色だ。年齢は二十代前後というところだろうか。
「あなたは、神岡明ではありませんね。どなたですか？　何をしているのですか？」
明によく似た女性は、こちらを見てから、妖艶な笑みを浮かべた。
「そんなことどうでもいいじゃない」
目の鈍い感覚がすっかり吹き飛んでしまった。目の前の謎の女性に、全神経が集中している。水姫の敵か、味方か。敵なら、いざとなれば胸元のナイフがある。
「危ないことは考えないことよ。それよりも、あなた、シスター・バーバラはどこか知ってる？」
「いいえ、知りません」
全てを見透かすような目を持っている。それに、言葉に妙な力を感じる。言霊というのだろうか。この女性には素直に従った方が良いと察知した。
「いくら呼びかけても出てこないのよね、ちょっとあなた、一緒に来てくれない？」
水姫とその女性は、再び奥の石造りの通路に出た。水姫は何度か呼びかけたが、虚しい残響があるだけだった。
「おかしいわねえ」
水姫の後ろで女性はきょろきょろと周りを見た。全体的に動きがゆったりとしている。それが余裕のある雰囲気に拍車をかけていた。
通路の突き当りは鹿目辰巳の部屋だ。その部屋から三つ手前の部屋が、ぴったりと閉ざされていた。ドアを押しても引いてもびくともしない。
「鍵はないのかしら？」
水姫は、疲労した肉体にムチを打って、他の部屋をすべて探してみた。幸い地下や二階は存在せず、石造りの通路が教会の両側に伸びて、それに沿って部屋がいくつも作られているという構造だった。しかし、どの部屋を探しても鍵は見つからず、代わりに見つかったのは西洋風の武器だった。武器庫は、こちらとは反対側の通路の突き当り、ちょうど鹿目辰巳の部屋とは反対側にあった。
水姫が小型の斧を手に取って、件の部屋の前に戻ると、謎の女性は驚いた顔をした。
「まあ、物騒ね」

「どうします？　壊しますか？」
「許可します」
許可される覚えはないのだが、とにかく今は部屋を打ち破る方が先決だ。
水姫は斧を握って、鍵穴の上の部分を狙って振り下ろした。古い木製のドアだから簡単に斧が食い込んだ。二、三回斧を振り下ろすだけで、腕が入るだけの穴が開いた。水姫は左手を穴に突っ込んで内側のドアロックを外した。
ドアが開かれた。
室内は暗く、
鼻を衝く匂いが吐き気を誘う。
部屋の奥、
思わず目を背けて、
見覚えのあるペンダントが落ちていることを見て取った。
明のだ……。
無意識のうちにポケットにしまい込んだ。
そして、
意識せざるを得ないのは、
床に広がった赤。
奥の赤い物体。
塗料か……？
血か……？
胸には、
太く、
鋭い、
剣が、
シスター・バーバラの胸に突き刺さっていた。
「[redacted]――！」
醜い声音が聞こえる。
それが自分の喉から出た叫び声だと気づいたときには、水姫はすでにその場にうずくまり、目と耳をふさいでいた。
『見たくないものは見なくてもいいんだよ』
もう何も見たくない。
もう何も聞きたくない。
もう何も知りたくない。
一体誰なのだ。
こんな、
こんな残酷なことを……。
水姫の一部は、人間の手が音の減衰に影響する度合に、悪態をついていた。
耳をふさいでも、周囲の音は貫通してくる。
謎の女性が叫んでいる。
「凛子（りんこ）！　どうしたの！」
明に似た顔の女性が。
「ああ……、凛子……」
女性がのろのろと立ち去ったことが、床の振動から伝わった。
それきり、物音はしない。
水姫はゆっくりと気を失った。

十二

目が覚めれば、見慣れたベッドの上だった。
深い眠りだったという自覚がある。
自分の部屋だということが、コンピュータの静かな駆動音で分かった。
コンピュータ上の重い処理を常に回し続けているため、ファンが止まることはほとんどない。しかし、たまには休ませた方がいいのかもしれないな、と思った。
記憶が徐々によみがえってきた。水姫は、海岸で一晩中捜査をした後、教会に戻り、謎の女性に遭遇して、シスター・バーバラの死体を発見した。
ひどいことをするものだ。
しかし、眠りというクッションを置いたことで、発見当時よりも思い出した時の精神的負担は小さい。それだけ深い眠りだったということだろう。
自分がどのくらい眠り続けたのか確認しようとして、自分の眼球からＬＥＮＳが取り外されていることに気が付いた。どこかで落としたのかもしれない。
立ち上がると、意外と足はしっかりとしている。久しぶりにコンピュータの前に座った気がする。日付を確認して、軽く驚いた。あれほど深い眠りだったと感じていたが、実際のところは、一日しか経っていなかった。若い肉体の回復能力に万歳というべきかもしれないな、と水姫は思った。
未読メッセージを確認する。ＬＥＮＳと携帯端末とコンピュータはあらかじめ同期しておいたから、各端末に届いたメッセージは、すべて共有されている。
母親からの連絡が七件、単身赴任中の父親からのが三件。そのうち一件ずつは、水姫が教会で倒れた後、無事に保護されたことに安堵する内容だった。喪仁田蘭、雨木薫から、併せて八件、そのほかのクラスメイトからぽつりぽつり。これらは全部水姫の安否を心配する内容だ。
一条早雪から一件。内容は『今日の夕方五時から、喪仁田探偵事務所で話し合いをするから、参加できそうなら参加してほしい』という旨のことだった。
明から連絡はなかった。
午後二時になろうとしていた。教会で気を失ったのがおそらく午前六時くらいだったから、そこから三十四時間眠っていたことになる。
廊下に出ると、やはり静かな家だと自覚的にならざるを得ない。母は仕事に出かけているし、父は遠くへ行った。空腹であったが、気の持ちようでそれをごまかすことはできる。水だけ飲んで、今後どうするかを考えよう。
キッチンへ向かい水を飲もうとすると、テーブルに食事が作り置きされているのに気が付いた。ラップが掛けられており、その上のメモ用紙に伝言が書かれている。ミミズののたくったような汚い字。母の字だった。
『水姫へ
ごはんを沢山作りました。目が覚めたら食べてください。早く目が覚めることを期待して沢山作ったんだから、残さず食べないとダ

メよ。』
ラップの下には、こんもりと白米が盛られていた。おかずは唐揚げにハンバーグ、ウィンナー、肉じゃが。サラダはグリーンサラダとポテトサラダ。その横にはオレンジ色のナポリタン。おまけにヨーグルトとチョコレートケーキが添えられていた。
水姫は声をあげて大笑いした。母は私を食べ盛りの男子高校生だと勘違いしているのだろうか？　笑ったら泣けてきたので、ごはんとおかずをすべて温め直して食べ始めた。

思いの外自分の体は元気らしい。午後四時前には喪仁田探偵事務所の前についてしまった。やることもないので、一階の喫茶『エラリィ』に入った。
気分を奮い立たせるために、一番高いコーヒーと、前回水姫が舌を巻いたレモンチーズケーキを注文した。千円札が二枚飛んだが、全く気にならない。胃袋にもまだ余裕があった。食後のコーヒーを啜りながら、水姫は本棚に置かれていた文庫本を手に取った。喫茶店の名前の元になった推理作家の中期の作品だ。明から借りた国名シリーズはすべて読み終わった。これはその続きにあたる話らしい。以前明が、作品に登場する架空の町と、この町が似ていると言っていた。読み進めて思ったが、そんなに似ているだろうか？　水姫は正直なところ、似ていないと思った。
老店主は、水姫が読書する様をニヤニヤと見守っていた。
五時にはその上の事務所で応接椅子に座っていた。
「よく来てくれたね」
喪仁田影像はそう言って水姫を出迎えた。

事務所に集まったのは水姫、喪仁田影像、一条早雪、吉村黎だった。
「明はいないのですか？」
水姫がそう聞くと、喪仁田影像はかぶりを振った。
「今回話したいのは、水姫くんが密室を発見したときの状況についてなんじゃ。早雪くんに頼んで水姫くんを読んでもらったが、しかし、水姫くんは大丈夫かな？」
「私のことなら心配ありません。眠ったら回復しました」
「ほっほ」
と喪仁田影像はにこやかに笑った。
「ね、言ったでしょう影像先生。水姫ならすぐ回復すると」
一条早雪が得意気に答えた。
「君の観察眼には敬服するよ」
「水姫さんが元気ならよかったよ。それで、僕としては……」
「わかっています、吉村さん。早く発見時の状況を聞きたいということですね？」
「ああ、うん」
水姫は深呼吸をして、てきぱきと話し始めた。
まずは教会から海岸に続く裏道があったことから。海岸で調査した結果、裏道から死体現場まで続く足跡は残ってしまうこと。教会へ戻り、謎の女性と扉を打ちこわし、シスター・バーバラの死体を発見したこと。そこで気を失ったこと。
客観的で要領の良い水姫の説明によって、その場の全員が状況を了解したようだった。
「裏道がねえ……」吉村は唸った。「そこを使用していたのは鹿目辰

巳だけなんだね？」
「はい。洞窟の内部は起伏が激しいですから、シスター・バーバラが通り抜けるには少々厳しいように思います」
「今の話を聞くかぎり、シスター・バーバラの部屋は密室だったことになる」
「密室？」水姫は状況を整理した。「ああ、確かにそうですね」
「実はそのことについては、すでに確認してある」喪仁田影像が言った。「水姫君が気絶したあと、そこに駆け付けた調査団が、状況を整理した。その結果わかったことを話そう」
　水姫はつばを飲み込んだ。自分が眠っている間、どういうことが分かったのか、非常に興味がある。
「まず、シスター・バーバラのことなのじゃが、これは本名を『荒巻凛子』という。十六歳から一年間、神岡屋敷の女中として働いていた」
「神岡屋敷？」水姫は質問を挟んだ。
「神岡グループに発展する前に神岡家が住んでいた家のことだよ」吉村が補足した。「明治時代に紡績業で財を成して見事に貴族の仲間入りを果たしたんだけど、第二次世界大戦後の流れに逆らえず没落してしまった。その時の神岡家当主が神岡公親、娘であり次期当主が、現在の神岡グループのトップ、神岡優子にあたる。現在は九十歳だね」
「へえ……」さすがに神岡家に仕えていただけあって詳しい。
「荒巻凛子は、発狂した彼の父親の計画に巻き込まれて、神岡屋敷を放火してしまった」
「放火!?」
　喪仁田影像が話を続けるのを遮って、水姫は声をあげた。
「そうなんじゃよ。父親は神岡公親を忌み嫌っていたらしいからの。父親に命じられて放火をしてしまったらしいのじゃ。それで、神岡屋敷が燃えてしまってからは、凛子は逮捕された。数年間、檻の中で暮らし、釈放されてからは修道女となって慎ましい生活をしていた。
　そのころ、当主の座を継いだ神岡優子の手によって、神岡家は急速に規模を拡大した。最盛期の神岡を歴史の藻屑にするほどだった。儂が物心ついたころには、様々な製品がすでに神岡グループのものだったよ」
　喪仁田影像は思い出すように言った。
「すごい人なんですね、神岡優子さんって」
「まさに天才じゃよ。ほかの誰にも真似できん」
　そんなすごい人物が、明の曾祖母なのだ。明の才能は神岡優子から受け継いだものかもしれない。
「神岡家の女中として働いていたよしみで、荒巻凛子は最低限の生活費を神岡優子から個人的に支援してもらっていた。そして、四十をすぎたあたりで荒巻凛子はあの教会を任されることになる。古い教会で、だれも担い手が居なかったらしい」
　荒巻凛子は何人もの孤児を預かり、育てた。本人はそのつもりはなかったそうだが、どこかから噂を聞いた夫婦が、教会の前に赤子を捨てていったそうな。鹿目辰巳は、荒巻凛子が育て上げた最後の孤児だったのじゃ」
「なんてむごい……」沈んだ声で言った。
「以上が荒巻凛子の生涯だった。なんというかのお……」

全員が黙り込んだ。水姫は、荒巻凛子ことシスター・バーバラに同情していた。父親の怨念に巻き込まれた挙句逮捕され、シスターとなった後も、最後に育てた鹿目辰巳は殺害され、自分も殺されてしまったのだから。

「あの」水姫は続きを促した。「密室の状況を教えてください」

「僕が説明するよ」

吉村が話を受け取った。ごそごそと封筒の中を探る。

「と言っても、小説にあるような複雑な密室は存在しないよ。部屋はあまりに単純な構造をしていた」

吉村が封筒からが取り出した図面には、発見当時の部屋の状況が書かれていたが、正方形の部屋の真ん中で、被害者の胸に剣が突き刺さっているというものだった。

「被害者の胸には、西洋風の剣が突き刺さっていた。これは、反対側の通路の奥にある武器庫から取ってきたものじゃな。死因はもちろん刺殺で、これ自体には変わった点はない。

特徴的な点は、今回もやはり、死体にペンキがかかっていたことだ。

三宅京子の時とおなじように、目と、胸から股にかけての部分にペンキが塗られていた。

じつをいうとね、密室の解き方はわかっているんだ。シスター・バーバラの衣服の中には、すべての部屋の鍵の束がしまい込まれていたが、事件の部屋の鍵だけ抜き取られていた。ではその鍵は犯人が所有しているのかというと、そうでもない。部屋の扉は下の方に隙間が空いているから、犯人がシスター・バーバラを殺害して、鍵を取って部屋を出て、施錠をして下から滑り込ませた。これで密室は完成してしまうんだ」

「太古の昔から存在するトリックですね」一条早雪がコメントをした。

「そうなんだよ。だから、犯人がなぜ密室を作ったのかがわからない」

「密室なんていかにもなテーマではないですか。犯人はシスター・バーバラを殺害して、とりあえず密室を作りたかったのかもしれません」

「そういうものかのお」喪仁田影像は首を捻った。

「他に何か、変わったことは？」水姫は話を戻した。

「ないね。強いて言うほどもない」

「そうですか……」

水姫は、自分が事件現場で目撃したものを一つだけ隠していた。シスター・バーバラの近くに落ちていたペンダントである。

あのペンダントは鹿目辰巳のものによく似ていたが、実際は明のものだ。水姫が明の家を訪れた時に、首のチョーカーに着けていたものである。死体現場に落ちていたのを拾って制服のポケットにしまっておいたが、幸い、自分の部屋の机に置かれていた。制服は洗濯されていたから、母が取り出して置いておいたのだろう。

今日か明日、返しに行こう。もう何日も明と会っていない。

返すと言えば、自分が教会に戻ったのは、シスター・バーバラから借りた懐中電灯とナイフを返すためだった。それらも同時に机に置かれていた。もう返す相手もいなくなってしまった。

「あの、私そろそろ帰ります」水姫が立ち上がって言った。

「あ、待ちなさい、水姫くん」喪仁田影像が水姫を引き留める。「蘭

と薫くんが扉の向こうで盗み聞きをしておる。久しぶりに顔を見せてあげなさい」
「あ、はい」水姫は応接椅子に座りなおした。
「そろそろ僕は帰ろうかな……、調査の続きをやらないといけませんし」吉村が立ち上がった。
「私も、お暇致します。ありがとうございました」
吉村黎と一条早雪は一緒に事務所を出て行った。やはり、二人は交際しているのかもしれない、と思う。
水姫は喪仁田家の廊下に通じる扉を開け、廊下に上がり込んだ。
「蘭、薫、連絡しなくてごめ……あれ？」
廊下には誰もいない。部屋を開けてみても、誰もいなかった。
水姫が事務所に戻ると、喪仁田影像は応接椅子に座ったままだった。
「影像先生、お二人は？」
しかし影像はこちらを見ることもせず、ただ
「そこに座りなさい」
と言った。
この嫌な感じは、大人から叱られるときの感じと似ている。動揺を悟られないように、さっきまで座っていた椅子に戻った。
喪仁田影像の細い目が、水姫を見据える。
「水姫君、隠しているものがあるね」
やっぱりだ、と思う。水姫は身構えた。
水姫は幼い頃に、父が仕事で使う手帳を隠して、叱られたことがある。水姫としては、仕事であちこち飛び回る父を引き留めるための作戦だったのだが、あの時の叱られようはすさまじいものだった。
しかし、水姫は学習した。こういう場合は、長引くよりもすぐに謝罪したほうが良いのだ。
「すみません、死体現場にあったペンダント、私が持っています」
「やっぱりか」
「ごめんなさい」
「謝らなくてもいい。実は、神岡明くんから伝言を頼まれたんじゃ」
「伝言？」
「今日、罪の告白をする、と」
水姫は目の前が真っ白になった。自分から罪を認めた……。信じたくないことだ……。
「ほ、本人から？」
「そうじゃ。明くんがこっそりとここにきて、水姫君に話したいと。そのあと自首するつもりだ、とも」
「そんな……」
足が震え、身体が震えていた。
「聞いてあげなさい。親友として。一人の人間が罪を告白するのは、とても勇気のいることなんじゃ。最初に罪の告白を聞くことに、誇りを持つんじゃ」
「……はい」
水姫はしぶしぶ了解した。
「それと、これを持っていきなさい」
喪仁田影像は、机の引き出しから、球形の透明なケースを取り出して、水姫に手渡した。透き通った液体の中に固定器具が見える。水姫が付けていたＬＥＮＳだった。
「君のじゃろ。つけながら眠ると目に悪いらしいからの、保管して

おいたんじゃ」
「ありがとうございます。でも、喪仁田先生は……」
「よくわからんのじゃが、蘭がそうしたほうがいいからと言っていたもんでな」
「蘭……。蘭さんにありがとうと言っておいたとお伝えください」
「うむ」
その日の帰り、夕空は茜色に染まっていたが、水姫からすれば、それはパプリカが赤色をしている程度の意味しか持たなかった。このまま、明のところに行かなければ罪の告白を聞かずにすむ。そうすれば明が居なくなってしまうこともないだろうか。
そんな馬鹿な事、あるはずもない。
足取りは重く、夢のようにもどかしかった。
自宅に着いた。母はすでに帰宅していた。機嫌よさそうに水姫を出迎えた。
「お母さんが水姫を丈夫に生んだ甲斐があったわ」
水姫は感情を悟られないように、にこやかな笑顔を作って「ありがとう」と言った。母はるんるんと夕食の準備を始めた。
夕食は鉛の味がした。母の料理がまずいわけでは断じてない。味覚は心情に依存するのだ。舌先に感じる味は、普段のものと大差ない。しかし、それを受け取る受容体の方が麻痺しているようだ。なんとか完食して、自室に戻った。
何時に行けばいいのだろうか……。水姫は少し悩んで、前回、明から呼び出された時間と同じに行くことに決めた。
水姫はペンダントを手に取った。大きさは鹿目辰巳のものより一回り小さい。形はおなじで、卵型をしている。ちょうど相似形のようだ。鹿目辰巳のものはチェーンがついていたが、こちらはついていない。バーバラを殺した人物が、チョーカーに縫い付けられていたのをいつかのタイミングで取ったのだろう。
ペンダントの中身を開くと、幼い頃の明の写真が収められていた。中央には、両親の腕に抱かれた赤子、これが明だろう。じっとこちらを見つめていて、その目線の説得力は、今の明に通じるものがある。
その背後にいる両親に注目する。母親の姿は、鹿目辰巳の母と重なった。そして教会でみた謎の女性とも、どことなく雰囲気が似ている。しかし、父は鹿目辰巳の写真と違っている。どういうことだ？明と鹿目辰巳は異父兄妹なのだろうか？
水姫は、明が殺人を犯したとはどうしても信じたくなかった。それに、反論材料もある。一条早雪が話したあの推理、鹿目辰巳が残したダイイングメッセージは、手の向きの逆だったから、辰巳が明を犯人として告発しているのではないこと。今はその推理にすがりたい気分だ。
そうだ、真犯人が近くを彷徨しているかもしれない。私と明をこんな目に巻き込んだ殺人犯が……。
机に置かれたペーパーナイフと懐中電灯が、水姫を見つめていた。
シスター・バーバラと、鹿目辰巳の所有物……。
水姫はそれらを懐にしまい込んだ。

十三

夜更けすぎ、水姫は母が寝静まったのを確認してから家を出た。
生暖かい空気が湿気を孕んで水姫の身体にまとわりつく。心地よい気温なのに、心はざわついている。暗闇に、コンクリートをける音が響く。汗が噴き出るのもかまわずに一直線に駆け抜ける。気が急って、ゆっくりなど歩いていられなかった。一歩踏み出すごとに、懐にしまったナイフと懐中電灯が重さを主張する。
あの時と違って、今日は満月ではない。月の明かりを頼りに過ごした昔の人は、過ごすのに苦労しただろう。こんな天体現象に生活を左右されるなんて、人間はつくづく無力であると感じる。人間の進化は天体現象とともにあったと言っていい。だから人は火を使うことを覚え、家を建て、町を作り、国を支配することができたのだ。文明はやがて衰え、忘れ去られていく。文明とは一時の夢のようなものだ。
走りながら、壊れかけた公園の遊具、街灯に集まる蛾、汚い路地裏に入り込む猫、錆びた信号機が設置された歩道橋を見て、夢と現実の境界は曖昧なのではないかと思った。この数週間、水姫の周りに起こったことはおよそ現実的ではない。なにが夢でどれが現実か、自身を持って区別できる人間など存在するのだろうか？
森の中の道を通る。半月の明かりなど、木々の影の暗闇に比べればあってないようなものである。ひたすらに走ると、黄色いテープが綺麗に縦に切られているのが目に入った。死体のようにだらりとぶら下がったテープの間を通った。砂浜と海の二重層が水姫を出迎えた。
「こんばんは、水姫」
「明……」
神岡明は、こちらを振り向いて笑った。
「吸血鬼は、夜を彷徨する鬼なんだ。そして、夜は夢と現実が曖昧になる瞬間でもある。吸血鬼は夢と現実とを行き来できる実在する存在なんだよ」
「夢は存在しないから夢なんだよ、明。吸血鬼は架空の生き物に過ぎない。現実世界には存在することができない」
「できるさ。現実と夢を、陰と陽の二元論的関係だととらえてみよう。二つはそれぞれ全く正反対の性質を持っている。現実とは唯物論的世界観の象徴で、対して夢とは唯心論的世界観の象徴なんだ。水姫、君に聞きたい。この世界は、物理と論理だけで成り立っている唯物論的世界観に支配されていると思うかい？」
「私の答えは、イエスだよ。物理学がこの世を動かしている」
「僕の答えは、ノーだ。それならばなぜ、人類が芸術を生み出したのか？　なぜ人類が音楽を聴くのだろう？」
「芸術や音楽に対する感性が、脳内の神経物質に作用して、情報の伝達をするからだよ。セロトニンやドーパミン、ホルモンなどの作用によって人間の感情は動かされる」
「それは答えになっていないんだ。僕が問うているのは、なぜ音楽や芸術で、人間が感動できるのかだ。君の指示する唯物論的視点に立って考えてみよう。絵画とは所詮、油や水彩の集積によって生じた、色の分布図に過ぎないんだ。その色の分布という情報を人間が受け取り、何らかの機構によって神経伝達物質が生み出され、感情が生じる。でも、色の分布が変化すると、人間が受ける感情は大きく変動する。それだけではない。色の分布がたとえ同じものでも、その絵画が描かれるに至った経歴や、作家がその後に送った人生と

いう情報によって生じる感情は変わる。不思議なことだと思わないか。絵そのものにはそれほど力はないんだ。周囲の情報、さらには受け手側の心境によっても変化する。そんな事実を考慮に入れると、唯物論だけで世界を記述することは大変な無理があるように思わないかい」

水姫には、これが明の単なる詭弁に過ぎないことがわかっていた。『世界を記述する』という言葉の定義があいまいなのだ。物理学は客観的事実のみを扱って現象を記述する試みである。それに対して、明の言う『世界を記述する』とは、人間の心の動きや認識など、主観に大きく依存する事物さえも含有している。

しかし、水姫には明の論法を崩す気はなかった。二人は別に議論で相手を打ち負かしたいわけではないからだ。要は、世界のとらえ方のピントを合わすだけで良い。

「重要なのは、狭窄な二元論の落とし穴にはまるんじゃなくて、二つの世界をうまい具合に融合させて世界を解釈することなんだ。このバランスが崩れると、危険な思考にとらわれてしまう」

「そうだね」水姫は頷いた。

「僕の曾祖母、神岡優子はね、よくこんなことを言っていた。『心に吸血鬼を飼いなさい』って」

「それは、なんの比喩？」

「人間が強くあるための教えみたいなものかな」

「へえ……」

「だから、吸血鬼は存在するんだ。実態を持っていないけれど、神岡家の人間の心には吸血鬼が潜んでいるんだよ」

水姫は明の横に並んだ。海面は不規則に小さい波を作り、月からの青白い光を乱反射する。

「心を吸血鬼にして、僕は告白をする。水姫、聞いてほしい。僕は、自分の母親と鹿目辰巳を殺害した」

「明……」

目の前の少女の横顔から笑みはいっさい消える。

母親のことは初耳だった。

「明、嘘が嫌いだったよね。どうしてそんな嘘をつくの？」

「嘘じゃない。本当のことだ」

「明が人を殺すなんて信じられないよ。明は病院で私に語った。『僕は綺麗な世界しか見れない』って。明のいう綺麗な世界って、人殺しの世界なの？」

『綺麗な世界』……、それは苦しみを知らない者の言うまやかしだよ。それなりに努力しようとすると、綺麗な世界はすぐに、霧のように消えてしまうんだ」

「そんなのって……」

「お願いだから話を聞いてくれ、水姫。僕が自分の母と鹿目辰巳を殺害した経緯を」

水姫はかぶりを振りながら、その場にしゃがみ込んだ。

見たくないものは見なくてもいい。

耳をふさいだ。

「鹿目辰巳を殺したのは僕だ。あの日僕は、母を殺したことに苛まれて、一人で海を見たい気分だった。しかしそこには先客がいた。一人でぽつりとたたずむ鹿目辰巳に、僕は同類の念を禁じえなかったんだ。鹿目辰巳は、やはり自分は人を殺したのだという。そして、視線が怖いのだと。ＬＥＮＳの普及によって、インターネットの向

こう側の人間との距離は格段に近くなった。そして、コンサート映像が配信されていたのもよくなかった。彼は極度の緊張とストレスによって精神のバランスを崩してしまった」

視線に対する恐怖は、わからないこともない。視線というのは、人の意識に対峙することだからだ。視線があることで自分は見られている、見られることによって何らかの感情を抱かせている。そうやって不安の思考が連鎖し、自分の意識のリソースを何割か消費してしまう。

視線恐怖症は、それが顕著に表れてしまうのだ。

「鹿目辰巳は、同級生だった三宅京子を殺した。どうしても視線が怖い。コンサートから逃げ出した自分を、三宅京子が追いかけてきて、その眼で自分を苛む。彼はそんな被害妄想に囚われて、三宅京子を殺害してしまったんだ

三宅京子が鹿目辰巳を責めると思うかい？」

水姫は静かに首を振る。

「僕も同じ考えだ。

僕が彼の顔を見ると、彼は突然発狂した。懐からナイフを取り出し、こちらへ飛びだしてきた。僕は幸い、首元をすこし切っただけで、大変な怪我にはならなかった。

鹿目辰巳は、砂に足を取られてよろめいた。必死だった。僕は彼の手からナイフを奪い取って、彼の胸に刺した。鹿目辰巳はその場に仰向けに倒れこみ、やがて死んだ……」

「明……こっち向いて」

水姫は明の方に身体ごと向けた。明の腕がだらりとぶら下がった。

「僕は、どうすればいいんだろう？　もう家族は誰もいない。一人ですべてを背負い込まなければいけないんだ」

明は涙さえ流していなかった。乾いた瞳は荒廃した月面を思わせる。

「明、お願いだから」

「僕は」

「明、こっちを見て」

「僕は、もう、何も見たくないよ」

――――。

……。

何も、って、私のことも？

邪魔、なのかな？

……。

水姫は腕に力を込めて、勢いよく明の身体を押した。

あっ、という音を発して、明の身体が砂に倒れこんだ。砂埃が辺りに舞った。

明の視線が水姫を見据えた。

「水姫……」

明の身体が砂の上に横たわっている。水姫はその身体に跨るような恰好になる。

水姫の眼から塩分を含んだ水滴が落ち、明の顔に着地する。白くすべすべした肌に水分がにじんだ。髪が重力によって、砂の上に不規則に広がっている。どの束もつやつやとして柔らかみがありそうだ。

「見たくないんだ？」

明の首元には絆創膏が貼られている。白布の下からわずかに血の

跡が浮かんでいる。水姫は絆創膏をはがした。皮膚に、赤く細い線が残っている。水姫の手が線を撫でて、明の顔色を窺った。わずかに眉の角度が上がった。顔をしかめたのだろう。

鹿目辰巳に付けられた傷だ。

かわいそうに……。

「痛い？」

「痛くない」

明の腕は白く細長い。手は水姫よりも少しだけ小さい。力が抜けて少しだけ曲がった指先から、爪が覗いている。ぴかぴかとして綺麗だ。

純白の手のひら。手相が見える。手にできた皺は、その人物の来歴を表している。

この手がナイフを握っただって……。

この手が殺人を犯しただなんて……。

そんなこと、どうして信じられるだろう……。

水姫は明の右腕を口元に近づけて、自分の歯にあてがい、顎の力を込めた。「う……」「痛いよ、水姫」腕の皮膚には、半円形のくぼみの並びが上下にできた。そのくぼみには粘性を持った透明な液体が付着している。月の光がてらてらと輝いている。

腕の白さは、身体にも続いているだろうか。

その身体は、ワンピースの白い布で覆われている。ヴェールを纏っているみたいに、光を遮断し、禁制の領域となっている。

ここに立ち入ってはいけない。明に嫌われてしまう。

じっと見ていると、肺の呼吸運動で胸が上下していることに気が付いた。口から、明の息遣いが、普段よりもわずかに早い周期で繰り返し鳴らされる。

明の顔をよく観察した。客観的に見れば中性的な顔立ちをしているものの、まつげは平均よりも長く、肌は赤子のようにすべすべとしている。整った鼻筋、綺麗な双眸。よく見ると左右で瞳の色が若干異なる。右目がほんの少しだけ青みがかっている。

「私を見て」

眼球が明の眼を見る。

水姫はより綺麗だと感じた右目の周りに、自分の手を置いた。

「綺麗だね」

ここには時計がない。明も水姫も時計を身に着けていない。ねっとりと抵抗を受けるように、時間はゆっくりと進む。空気は湿気をもち、二人を包み込んでいる。

水姫は猛烈に、その眼球を手に入れたくなった。

懐からナイフを取り出す。すらっとした体に、月の光がまばゆく輝いた。

「欲しい」

ナイフを目のそばにあてがった。宝石のような眼球に、ようやく涙が溜まる。水で濡れた瞳は、何を映し出す鏡なのか？

明の口元は少しだけ笑った。

「君にならあげてもいい」

自分の口角が上がるのがわかる。そして、自分が一連の行為を、うっとりとした心持で行っていることに気が付いた。

ナイフを目の周りに突き入れようというとき、

ナイフの表面に、自分の顔が映った。

ぴたりと手が止まる。体が熱くなってじわじわと汗が噴き出る。

そして、明の眼を見た。鏡のように反射して、自分の姿が写り込む。
狂っている。
その顔は、夢で見たあの顔とそっくりだった。
路地裏の奥で笑っていた影の自分。どす黒くとても厭な顔をしていた。
醜く恐ろしいと思っていたそれは、今の自分だ。
気持ちが悪い。
泣いてしまいそうだ。
いや、泣きたいのは明の方だ……。
水姫はナイフを放り投げた。
それは白い閃光ののちに、砂浜に勢いよく沈み込んだ。
数舜。
「ごめん」
無意識の言葉。
言葉を意識する。
それは明の眼を奪おうとしたことに対する謝罪。
そんな厭な自分が生まれてしまったことに対する謝罪。
生まれてしまってごめんなさい。
「ごめんなさい、明」
明は首を横に振る。
水姫は明の双眸を見た。青みがかった右目と、黒い大きな左目。
左目の奥を覗く。そして今更気が付いた。
「Kaleido(カレイドス)Scope(コープ)……」

十四

「僕は母が嫌いだ。母も人殺しなんだよ。
僕が小さい頃、家族で遊びに行く約束をした。僕は昔から身体が弱かったから何度も入退院を繰り返していた。多少は家にいていい期間があって、両親が遊びに行こうって言ってくれたから、とてもうれしかったんだ。約束の日の前日、夜中にトイレに起きた時、二人の会話が聞こえた。楽しそうな声色で、僕も混ざりたかったけれど、でも子供は早く寝なきゃいけないから、次の日にそのわくわくを取っておこうと思った。それでも、夜中に両親がどんな会話をするのか気になって、結局聞き耳を立てていた。
母は、お父さんに冗談を言った。くだらない冗談だけど、決定的な威力を持っていた。僕はそれを聞いていた。お父さんは黙り込んで自分の部屋に戻り、翌朝に首を吊って死んだ。ねえ、水姫。母はなんて言ったと思う?」
水姫は首を振る。耳をふさいでいても聞こえてくる。言葉はまるで呪いのようだ。退けようとしても追いかけてくる。
『明の才能は素晴らしいわ。私じゃなくて、妹の才能を引き継いだのかもね。あなた、覚えない?』ってね。それを聞いたお父さんは、自分がそこまで信用されていないのかと思い悩み、死んだ」
「それは、辛いね」水姫は耳から手を放した。どうせ聞こえてくるなら、塞がなくても変わらない。
「辛い? 辛いなんてものじゃない」明の言葉に力がこもった。「何度、母を罵ったことか。『お前は、人殺しだ』『お前のせいで、父さ

んは死んだ』って、母の耳元で呪詛の言葉を囁き続けたんだよ。日が経つごとに、母は衰弱し、ついにこの間自殺をした」
「お母さんの死体はどうなったの？」
「僕が井戸に捨てた。僕の家の近くに古井戸があっただろ。あの中に落として、その上から蓋をして、おもりを乗せた」
水姫は思い出した。確かに薄汚れた井戸があった。
「ねえ、一つだけ教えて。お母さんは、なぜそんな冗談を言ったの？」
「それは、わからないよ。母には双子の妹がいて、芸術の才能があることは僕も知っていた。母にはそんな才能なかったから、嫉妬してそんなことを言ったのかもしれない」
「明、明はやっぱり殺してない。お父さんとお母さんが死んだのは、全部事故だったんだよ。明が殺人罪にとらわれることはない。それに、鹿目辰巳のことだって、正当防衛だよ」
「いいや、人殺しだよ。母を責める意図をもって、母に呪いの言葉を投げかけていたのは事実なんだから。……もしかしたら、神岡家の血は呪われているのかもしれない」
「そんな非科学的なこと言わないで」水姫は慟哭した。「水姫はお母さんを殺してないじゃない、自分のことをそこまで責めるなんて、どうかしてるよ！」
「そう、どうかしている。どうかしていないと人は殺せない」
「詭弁だよ……」
「いいかい水姫。司法制度では、自分の罪は結果によって定められている。しかし、僕個人としては、罪は自分の意識や行動によって定められるべきなんだ。司法で裁かれないとしても、やはり僕は罪人なんだ」
「でも……」
「何も言わないでほしい。僕は自分を許せないんだ。僕はこれから自首する」
「明、正気？」
「間違いなく正気だ。
だからしばらくの別れになる。いつ戻るかはわからないけれど、これから先、未来であったら、僕のことを殺人犯だと思って忘れていてほしい」
そう言って明は砂浜を去っていった。

十五

神岡明は逮捕された。
その知らせを聞いた吉村黎、一条早雪は、その眼に驚愕の色を浮かべた。特に一条早雪は、自分の推理が否定されたことに大きなショックを受けて、学校を辞めた。その後どこに行ったのかは誰も知らない。
吉村黎は目に深い悲しみを湛えてかぶりを振った。そして、一人にしてほしいと言って自家用車に乗り込みどこかへ去っていった。
水姫は、明と顔を合わせることができなかった。
それから水姫は、あまり学校には行かなくなった。授業を受けても空虚な時が過ぎるだけである。勉強に関しては特に心配することもなく、家に籠っていて、鬱積した心の老廃物を捨て去りたいときにだけ学校に行くようにした。

喪仁田蘭と雨木薫は、学校に行けば暖かくしてくれたし、水姫自身、時々すすんで事務所に遊びに行くこともあった。
喫茶『エラリィ』は相変わらず、おいしいケーキを提供してくれる。本棚に置いてあったエラリー・クイーンの本はすべて読んだ。
喪仁田影像は事務所をたたんだようだった。
「これからはＬＥＮＳがさらに発展して、情報の伝達は格段に速くなる。探偵なぞ必要ない時代が来るだろう。それに、そもそも儂の専門は浮気調査だしのう」

数か月後、喪仁田影像から連絡があった。
神岡明の量刑が決定した。
罪名は死体遺棄と殺人罪で、執行猶予なしで、懲役十年を言い渡された。
しかし、水姫はその詳細に疑問を覚えた。
死体遺棄は、母親の死体を井戸に投げ捨てたことへの罪名だ。
そして、鹿目辰巳殺害は、過剰防衛であると判断された。というのも、その死因は、非常に強くナイフが押し込まれたことによる出血死らしい。これは明確な殺意を表していると、司法ではそのように扱われた。
明が、鹿目辰巳に対して明確な殺意を……。
果たしてそうなのだろうか……？
シスター・バーバラこと荒巻凛子殺害事件に関しては未解決となっている。こちらは、水姫の立場が危ういものになっていると聞かされた。たしかに、自分は疑われても仕方がないと思った。真犯人以外で、シスター・バーバラに会ったのは水姫が最後なのである。
水姫も事件の関係者として何度か警察に出向き、供述をした。
警察からすると、いまいち決め手に欠けるようだった。
鹿目辰巳の事件も、シスター・バーバラの事件も、凶器の刃物から指紋は検出されなかった。後者に関しては、密室のドアの下から滑り込ませたと思われる鍵にも指紋はついていなかった。
事件の後、海岸と教会は封鎖されてしまったらしい。管理者がいないため、警察側も取り扱いに困っているとのことだ。このまま、誰の記憶からも忘れ去られていくのだろう。事件は、関わった人間の記憶の中にだけ残され、警察やその他の人々は、調査をまとめた記録を見ることで、自分の脳内に再現するしかなくなったのである。

水姫は高校を卒業した。水姫は高校生活の大半を、自宅でコンピュータに向かって過ごした。作りたいものを最初にイメージして、それに向かってコードを打ち込んでいる間、無心になることができた。話す相手は、母と、半年に数回だけ帰ってくる父を除けば、喪仁田蘭と雨木薫、そして喪仁田影像だけだった。雨木薫は高校を卒業するのと同時に、現在交際中の恋人と同棲を始めるらしい。喪仁田蘭は意外にも、大学の工学部へと進学した。
水姫はといえば、このまま自分の部屋で、これまでと変わらない生活を続けようとしていた。自室に籠っていても金は稼げる。むしろ、水姫のスキルならば、外に出て働くよりも、明らかにそちらの方が効率の良い仕事ができるだろう。
卒業式の日、水姫は久しぶりにＬＥＮＳを装着して参加した。予感があったからである。その帰りに、電車に乗って隣の市へと向かった。

電車を降りて二十分歩く。水姫はここ一、二年で明らかに体力が落ちたことを自覚した。ずっと家に籠っていたからだ。
踏切の多い道を渡りたどり着いたのは、共同墓地だった。
隣町の教会が管理している。目の前には海が広がっていて見晴らしが良い。白い木製の柵で囲まれた敷地に入り、琥珀色の通路を歩いた。ガーデニングされているらしく、通路の外は芝生で、ところどころに淡い色の花や、小さな葉をつけた小ぶりな木々が植えられている。
墓地には、無数の十字架が屹立している。それぞれに聖名や聖書の文言が刻まれている。白い十字架の乱立は全くの無個性を強調しているように見える。そう思うと、肉体や精神の個性は生きている間の閃光の形に過ぎないのだ、とも思えてくる。
目的の墓にたどり着く。他の墓とは様相が異なり、柿色で、縦に開いておかれた本のようにV字に固定されている。その中央には十字架がくりぬかれており、左の碑には聖名が、右には聖書の言葉が記されている。
シスター・バーバラの墓である。
水姫は、彼女の深い慈悲の表情を忘れることができなかった。特に、自分が最後に会った人物だということが、水姫の中で一つの心残りになっていた。
水姫は懐から懐中電灯とナイフを取り出して、墓の前に置いた。
そして、心の中で懺悔をした。
――シスター・バーバラ、私は、あなたから授かったナイフを、親友の血で染めようとしました。お許しください。
目を閉じると、潮風の匂いをよく感じる。近くを電車が走る。音から察するに、比較的車両数は少ない。
後ろに気配を感じる。硬い床が靴と反響して高く鳴る。
水姫はゆっくりと振り返った。
それは、バーバラの死体を見つけた時に、礼拝堂にいた女性だった。
二年以上たっても、その容姿は変わっていない。やわらかい雰囲気に、若干の釣り目が特徴的だ。そして、相変わらず動きはゆっくりしている。
よく見ると、その眼は赤く、まるで吸血鬼のようだと思った。
「お久しぶりね、秋野水姫さん」
水姫はこの再会を想定していた。口元が微笑を湛えた。
「お会いできると思っていました。お久しぶりですね、神岡優子さん」

十六

目の前の少女は、あの時と変わらず、二十歳の乙女の美貌を保っていた。
しかし、神岡優子ならば、それが可能だろう……。
なぜなら、彼女は吸血鬼なのだから。
「あなたのようなお若い方は、家に閉じこもっていないで、外に出た方が身のためよ。肌が青白くて、幽霊みたいだわ。人生の先輩としてのアドバイスです」
「そうですね」水姫は苦笑いをする。

「私のことを神岡優子と認識できるということは、あなたは現在、ＬＥＮＳを使用している」
「はい」
「そして、私もそれを知っていた。ここにくるという予感もあったわ」
「ＬＥＮＳは神岡グループのインターネット事業会社ＫＮＣと、医療機器メーカーＭｅｄｉＫａｌの共同開発製品です。ＬＥＮＳは従来のコンタクトレンズと異なり、一度デジタル処理を行い、加工された映像を目に映し出している。そうでしたね」
「そうよ」
「あなたはＬＥＮＳを用いることで、他人に見せる自分の姿を若い頃の自分に固定した。ＬＥＮＳにはそんな機能もあるのですね」
「限られた人間しか知らない技術だけどね。あの時、あなたが教会に戻ってきたのは予想外だった」
　明は、嘘の映像を信じているかもしれない、と危惧していた。それが、まさに水姫に対して行われていたのだ。
　あの女性が神岡優子ならば、彼女の動作がゆっくりなのも、密室を開けるときに、自分が全く動かなかったのも頷ける。彼女は老体だったのだ。
「あなたはシスター・バーバラに、何の用だったのですか？」
「古いよしみでお話しようと思ったの。日中は苦手だし、あまり目立たないように、夜中に尋ねたのだけど、鍵がかかっていたから、誰か来るのを待っていた」
「危険ではないのですか？　あなたは有名人ですよ」
「よく朱音にも怒られたわ」神岡優子は少女の姿のままいたずらっぽく笑った。
「朱音？」
「私の一番の親友です。若林雪子と言えばわかるかしら」
「若林雪子……あぁ、女流作家の。明の家の本棚に著書がありました。お友達だったのですね」
　神岡優子はにっこりと微笑んだ。
「ええ。彼女は昔、私の下で働いていました。私がこの姿の時からね」
「シスター・バーバラといい、優秀なお友達が多いのですね」
「私の下で働くものは、一流でなければなりません。それと、優秀な、という言葉は、友達という言葉と連結させない方がいいわ」
「そう……なのですか」
「神岡明のことを気にしているのね？」
「はい」
「あなたは、友達というものを誤解しているわ。あなたはいつから、神岡明と友達なの？」
「それは……」
　水姫は今でも思い出せる。あの鮮烈な出会いは忘れない。
「父の仕事の都合で私は転校を繰り返していました。結果的には今の住居に落ち着きましたけど、当時は不安でした。結局、小学校で友達はできませんでしたけどね」
「そう」
「明は、中学校一年生の最初、病気で入院していました。二学期ごろ、私は初めて学校に来た明を見ました。彼女は、ミイラみたいに頭に包帯を巻いていました。みんな気味悪がりました。それから明

は、またすぐに入院しました。
　ある日、美術の授業があって、『自分の夢を描きなさい』というテーマが出されました。多くの人は、年齢にふさわしく医者だとか漫画家だとか、将来の夢のことを描いていたんです。全員の絵が張り出されたその中に一枚だけ、異様に目立つ作品がありました。それは、大きな満月の前で、羽の生えたドラキュラ伯爵がタクシーを運転している絵でした」
「ユニークね」神岡優子はくすくすと笑った。
「それを描いたのがこの間のミイラの子だっていうから、衝撃的でした。名前を見たら、男の子なのか女の子なのかわからないし、私は気になって、明が入院している病院まで訪ねて行ったんです。ミイラだった子は、次に会った時には包帯を外して、つやのある髪と、綺麗な瞳の女の子になっていたんです。
　部屋にはスケッチブックが積まれていて、見せてもらうと、幻想的な絵がたくさんあって……あ、でも、この間明の家で見た絵よりは、簡素な絵でした」
「それがあなたとあの子の出会いなのね」
　神岡優子は慈愛に満ちた顔をした。
「あなたは、その簡素な絵をみて感動しましたか？」
「……いいえ。中学生にしては上手だ、としか」
「そうでしょうね。……でも、あなたはこれまで、明と友達でいる。あなたは明と直接話して、その人間性におもしろみを感じた。自分とは正反対の嗜好を持つ人間に無意識に惹かれたのよ」
　水姫は黙ったままだった。無意識が感じ、起こした行動について、そう簡単に解釈を与えられるほど、俯瞰的にみる能力はなかった。
「あの子には才能がある。私が知っている限り、あの子は様々な絵画の技術を吸収していきました。あらゆる作風を模倣し、活かすことができる。しかしそれではただの物真似師です。私はそれを一流とは認めません。それでも、あの子は成長することは止めないでしょう。水姫さん、最近の明が描いた絵で深い感動を覚えたものはありませんでしたか？」
「感動……ありました」
　神岡優子は目を見開いた。
「それは？」
「『脳』と名付けられた作品です」
「どんな作品なのかしら」
「『脳』は……、黒いキャンバスに、星のように点群が散らばっています。一見すると、ただそれだけのように見えますが、しかし、これらの点群は、実はつながっているのです。しかも、星座のようにただ平面上に描かれているというのではなく、奥行きが存在する、三次元の絵なんです。
　なぜこれが脳なのか？　それはこの構造が、あらゆる三次元ネットワーク構造の性質を内包しているからです。人間の脳のニューラルネットワーク、宇宙の大規模構造、インターネットの構造など、そういったものを、絵に描かれた点群だけで表現しているのです。
　人間の脳が二次元表面上で、三次元構造を表現するように誘う能力。それは、人間の能力を超越していると言わざるを得ません。これこそが、私が深く感動を覚えた、明の天才的な才能なのです」
「すばらしい」
　神岡優子はゆっくりとこちらに歩み出した。洋風な霊園に浮かぶ

神岡優子の存在はまさに女吸血鬼カーミラのようで、このまま首筋に噛みつかれても、自分は抵抗できないという念を抱かせた。
「そう、神岡明は、空間認識能力、芸術的な表現センスといった点において、間違いなく天才です。まさに一流の能力を有している。しかし、あの子が逮捕されたことは、この世の損失となります。その才能を、世界の発展のために活かしてあげたい。そうは思わない？」
歌うようなメロディが口ずさまれる。しかし水姫は、優子の誘いの文句に、どこか底知れない不気味さを感じて言い淀んだ。
「……」
「神岡明はあなたの親友、そうでしょう？」
「はい」
「それなら、あなたが助けてあげなければね」
「はい？」
「私は、あなたをスカウトしに来ました」
「スカウト？」
「我々は、あなたがインターネットで公開したシミュレーションの成果や、仮想空間の構築技術について、高く評価をしています」
「ありがとうございます」
「そして、秋野水姫さん。この神岡優子が、あなたをＫＮＣの新事業部、次世代ネットワーク事業部門に招待します」
「そ、それって……」
神岡優子は微笑み、手を差し出した。赤い目はまっすぐ明を見据えている。その強烈な誘い。白い肌。細い腕。
「意識と意識を相互的につなぐプロトコルを、私たちは議定するの」
「はい……」
水姫は吸い込まれるようにその手を取った。血は交わされない。赤い瞳に見据えられた水姫の意識は、確かに自分の意思で、その手を握り、契約を交わしたのだった。

十七

水姫が神岡優子の手を取ってから三年の月日が経過した。それは同時に、水姫がＫＮＣ・ＮＧＮＤ（次世代ネットワーク事業部）の主任に就任してから三年たったことを意味する。世間でのＬＥＮＳ普及率は八十パーセントを超えた。情報工学者たちの間では、インターネット空間における情報伝達速度を示すファクターの時間発展性をシミュレートする試みが行われ、幾度も計算がなされたが、月日が経つごとに再計算を迫られ、上方修正が繰り返される一方だった。
水姫の下には、何人ものエンジニアが付いた。水姫は彼らを優秀な人材だと評価している。そして、彼らをまとめ上げるマネジメント係も優秀だった。一般的に、開発チームが大きくなればなるほど、まとめあげる労力は大きくなり、人間の数に対して、成果はある程度の割合の損失を受ける。しかし水姫の開発チームはその損失率が限りなく小さい。ほぼ人数分の働きをチーム全体で行うことができる。これはマネジメント係が情報工学に精通しているのに加えて、マネジメント能力も一流の人材だからである。
水姫はと言えば、次世代ネットワーク開発に向かって、自身の行うべき適切な仕事をこなし、他者に任せるべき仕事を他者に任せて

いればよかった。面倒な雑事や、些細な仕事はすべて部下がこなした。研究開発を進めるにあたり、水姫の出した要求はほぼすべて飲まれた。神岡優子の推薦が主任である水姫に多大なる権限を与えているのである。

このようにして、ＮＧＮＤの次世代ネットワーク開発は飛躍的に進展し、そのプロトタイプとなるネットワークプロトコルの開発に成功した。

「それにしても、なんで『ＨＡＬ』なんだろうね」
「噂だけど、かつて存在したコンピュータ会社『ＩＢＭ』を、一文字ずつずらしたらしいよ」
「ばか、それはデマカセだ」
「あれ、そうだったのか」
「秋野主任に聞かれてみろ。つねられるぞ」

秋野水姫はその日、有給を取ってとある場所へ向かっていた。これまで仕事の鬼と部下の間で噂されていた水姫が有給を申請した時、職場の誰もが目を丸くし、閉口した。超常現象が起きるかもしれない、と騒ぎ立てた部下は、その場で解雇を言い渡された。

水姫がタクシーに乗り込み、ＬＥＮＳの無線操作で自動運転プログラムに行き先を告げると、ゆっくりと動き出した。水姫は客席のソファに沈み込み、目をつむった。昨日まで休むことなく働いてきた。三年間で一日も休まず、ただひたすら次世代ネットワーク『ＨＡＬ』の開発に打ち込んできた。三年かかって、プロトタイプが完成した。

遅すぎる。

人間の一生は限られている。肉体は時間の経過によって不可逆な変化を遂げ、精神は肉体に引きずられてそのありようを変貌させる。神岡明の逮捕から五年が経過している。水姫はすでに二十歳を超えている。それは明にも言えることだ。一般論的な人間の成長の理論に照らせば、この五年間で、水姫の体の細胞は生まれ変わり、精神は変容した、昔の水姫とは別の人間になっているはずである。

貴重な時間を無為に過ごすことは許されない。世間では、五年前の事件はすでに色あせた過去の遺物だ。生もののように劣化するのが早い。

ＫＮＣはＴ都の首都圏に位置していた。一般のサラリーマンは通勤に多大な負担を強いられるが、その無駄を省くために、水姫はＫＮＣから徒歩十分程度の高級社宅に住んでいた。徒歩で移動することもあれば、タクシーを使うこともある。生活費や交通費はすべてＫＮＣの負担である。近くには森林浴のできる公園やスーパーマーケットなどの日用品店などがあり、研究開発には最適の環境と言えた。これらはすべて神岡グループの所有物である。

車窓の時間発展は、白く無機質な壁や、ガラス張りのビル群は次第に数を減らしていく。人口の分布にもばらつきがある。そうしてみていると、窓というのはスクリーンのように感じる。小学生のころ、教室の中から、開け放されたドア枠の中の廊下を見ていると、様々な人が種々の仕草で歩行していたのを覚えている。その時の水姫は、まるで水族館のガラスケースのようだと感じた。そのなつかしさが、車窓にアナロジーとして反映された。

Ｃ県に入ったところで、急に様子が変わった。ビルと一般住宅が

混じり合う。Ｔ都よりも平均して薄汚れた印象だ。しかし、これでも以前よりは大幅に発展した。街並みは変化した。電線の本数は減ったし、木々は人工的に増やされたものが多い。

タクシーは大通りを走行していた。周囲にはマンションが連なっている。駐車場に車は少なく寂しさを覚える。やがて高いレンガ敷きの障壁が何百メートルも続く通りにでた。その土地の衛星写真で上から見ると、レンガ障壁は長方形のブロックを形成しており、その内部の領域を覆い囲んでいることがうかがえる。タクシーは豪勢な門の前で停まった。鉄格子が入口を閉ざしている。やはりレンガ造りになっており、一見すると城のように見える。ＬＥＮＳと連携したセキュリティシステムが身分証明を行うと、電子音が響いて水姫の入構が許可された。鉄格子が内側に扉のように開き、タクシーはさらに奥へと進んだ。

そこは、Ｃ県の外縁部にほど近い場所に位置する刑務所である。高いレンガの壁は受刑者を逃がさないために設置されている。身分証明も欠かさずに行うことが義務付けられている。

敷地内のレンガ障壁のそばに駐車場があり、タクシーをそこに駐車した。降りると、思ったよりも広い、と感じる。

幾何学的な形状の寂れた庭があり、その奥には、重厚な構えの庁舎がそびえたっている。庁舎に入り、面会の手続きを行う。顔をしかめた事務員がじろじろと水姫を見つめた。わずかに緊張した。荷物を預け、番号札を受け取る。

待合室で待っている間、脳の一部は、『ＨＡＬ』のさらなる発展のための計算を行っていた。残りの領域では、五年前の事件の映像を思い描いている。事件は記録によって客観的に処理される。一方で、人間の記憶とはどうしても主観が入り込むものだ。記憶を記録にコンバートできれば、他者への情報共有は圧倒的に早くなる。水姫の構想では、次に着手すべきは記憶の記録化だ。ただ、それが簡単にできないから世界中の研究者が困っているのだ。

しかし、ＬＥＮＳと『カレイドスコープ』を用いれば……。

疑似的にではあるが……。

水姫の番号が、面会部屋の番号とともに呼ばれた。思考を一時中止して立ち上がり、部屋に入る。アクリル板によって分断された部屋の向こう側に、厳めしい顔の男の刑務官が経っていた。

「お名前をどうぞ」

「秋野水姫です」

「結構です」

男は部屋を出ていき、三分くらいで目的の人物を引き連れて戻ってきた。

「やあ、久しぶりだね、水姫」

「久しぶり、明」

やはり綺麗だと思う。神岡明は多少髪が伸び、顔つきが大人びたものの、全体的な印象はそこまで変化をしていない。橙色の囚人服が多少野暮ったいというくらいである。この野暮ったさは、いつの時代も不変なのだろう。

「面会時間って、何分なの？」

「基本は三十分。たまに十五分のときもあるけど。今日は三十分って聞かされているよ」

水姫は頭の片隅に三十分で落ちきるような砂時計を思い浮かべて、ひっくり返した。

「水姫、初めに行っておくけれど、ここで僕が水姫と会うのは、今回で最後だ」
「どうして……？」
「自分にけじめがつけられなくなりそうだから」
「そう……わかった」
「ありがとう」
「ええと、ここでの生活は、どう？」
「まあまあかな。本や画材なんかは差し入れてくれるから、意外と自由は利くよ」
「そうなんだ」
「外の世界はどう？」
「うーん、多少変わったかな。最近はずっと首都圏で働いているから、わかんないや」
「変わったのかもね。水姫、少し大人っぽくなった」
「自分ではそんなに変わってる実感ないけどな」
「連続的な変化に対する認識は、自分の思っている以上に過小評価されるものだよ」
「確かにね」
「やっぱり僕、変わってないな。小難しい語彙で会話をしようとする癖はやめた方が良いね」
「それに気が付いたってことは、変わったってことだよ」
「そっか……。ねえ、ほかのみんなはどうしてる？」
「えっと……この間、蘭と薫から連絡があったよ。蘭は工学部でロボットを作っていて、ロボットバトルコンテストで優勝したみたいだよ。薫は……高校卒業と同時に付き合ってた彼氏さんと、最近別れたって嘆いてた」
「蘭がロボットを？」
「うん」
「へえ、意外だなあ。もっとかわいらしいことをやっているのかと思った」
「蘭のロボット、結構かわいい感じだったよ。ファミレスに、平行移動をしてくる猫型ロボットあったじゃない」
「うん、懐かしいなあ」
「その猫型ロボットのスピードを上げるんだ。身体の中心からレーザー熱光線がでて、相手の身体を焼き切ることができるっていう」
「そうなんだ。そういう殺人ロボットが出てくるミステリ小説を読んだことがあるよ」
「読者からブーイングが来そうだね」
「まあね。薫は、彼氏さんとはうまくいかなかったの？」
「うん。それで、失敗を糧にして恋愛失敗コンサルタントとして動画配信をしているみたい」
「ふうん……」
「あまり興味なさそうだね」
「水姫は？」
「私も、あまり面白いとは思わないかな」
「あはは。……もっと聞きたいことがある。喪仁田影像先生は？　一条先生は？　吉村は？　喫茶店のおばあちゃんは？」
「沢山質問があるんだね」
「ごめん、気になっちゃって」
「……後で手紙おくるのじゃダメ？」

「うん、それでいい」
「あ、私、神岡優子さんに会ったよ」
「え、ひいおばあちゃんに？」
「うん」
「どこで？　いつ？」
「実は、最初に会ったのは、シスター・バーバラの教会なんだ。ええと、シスター・バーバラの、その、遺体を見つける直前」
「そうだったんだ」
「二回目に会ったのは、高校の卒業式の後の、シスター・バーバラのお墓参りの時かな」
「ああ……僕もお墓参りに行きたいな」
「そうだね」
「あの人は……神岡優子は、僕には優しかったなあ」
「僕には？」
「お母さんたちには厳しかったんだ」
「そうなんだ……」
「だから僕たちは、あの寂れた家に住んでいたんだ。母はひいおばあちゃんや他の家族と仲が悪かったから」
「そうだったんだね。神岡家なのにどうしてだろう、って思ってた」
「あの家は、どうなったの？」
「私が優子さんに頼んで、そのままにしてもらってる。たまにお掃除の人がくるけどね」
「ああ……ありがとう。……みんな、先へ進んでいるんだね」
「……うん」
「……」
「なかないで、明」
「うん、ごめん。貴重な面会時間だものね」
「うん」
「ねえ、水姫、君の話を聞かせてほしいな」
「明……うん。私はね、神岡優子さんのところで働いてる」
「ひいおばあちゃんに？」
「うん。そこで働かせてもらってる」
「へえ、すごいなあ」
「ありがとう」
「なにをやってるの？」
「次世代ネットワークの開発」
「ネットワーク？　インターネット？」
「うん……」
「そっか……。水姫は、数理関係の分野が得意だったよね」
「得意というか、小さい頃、お父さんに習ったのが続いてるだけだよ」
「それが、ひいおばあちゃんに認められたってことは、とんでもないことだよ」
「ありがとうね」
「高校は、楽しかったかい？」
「……」
「水姫？」
「私、明がいないと、だめみたい」
「水姫……それはダメだ」
「明？」

「君は、一人でも生きていける強さを持たなくてはだめだ」
「でも……大事な友達を失った穴は、簡単には塞げないよ」
「……しょうがないやつだな」
「明、悔しくないの？　明には、事件の真実を明らかにしたいという気概がないの？　私、どうしても明があの事件の犯人だとは信じられないの」
「……今更、なにいってるんだよ」
「明、今日はね、あなたに頼みたいことがあってきた」
「頼みたいこと？」
「明、明の左目は、その大きくて黒くて綺麗な瞳は、カレイドスコープでしょう。それを装着したのは、きっと、包帯を巻いて学校に来たときの前後だったはず」
「さすがにわかったかな。病気で身体は悪かったし、視力は右目だけしか残っていなかった」
「あの半月の夜、明の眼を間近でみて気が付いた。ねえ、明。カレイドスコープは眼球とほとんど同じ動作をする接触型コネクトデバイスなんだよ。ＬＥＮＳがコンタクトレンズの進化だとすれば、カレイドスコープは眼球の進化型。ものすごく高価だけれど、神岡家なら所有していてもおかしくないかもね。なぜなら、明は神岡家の血を引き、神岡優子に才能を認められた子だから」
「水姫、才能という観点で僕を見ないでほしい。神岡優子は、ひいおばあちゃんは、家族だからこそ、僕にカレイドスコープを授けてくれたんだ」
「ごめんね、明」
「かまわない」
「話を続けるね。明。そのカレイドスコープは、普通に生活している分にはＬＥＮＳとそこまで変わらない使用感をしているの。でも、眼球というのはもともと、脳と視神経で繋がっている。これはコンタクトレンズとは明らかに違う点。角膜を通って入ってきた光が、水晶体によって集められ、薄い網膜の中の十層の構造で電気信号に変換される。電気信号は視神経へとつながり、脳へと届けられることで、人間は色の分布図を識別することができる。カレイドスコープは、眼球の超精密な機構をすべて再現し、さらに得られた電気信号データを加工して、様々な機能を利用できるデバイスなの。これは神岡優子に才能があり、そして神岡グループ・ＫＮＣがあったからこそ生まれたテクノロジーなの。
　私たちは、ＬＥＮＳやカレイドスコープを、ワイヤレスでネットワークに接続する相互的な仕組みを開発した。
　情報の拡散というのは、記録の受け渡しなの。ＬＥＮＳとカレイドスコープは今まで見てきた映像を保存している。カレイドスコープに至っては、映像の保存に加えて、これまでの記憶までも、明確にデータ化できるようになると私たちは考えている。直接、神経と接続されたカレイドスコープの電気的作用によって、脳の記憶の信号を取り出し、記録として扱えるようにするの。
　私たちは、そのプロトコル『ＨＡＬ』のプロトタイプを開発した。これがあれば、明が見てきた記憶を、見ることができる」
「……それで、お願いというのは」
「明、あなたの記憶を、私に見せてほしいの」
「なんだって」
「お願い明。私は真実を知りたいの。どうしても明が殺人犯なんて

信じられない」
「僕は確かに鹿目辰巳を刺して、殺害した。僕が見たものは僕が言った通りだよ」
「明、私ね、思うんだ。明は、母親を死に追い込んだことをものすごく後悔してるって。あの日、あの満月の綺麗な夜に、私を海岸に呼んだのは、明が母親を殺害したことを死にたいほどに後悔して、後悔して、一人でいるのが怖くなって、人と一緒にいたかったからなんでしょう。私と一緒に過ごすことで、一人で背負いきれない重圧を軽くしたかったからなんでしょう。喫茶店で一人で本を読んでいた時も、明は罪を一人で抱えることが重くて、辛くて、どうしようもなかったからなんだよね。それで、喪仁田事務所に向かった私たちを追いかけてきたんでしょう。友達はね、そういうときのためにいるの。一人だと背負いきれない重荷を、一緒に背負ってもらう。きっとそれが、友達の持つ性質のうちの一つなんだよ。この五年間、明はこの刑務所の中で、一人で過ごしてきたのでしょう。そのつらさを、私にも分けてほしいの。だって、私は明の親友だから」
「水姫……泣かないでくれ」
「明、真相のあり方というのはね、人間の活動や意思とは全く関係がないの。明が自分の意思によってこの道を歩むことを選んだのなら、私はべつのアプローチを試してみたい。真相を解明して、この世界の摂理にしたがって、正しい司法制度に任せるの。もし明が本当は鹿目辰巳を殺したのではないのなら、今の明の有様は間違っている。私は真実を知って、世界がとるべき本来の姿に戻したいの」
「水姫……わかったよ」
「明……」
「君になら、僕の記憶を見せてもいい。ただし、お願いがある」
「お願い……何？」
「僕の醜い姿を見ても、友達でいてほしい」
「当たり前だよ」
「ありがとう、水姫。それで、どうやって見せればいいの？」
「明のカレイドスコープの、プロトコルアドレスを教えてほしい」
「アドレス？」
「そう。製品の個体ごとに定められている十八桁のナンバーなの。わかる？」
水姫は焦っていた。頭の中の砂時計は、すでに落ちきろうとしていた。少々長く話過ぎた。いつの間にか汗をかいている。
「思い出した」
「教え……」
その時ブザーがなった。面会終了の合図である。刑務官が立ち上がり、「終了です」と言って強制的に遮った。
「まって！」
明は立ち上がる。水姫も立ち上がり、手を伸ばすが、透明な壁が硬く水姫の手を受け止めた。
行ってしまう……。
これでおしまいなのか……。
その時、刑務官に腕を握られた明が、こちらに顔を半分向けて、口を動かしているのが見えた。
ノ・オ・ダ
ノーだ？
脳だ？

明の姿は消え、水姫は一人取り残された。

十八

水姫は刑務所からでると、大急ぎでタクシーに飛び乗り、目的地を告げ、できる限り最速で到着するように設定して走らせた。

大粒の雨がタクシーの外装を叩いた。

水姫は雨の音が好きだった。特に、車に打ち付ける雨のくぐもった音を社内で聴くのが落ち着く。運転はプログラムに任せて、水姫は後部座席で目をつむっていた。

ノーだ。

脳だ。

脳……人間のすべてを司る部分。たった一キロ強の臓器は、驚くほど複雑な構造をしている。

脳を理解することができれば、

人間の認識を、

現実を、

作り変えられるだろうか？

夢さえも、自由に見られるようになるだろうか？

個人の意識とは、下流なのだろうか？

源流では、繋がっているのだろうか？

繋がる。

繋がるとは、二つの対象が、相互に関係を持つことだ。

機械による相互接続は、メメックスやザナドゥ、ＷＷＷが提案された。

脳のつながり、精神のつながり、心のつながり。

これらはどのように規定されるのだろうか？

窓ガラスが雨粒で覆われ、像が不規則に歪んでいた。目的地まであと十分もかかる。懐かしい街並みが広がっている。三年前よりもさらに寂れた気がする。

喪仁田事務所の前を通った。二階の看板は外されている。一階の喫茶店の看板は、まだ生きていた。水姫はため息をついた。

「帰りに寄っていこう」

それからしばらく走らせて、ようやく目的地に到着した。長いレンガ塀は一部分が崩れかけていた。スリットの開いた木製のドアは相変わらずだ。水姫は鍵を取り出して、開錠し、敷地に入っていった。傘を持っていなかった。構うものか。

五年ぶりに訪れた神岡明の家は、全体的に老朽化が進んでいた。誰も使用せず、リフォームなどもしていないらしい。水姫としてはその方がありがたかった。

水姫は靴を脱いで家に上がった。廊下を踏むと鳴るぎしぎしという音は、以前にもまして大きく、劣化が進んでいるのが分かった。

記憶を頼りに廊下を進んでいった。

目的の部屋を見つけた。心臓が高鳴った。古臭いドアを開ける。

時の止まった部屋が五年ぶりの光を浴びた。明のアトリエは、あの時のままだった。何枚も束ねられた絵画や、塗料と黴臭さの入り混じった匂いは、妙に懐かしかった。

そして、奥のイーゼルに掛かった絵画も。

よく倒れなかったものだ。

それは、明の絵画の最高傑作。
『脳』
暗い背景に、点が散らばっただけの絵。
二次元なのに、三次元構造を浮き立たせる、不思議な絵画。
宇宙のネットワーク構造、インターネット構造、脳のニューロンネットワーク構造。
明の天才の証明。
水姫は、震える手で、絵画をイーゼルから取り外し、裏面を見た。
あった。
十八桁の数字。
これが、
明の、意識のアドレス。
水姫はその数字を何度も読みなおし、完全に記憶した。
ありがとう、明。
私は、真実を明らかにするよ。
その後のことは、まだわからないけれど、
自分にできることをするだけだよね。

十九

喫茶『エラリィ』の店主は変わっていた。つまり違う人物になっていたということだ。落ち着いた雰囲気を纏った金髪の女性が厨房で文庫本を読んでいた。年齢的には水姫とそこまで違わなそうである。

店内に入ると、耳をすませないと聞こえないほどの音量で、テレビの放送が流れている。これは五年前と同じである。夕方のニュースをやっていた。
「あれ、お客さん？　めずらしいなあ」
「あの、以前の店主さんは？　おばあさんの」
「ああ、恵子さんは、二年前に亡くなりましたよ」
「亡くなった……そうですか」
水姫は店の入り口で立ったままだったが、冷たい雨と風が吹き込んできたので、仕方なく店内に入った。
「恵子さんを知ってるってことは、お客さん、結構前に来てた人？」
「ええ、まあ」
「なるほどね。でも名前知らないってことは、常連ってほどじゃなかったでしょ」
「そうですね」
水姫はテーブルについて、コーヒーを注文した。全メニューが百円値上がりしている。不景気なものだ。
「あの、店員さんは、恵子さんとどのような……？」
「アルバイトでーす。……のはずだったんだけど、恵子さんがいきなり亡くなったものだから、仕方なくあたしが店長やってるの」
「そうですか……その、なぜお亡くなりに？」
「寿命」
「あ、よかった」
「恵子さん、腰曲がりだったけど、結構ちゃんとした人っぽい感じだったでしょ。あたしもすごい好きだったんだけど、やっぱり老いには勝てないっていうか。……っと、今そっちに持っていきますね」

「あ、ありがとうございます」
店主は水姫のテーブルにカップを置いた。カップもコーヒーの香りも、以前と変わっていない。
そうか、亡くなったのか。あの老店主は、頑固そうな顔をしていたけれど、老体には勝てなかったのか……。となると、喪仁田影像も気になる。明との面会で、後で手紙を出すとは言ったものの、水姫も実情は知らない。
一度だけ、吉村黎をネットニュースで見たことがある。吉村黎は、世界宗教『彩の輝き』の幹部に昇進したようだ。明の逮捕によって一応の解決を見せた五年前の事件を皮切りに、内部での立場が上がったらしい。
コーヒーを啜ると、味わい深い苦みが口に広がった。五年前に飲んでいたコーヒーと同じ味なのだが、以前よりもおいしく感じる。味の質が上がったか、自分の感じ方が変わったのかの二通りだ。水姫的には、前者に一票を投じたいところだ。
「店員さん、さっき本読んでいましたね」
「そうなんですよ。私も自分では全然買わないんですけど、恵子さんが好きだったから、暇つぶしに読んでるんです。お客さんもいないですし。ははは」
げらげらと大きく口を開けて笑う店員を、水姫はなんとも言えない気持ちで見つめた。舌に金具を付けているのがちらりと見えた。
「私もその本読みましたよ」と水姫。
「へえ、犯人だれなんですか？」
「秘密です」
「まあ、そうですよね」
「店員さん。その小説に出てくる町、この町に似ていると思いますか？」
「え、架空の町ですよね？」
「そうですけど、例えば雰囲気とか」
「うーん、あまり似てるとは思わないかなあ」
「ですよね」
水姫はくすくすと笑った。
「お客さん、もしかして、ここの本全部読んだんですか？」
「はい」
「すごいなあ、恵子さん、この作家が好きらしいんです」
「私は、あまり話したことはないですけどね。ただ、なんだかうれしそうな目をしていたのは覚えてます」
「恵子さん、よぼよぼのくせして、お客さんのことすんごい見てるんですよ。お客さんなんてほとんど来ないから、本読むか、テレビ見るか、観察するかしかないんですね」
「ここに来ない人は、絶対に損してると思いますよ。ここのケーキのおいしさを知らないなんて」
水姫は思わず言葉に力がこもった。それを聞いた店員は、目を見開いて「そうなんです！」と言った。
店員はケーキを運んできた。以前と同じ、生地が三層に重なったレモンチーズケーキである。それは記憶のままに皿の上に鎮座していた。今回はケーキが二つあった。店員が自分で食べる用だという。フォークを取ってケーキに入刀し、口に運ぶプロセスが神聖な儀式のようにも思えた。そして、今の自分には、このケーキの感動を共有する仲間がいた。これは大きい。

水姫はケーキにフォークを入れようとした。
その時、耳がなんらかの信号をとらえたような気がした。
何だろうか？　私の楽しみを阻害するものは……。
脳内でフーリエ変換を施してその特異的な波長の大本をたどると、小さな音量を流し続けるテレビからだとわかった。壁にかかった薄いディスプレイでは、引き続き夕方のニュースを放送し続けている。画面に、見覚えのある文字列と顔を見つけた。
彩の輝き幹部の吉村黎が、彩の輝きの紋の入った袴を着ているのが映し出されている。そのとなりには、大きな綿帽子を被った女性がともに歩いていた。斜め下を向いているせいで、顔を見ることはできない。後ろには、二人の頭上に赤い傘を掲げている男性がいる。晴れ渡った陽気の、神社とも教会ともつかないような建造物の広大な庭園に、神職、巫女、新郎と新婦、その他大勢の順で長い列をなしていた。
吉村黎が結婚したのだ。
五年前に比べると、多少肉が付き、余裕のありそうな面構えをしているように見えた。一丁前に口ひげを蓄え、歩き方もゆったりとしている。昇進したことでいい生活をしているに違いない。余裕あるものは動きにも余裕が生まれるというのが、水姫の経験則だ。
これは彩の輝きが取り決めたスタイルの結婚式である。世界宗教の幹部ともなると、結婚がニュースになるのか、と水姫は感心した。
新婦の方が顔を上げたことで、綿帽子の影に光が差しこんだ。水姫は仰天した。
一条早雪！
五年前に姿を消した一条早雪が、世間に姿を現したのである。二人は交際しているのだろうか、という水姫の平均的な推測は的中していたわけだ。
そうか、吉村黎と一条早雪が……。
「お客さん、どうしたんですか？」
「え？」
見ると、自分の手はフォークでケーキを刺した段階でストップしていた。店員はすでにケーキを平らげてしまっていた。
「ああ、ごめんなさい、テレビに昔の知り合いが……」
「へえ」
店員はテレビを振り向いたが、すでにニュースは別の内容を読み上げていた。
水姫は思考をスイッチングして、ケーキに集中することにした。
それから二人は、ここのケーキのおいしさの議論と、喪仁田恵子というかつての店主の思い出話を、外が暗くなるまで続けた。ただ、わずか一パーセントほどの思考は五年前の記憶を繰り返し再生していた。

二十

その日の夜、水姫がＫＮＣ・ＮＧＮＤオフィスに姿を現すと、残業をしていた二人の社員が目をひん剥いて固まった。
「秋野主任！　ど、どうしてここへ？」
「ちょっと、仕事がしたくなったから」
オフィスはブース式に自分の仕事場が割り当てられている。自分

の仕事場に就くと、ディスプレイ同期型コンピュータの画面を復活させた。
ここ数年はＬＥＮＳを使っているけれど、やはり自分はこのタイプのコンピュータの方が落ち着く、と思う。それに、本格的な開発を行うにはＬＥＮＳだけではやりにくい。目線で操作できるのは便利だが、両手が手持無沙汰になるのはもったいない。
水姫はコンピュータとＬＥＮＳを同期させた。眼前に表示された画面は、自分の手元の操作に対応して、画面が切り替わる。
水姫はコマンドプロンプトを呼び出し、次世代ネットワークシステム『ＨＡＬ』を駆動するサーバーにアクセスした。この『ＨＡＬ』はプロトタイプであるため、高性能なワークステーションコンピュータがあれば問題なく動作する。
水姫はＨＡＬにログインをした。その上で、さらに明のカレイドスコープにアクセスするためのコマンドを入力した。
今から明の記憶を見る。身体の疲れなどまったく気にならないほど興奮しているのを感じる。
明のカレイドスコープのアドレスはわかっている。十八桁のナンバーを入力。わずかに呼吸が乱れるのを意識。震える指で、エンターキーを押した。しばらく待つ。
コネクトサクセスフリー。
承認がなされる。明が、自分のアクセスを受け入れたということだ。
心臓が跳ね上がる。
わずかな背徳感。
一度、深呼吸をした。
明、ありがとう。
受け入れてくれて。
見よう。
水姫は明の記憶に侵入した。
記憶の、
羅列。
明が見てきた世界が、記憶の倉庫を流れまわっている。情報とは、やはりエネルギーフラックスのようなもので、常に流動的に有様を変えるものなのだ。
一番古い記録は、明が中学生の頃だ。ミイラの包帯を解いた時から、その記録は始まっている。
水姫は、様々な記憶の奔流を一から見たい気分に駆られたが、その悪魔的な誘惑を断ち切ることにした。
事件の記録は、五年前の新月の日。
カレイドスコープの記憶空間は、意識の連続性によってファイルの大きさを決定づけている。ようするに意識が途切れると、記憶のファイルもそこで記録を終了する。
事件の日のファイルはほかのものよりも長かった。水姫は震える視線をそのファイルに向かわせて、再生をした。
まず目に映るのは、木製の天井である。わずかにあくびの音が入り、出てきた涙で視界が歪む。ベッドから起き上がると、そこは見覚えのある明の部屋で、枕元に文庫本が置かれていた。
それから歯磨き、朝食のシーンへと続いていく。家族の姿はやはり見えない。

その臨場感に驚愕した。まるで自分が明になり、生活の追体験をしているように感じる。息遣い、心臓の鼓動、動作の振動が、すべて伝わってくるような気がしてくる。

水姫は、明のプライベート領域に立ち入っている気がして、心苦しい気分になった。

私から、明が見える。明からは、私が見えない。

対等ではないつながりの関係。それが、こんなにも艶めかしく、苦しいものだったなんて……。

時間をスキップして、その夜に合わせた。

海岸の波打つ音声が、緞帳の中にいるように重苦しい闇の中で聞こえる。足元から聞こえるざっざっという音が止まる。明が立ち止まったのだ。わずかな星明りで照らされた砂浜に、先客がいたことがうかがえた。その人物が振り返る気配がした。しかし、言葉は発せられず、苦しそうな息遣いが周期的に聞こえるだけだった。

『あの』明の声音。『どこか苦しいのですか？』

『苦しい……、苦しいよ』

『大丈夫ですか？』視界がその人物に近づいた。

『大丈夫じゃない！　僕は……人を殺してしまったんだよ……』

『人を？』歩みが止まった。

『そう、この手で……』その人物は自分の手を見た。『高校生になってできた友達だったんだ』

『どうして……』

明の視界が慣れてきたようだ。カレイドスコープは眼球と同じ原理で動いている。そして視神経に送られる映像を記録しているため、目が慣れてくるという現象も同じく記録されていた。

『僕にも……わからない。でも、見られることによる恐怖が呼び起こしたのかもしれない。あの、恐ろしい想念を……』

『想念？』

『視界に現れるんだよ。彼女を……京子を殺す映像が……。まるで白昼夢のように……、しかも何度も何度も……。暗い場所で……僕は手にナイフを握っていて……そして、彼女を刺し殺すんだ……。あの日、僕は、ついに現実と空想の違いが判らなくなったのかと思ったよ。これまでは夢が覚めれば眼前には何もなかった。そこで、ああ、さっきのは夢だったのか、って気が付くんだ。それなのに、あの日は、夢が覚めなかった。目の前にあった死体は、いつまで経っても消え去らなかった。手に持ったナイフの重さ。刺した時の身体から感じる抵抗を、実感として覚えている。おかしいだろう？　僕は……ついにおかしく、なって、しまったのだろうか？』

明は黙って聞いていた。男は、腹を抱えて笑っている。しかしその笑い声には悲しみや狂気が混じっていた。あまりの痛々しさに、水姫は目と耳をふさぎたいと思った。

『見たくないものは見なくてもいいんだよ』

でも、

明は見たのだ。水姫は視聴を続行した。

『みんな、僕を見るんだ。舞台の上だけじゃない。いつでもどこでも視線が周りにあるような気がする。……僕がピアノで失敗した時、みんな思っただろう。あ、失敗した、って。

京子もそうだった。彼女は、僕がミスタッチをした時、一番近くで見ていたんだ。僕の失敗を生で見ていた。コンサートの後、僕が

逃げ出したくて、人目を盗んでいるところをわざわざ見つけ出して、言ったんだよ。『失敗は誰にでもある』って。言葉ではわかっている。でも、僕はこれ以上、どうすればいいかわからなかった。その時僕は、あの悪夢のような残酷な光景に襲われて、狂ってしまった……』

鹿目辰巳の声は震えていた。その視線が明を見据えていた。身体がふらふらと揺れているのが暗闇でもわかった。

『君に想像できるかい？　京子の死体が見せたあの目を……。彼女は、死体になった後も僕のことを見ていたんだ。あの二つの瞳が、僕の失敗をあざ笑い、責め苛んでいた。……だから、ペンキを塗って、隠そうとしたんだ』

『人は、簡単に狂ってしまうことができる』水姫の声が静かに響く。

『その一瞬の狂いが、人間の命を簡単に消し去ってしまうこともある。……僕にも、経験があるよ』

『じゃあ、なんで君はそんなに落ち着いているんだ？　狂気に囚われてなお、そんなに落ち着いて僕の話に受け答えをしている。なんなんだ？　君は！』

『神岡の人間は、常に一流でなくてはならないんですよ』

『か、神岡だって……』

『狂気を宿していても、その狂気を飼いならすことができないといけない。一流とは常に冷静に狂気を扱える人間のことを言うんです』

『ふ、ふざけないでくれよ！　神岡の人間が……』

『ふざけていませんよ。あなたも神岡の人間なら、狂気を飼いならす余裕を持たなくてはいけなかったんです。あなたの母は、吸血鬼でしたか？　あなたの父は、吸血鬼でしたか？　あなたには吸血鬼の血がながれていますか？』

『く、狂ってるよ、お前』

『僕は、冷静ですよ。冷静なんです』

心臓の音がうるさかった。その脈動が、果たして水姫自身のものか、そうではないのか、判断するだけの余裕はない。

『お前まで、僕を嘲笑うのか！　その眼で僕をみるな！』

鹿目辰巳が懐から鈍く輝くものを取り出した。薬指の欠けた右手には、刃物が握られていた。彼が足を踏み出して、距離を詰めた。一瞬で視界が乱れた。刃物を持った右手が伸びてきて、視界の左下辺りを切りつけた。

『うっ……！』

明は左手で首元を抑える。手に付いた血液は、暗闇の中で一層暗く映った。

鹿目辰巳の身体がバランスを崩した。明は、彼の手から刃物を奪い取って、勢いよく足で蹴り上げた。鹿目辰巳は砂場に尻もちをついた。しかし視線はまだこちらを見ていた。お互いの息が上がっていた。明の視界も揺れている。

『痛い……』

明が小さな声でつぶやいた。手が何度も首の部分をさすっている。

『返してくれよ……。それは僕のナイフなんだよ』

『鹿目辰巳さん、あなたはナイフを持っちゃいけない。また誰を傷つけるかわからないんだ』

『うるさい！　返せよ！　僕のだぞ！』

鹿目辰巳は再び跳躍した。

『うわっ！』

声をあげたのは明の方だった。自分の視界から反射的に右手が伸

び、その先に鹿目辰巳の身体が覆いかぶさった。
『うぐっ』
鹿目辰巳の口から野太い声が吐き出される。反作用で、彼の身体がすぐ後ろに押し戻され、砂場に倒れこんだ。ナイフの先には血液が付着して、先から雫がしたたり落ちているようだ。
視界がぐにゃぐにゃに歪んだ。明の右手がナイフを放り投げ、視界が真後ろに回転し、来た道を戻っていった。残ったのはいつまでも歪んだ光景と、嗚咽だけだった。

水姫の心臓は、ばくばくと脈打っていた。まるで自分が経験したかのような臨場感で、全身が汗をかいている。鹿目辰巳が襲ってきたとき、水姫は思わず目をつむってしまった。明が首を切られたときは水姫も無意識に首をさすっていた。
水姫は自分の現状を再確認した。自分は現在、オフィスの自分のブースで明の記憶を見ていたのだ。時刻はすでに午前〇時を回っていた。社員は全員帰っただろう。
水姫は心臓の脈動をあえて無視しながら、違和感を覚えた箇所を冷静に再検討してみた。
三宅京子を殺害した犯人は、本人の供述を聞く限りでは、鹿目辰巳だということになる。ペンキを塗ったのも、視線が怖いからという理由で説明された。あの洞窟に塗られていたペンキも、鹿目辰巳が何度も使っていたならば、精神的ストレスによる発狂で納得できる。
彼は、三宅京子を殺害する情景をなんども見たと言っていた。これは本当に夢なのだろうか？　それとも……。

足跡についてはどうだろう。まず明の足跡についてだ。明は現場に立ち入り、そして立ち去った。これで足跡が二列できたことになる。現場に残っていた足跡は二列だけだったから、これですべてだということになる。では、鹿目辰巳はどこから来たのだろうか？
考えられる説は四つある。一つは、鹿目辰巳が洞窟から出てきて、歩いてきたこと。この場合、足跡は海岸のすぐそばを歩いたのだろうか？　それならばいったいなぜ残っていないのだろう？　二つ目は、鹿目辰巳が海を泳いで現場まで来たということ。これは妥当だろうか？　水姫にはどうもそのようには思われなかった。三つ目は、鹿目辰巳が数日前からずっと海岸にいた場合。これだと、雨が降ってもその場にとどまっていればいいことになる。風邪や空腹に気を遣わなければならないが。四つ目は、鹿目辰巳が本当に足のない幽霊だった場合だ。水姫はこの考えを即座に切り捨てた。
答えは出なかった。ほかの事項に目を向ける。
明のもったナイフが、鹿目辰巳を刺した後、鹿目辰巳の身体は砂浜に倒れた。
鹿目辰巳はこの時、死んだのだろうか？
鹿目辰巳の死因は刺殺。ナイフは突き刺さっていた。明は、ナイフを投げ捨てた。
奇妙な違和感がある。
水姫は、明が現場を去る直前まで戻して、また再生した。
ナイフは、確かに鹿目辰巳の身体から抜け落ちて、その血の滴りが見える。
明が立ち去ったとき、視界の端に何か黒いものが見えた気がする。
……あった。その部分を拡大する。卵型のシルエット、その後ろに

黒い生地が敷かれている。薄いチョーカーの生地か。わかった。これは明が付けていたペンダントである。
明は、鹿目辰巳の攻撃によって首筋を切られ、その際にチョーカーごとペンダントを落としてしまったのだ。
そういえば、と水姫は思い返してみた。
鹿目辰巳の死を知らされた時、水姫と明は、喪仁田探偵事務所で、喪仁田蘭と雨木薫とともにいた。この時、水姫は首元に絆創膏を貼って、時々抑えながら顔をしかめていた。
そうか、この時だったのか……。
まてよ、と水姫は思いとどまった。
水姫は現場の状況を思い出してみた。吉村黎から説明を受けた時、ペンダントのことは何も説明を受けなかった。インターネットで得た情報でも、ペンダントのことはどこにも書かれていなかった。
そして、ペンダントは、シスター・バーバラが殺害された部屋に置かれていた。水姫は、シスター・バーバラの死体を見て気絶する直前に、それを取ってポケットに入れたのだ。あれは今思えば、現場に残った明の証拠品によって、明に不利になる証拠を消そうという無意識化の行動だった。
水姫はそこで確信した。真犯人は、現場から明のペンダントを持ち去り、シスター・バーバラ殺害の後で、部屋にペンダントを置いて行ったのだ。
何者かが、明に罪を被せようとしている……？
明は実際に、その通りになった。
明は懲役十年の有罪判決を受けた。
だれかが、鹿目辰巳にとどめを刺したのだ。
第三者の意思。
その意思は、登場人物を嘲笑っているかのように水姫には思えた。
もう少しで完成しそうなのだ。事件の全貌への理解が。
その後も何度も気になる部分を再生し、仮説を構築していった。
気が付けばもう深夜の二時である。
思考が袋小路に陥った時点で、ＨＡＬとカレイドスコープの接続を切って立ち上がった。
背中の筋肉がこわばってしまったかのように痛かった。背筋を伸ばすと、自然と声が出た。
建物を出ると夜空にはあの日と同じような満月が上っていた。
寒空の満月は頭上高くに上っている。夏の満月よりも、幾分高いかもしれない。地球の自転と公転の影響で、冬は太陽が低く、月が高く上るのだ。夏はその逆で、太陽は高く、月は低い。
そして、冬は月の光が綺麗だ。夏に比べ、大気中の水蒸気による空気循環が抑制されているためである。
いつか聞いた明の演奏。
透き通る空に映る月。
階層をもった音色。
四季による変化。
たかが、天体現象のくせに。
こんなに美しく……、
まてよ。
たかが天体現象？
……。

……。
そうか、そうだったのか。
わかったぞ。
仕組みがわかった。
月の見えない夜。
水姫は高揚していた。
小躍りしたい気分だ。
肌に触れる大気の冷たさが、心地よく身を包む。
興奮が冷めやらない。
身体の疲れは吹き飛んだ。
思考は冬の空よりも澄んでいた。

二十一

この半年間で、次世代ネットワークシステム『ＨＡＬ』は商業的に利用できる段階まで来ていた。ＫＮＣ・ＮＧＮＤにはやはり情報工学に精通した一流のマーケターが就き、全世界に対して『ＨＡＬ』の魅力をアピールした。水姫はこの期間に、一般に普及しているＬＥＮＳに対して最高のパフォーマンスを発揮できるように調整をした。その仕事は水姫にとっては惰性に近いものだった。

ＨＡＬネットワークのサービス開始数日前になって、ＫＮＣ・ＮＧＮＤは会合を企画した。これは招待者に、先行的にＨＡＬを体験してもらい、その素晴らしさを特集したインタビュー記事を作ることが目的と銘打たれていた。水姫は神岡優子と相談して招待者を選び、各々のＬＥＮＳ宛てにアドレスを送った。

そこは円形の白い部屋だった。中心には床に固定された円卓、窓の外には円形にはみ出たベランダ、そして遠くには澄んだ淡い空が見えた。上から見れば綺麗な三重の同心円になっている。円卓の周囲には招待人数分の椅子のオブジェクトが設置されている。全体的に、きわめて無機質な印象を持たせるように設計されている。

会合の開始十分前になると、ちらほらと入室申請が届いた。水姫はそれらをすべて入室許可した。承認されたユーザーから順に、指定された円卓の席へとアバターが出現した。

「あ！　水姫じゃん！　久しぶり！」
「おひさぁ」
「久しぶり、蘭、薫。半年ぶりくらいかな」
「ってあれ？　マジで場所を移動したみたいだ」
「ほんとだ、すっごいリアルぅ」

二人のアバターは自動的に現実世界における容姿を模したものになる。蘭の相変わらずの巻き毛も、薫のピンク色のアーティスティックな髪も、しっかりと反映されている。水姫のチームが作り上げた新技術で、ＬＥＮＳに記憶された自身の姿を信号として取り出し、アバターとして再構築しているのだ。

「蘭、招待状に書いたとおりに操作してみて」
「ん、わかった」

蘭のアバターは静止したまま、数秒間が過ぎると、蘭の横の椅子に長方形のスクリーンが表示された。

「お久しぶりです。喪仁田影像先生」

「おお、水姫くんか、久しぶりじゃな」
「どうなってるんだ !?」
「この空間で一時的にＬＥＮＳに拡張機能を追加したの。喪仁田先生の前にカメラと無線通信機を置いてもらったでしょう？　その信号を蘭のＬＥＮＳを通してこの空間に表示してる」
「すっごいな !!」
「テクノロジーの進化じゃの、便利になったものじゃ」
続いて、二人のアバターが同時に出現した。
髭を蓄え、若干のウェーブがかかった髪を肩まで伸ばした男性と、五年前とほとんど変わらない美貌をもった女性。
「来てくださり、どうもありがとうございます。そして、ご結婚おめでとうございます。吉村さん、早雪さん」
「こちらこそ、招待していただきありがとう」と吉村が言う。
「久しぶりね、秋野水姫さん」
夫婦となった今でも、早雪の容貌は変化がないと水姫は思った。それに対し、吉村は貫禄が増して皺が一本程度増えたようだ。この空間ではＬＥＮＳの記録から自分の姿を検索してアバターに反映しているわけだが、時間変化による容貌の変化は重ね合わされて表示されてしまう。
開始三分前になって入室してきた人物がいた。アバターは水姫の二つとなりに出現した。この半年間、水姫は彼女に一度も会わなかったから、心臓が跳ねた想いがした。
「やあ、こんにちは、水姫」
「こんにちは、明」
明が微笑んだ。水姫も微笑み返す。
「明、久しぶりだね」吉村が言った。
蘭と薫は、明に目を向けながらも、言い淀んだ表情をしている。
明のアバターも記憶とほとんど差異がない。話した時の口の動きや動作も、現実世界と遜色がないほどだ。やはりリアルタイムのアバターモデリングのために、一流の人材をスカウトした甲斐があったと思った。
ＨＡＬに次ぐインターネット空間のあり方として試験的に構築していた超現実的仮想空間。コンピュータサーバーの中に、もう一つの現実を作り出す試みは、ＬＥＮＳやカレイドスコープ技術の成功があったからこそ、水姫の脳内イメージから具現化できたものだ。
円卓はほとんど埋まっていたが、ただ一席だけ水姫と明の間に空席があった。
「なあ水姫。あとはだれが来るんだ？」蘭が尋ねた。
全員が水姫を見ていた。大勢に見られるのは昔から得意ではない、と思う。
「そろそろ来るよ」
現実世界の自分の眼球を、視界右下の時間表示に合わせる。あと一分。
この会合は、ＫＮＣ・ＮＧＮＤの空間駆動用コンピュータサーバーによって、空間ごと録画されている。仮想空間や３Ｄモデルの駆動は、膨大なマシンパワーを必要とする。それらはすべてＫＮＣの資産力でカバーすることができた。
――来た。
最後の招待者が入室した。空気が変わった感じがする。
五年前から変わらない、美しく妖艶な姿。ゆったりとした仕草。

「お待たせしました。始めましょう」
神岡優子がにっこりと微笑んだ。
「それでは会合を始めさせていただきます。今回お集まりいただいた皆様の多くは、様々な業界で活躍し、影響力がある人物として、私が選出いたしました」
喪仁田蘭は大学に在学中、ロボット工学の才能を認められ、とある財団の若手育成プロジェクトの第十五期生として選出された。
雨木薫は国内で屈指の有名配信者として、不動の地位を獲得している。
そして、彩の輝き幹部の吉村黎と、その妻の早雪。彼らは現在、多数の信者を獲得し、幸福を説いている。
「この集まりは、数日後にサービスが開始される次世代ネットワーク『ＨＡＬ』のプロモーションを目的とさせていただいております。この場での議論はすべて録音され、ＫＮＣ内のサーバーに保管されます。後日、今回の催しのレポートを様々なメディアに公開することで、ＨＡＬのデモンストレーションとさせていただきます。
ＨＡＬの詳細を、今一度ご説明しましょう。
皆様もご存知の通り、ＨＡＬとは超意識言語システム、すなわち、Hyper Awareness Language の略称で、その名のごとく、本人の意識を超えて他人とつながることのできるネットワークプロトコルです。ＨＡＬによって人間は曖昧な記憶というものに器を与え、通常のデータと同じように他人と共有ができる。二人いれば楽しさが二倍、悲しさは半分ということができます。現在でも、地球上をめぐるインターネットの網は、地球の裏側にいる人物とのつながりをも可能にしていますが、ＨＡＬではより内面的な部分で関係を持つことができるのです。言語の問題もありません。言語とは、記憶や思考といった内面的なものを、音声や文字として外部に出力するための変換ツールに過ぎません。しかし、記憶をそのまま他人と共有できるとしたら？　もちろん、言語は関係がなくなります。
ＨＡＬは、間違いなく世界を変える技術です。どこにいても人間はつながることができる。これが我々の開発した次世代のネットワークなのです」
「すごい技術だ」蘭が腕を組みながら言った。
「ありがとうございます。これまでのところで、何か質問はございませんか。……ありませんね。それでは、先へ進めさせていただきます。
先程も申しました通り、ＨＡＬでは相手が申請を受け入れた場合、データとして保存されている記憶を見ることも可能となります。ですから、自分でさえ忘れてしまった記憶の底の記録も、ＬＥＮＳが見てさえすれば見ることができます。もちろんセキュリティに関してはご心配いりません。記憶の持ち主は、記憶の閲覧者に対する権限を設定できます。見られたくない記憶を見られないようにすることができます。
普通のコンピュータのファイルとは違い、他者は蓄積された記憶の編集はできません。そのため、データの改ざんの恐れはなく、ゆえに記憶を書き換えられるということもあり得ません。
記憶は、テクノロジーによって記録へと変換され、データとして使用できるようになるのです」
水姫はここで一息をついた。かしこまった話し方はやはり疲れて

しまう。いつから自分はこんなにフォーマルな言葉を使うようになったのだろうか？　五年の歳月が自分の内側から感じられる。
「……ところで皆様、私が皆様をこの場にご招待した理由は、もう一つあります。それは、五年前の三宅京子や鹿目辰巳、そしてシスター・バーバラこと荒巻凛子が殺害された事件の真相を、この場で明らかにするということです」

二十二

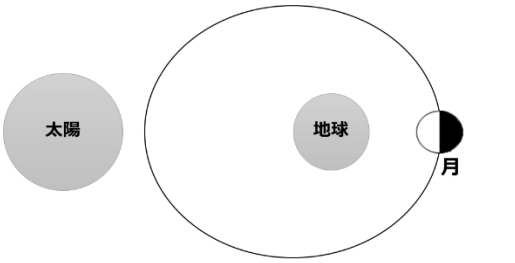
「なんだって！」喪仁田蘭が驚愕の表情を浮かべた。
「ふむ……」その祖父はといえば、眼鏡を急いで拭いているのがモニター越しに見える。
　全員が言葉を失った。たった一人、神岡優子だけは成り行きを見守るように笑っていた。
「本当にやるんだね、水姫」明が水姫の目を見て言った。瞳は現実と勝るとも劣らないクオリティ。ＫＮＣの技術力には感心させられる。
「そう、そうなんだ明。私は今日、このために会合を開いた。あのとき事件に関係していたみんなが、各界隈で著名な人物になっているのは、偶然とは思えない奇跡だった。だから私は、ＨＡＬのプロモーションという名目でみんなを招待したの」
「たしかにぃ、すごい偶然」雨木薫が人差し指を頬に当てていった。
「ＨＡＬによって世界が変わる前に、私はこの事件に幕を下ろしたいと思った」
「でも、事件は解決したんじゃないのか？　確かに、なんか腑に落ちないこともあるけど……」蘭が明のほうをちらちらとみている。
「蘭、さっき言ったように、ＨＡＬでは他人の許可さえもらえば、接触型コネクトデバイスが記憶している限りの記憶を見ることができる。そして明の眼球は……」
「カレイドスコープ。眼球の模型で、僕はこれを中学生のころから使用している」明が自分の左目を指さした。
「眼球の模型？　じゃあ、要するに明の目は義眼だったのか？」蘭が目を丸くする。
「そうだよ」
「驚いた」吉村早雪が言った。「義眼型のデバイスは非常に希少性が高いと聞いていたけれど、こんなに身近に所有者がいたなんてね」
「私は明のカレイドスコープに記録されている記憶を覗き見ました。明が鹿目辰巳をナイフで刺したときの映像です」
「それは確かだったんだね？」吉村黎が言った。「確かに、明が鹿目辰巳を刺していたと……」
「確かでした。しかし、実際の殺害現場とうまく整合しません。私は、明が明確な殺意を抱いて鹿目辰巳を殺害したとは、どうしても思えませんでした。だからこそこの場で、真実を明らかにしたいと思うのです」
　水姫の宣言を聞いて全員の顔に緊張が走った。水姫も例外ではない。まさか自分がこんな役をするなど、五年前どころか半年前ですら想像できなかった。
「事件の流れを整理しましょう。はじめに事件が起こったのは……」
「三宅京子の事件だ、あたしが教室でみんなに知らせたの覚えてる」

と蘭。
「いいえ、その前にも一人亡くなっていた。ただ、その人と三宅京子の死体は状況が非常に似ていた」
「ああ、そうだった。確か、三宅京子の死体にはペンキが塗られていたんだっけ」
「そう。最初の事件から約一か月後に、三宅京子の事件が起こった。場所はどちらも公園で、刃物で刺されたことによる出血死。二人は容姿が似ていて、さらに同じ制服を着ていました。違う点は、三宅京子の死体には赤いペンキが塗られていたこと。身体にかけられていたのと、目に塗られていたのが特徴的でした」
　水姫はその画像を自分のＬＥＮＳに保存しておいた。初めてペンキで濡れた死体を見た時、人間の死体というよりもなんらかのオブジェのように見えたのを覚えている。
「次の事件は、世界的なピアニスト・鹿目辰巳の殺害。鹿目辰巳は神岡グループの子会社で、音楽事業を担っているＭｕｓｉｋａがスポンサーについていました。彼はピアノコンサートで一曲演奏したあと、ストレスに堪えかねて飛び出していったところを配信で目撃されていました。その後行方不明になりましたが、三宅京子の事件が起きた後に、海岸で死体となって発見されました」
　明が顔をしかめた。海岸のことを思い出しているのだろう。
「鹿目辰巳の殺害現場には、特筆すべき点が二つありました。一つ目は、砂浜に残された足跡でした。海岸は周囲を森と岩に囲まれていて、いうならば、そうですね、イチョウのような形をしていました。海岸の入口から死体までの経路に往復したとみられる一対の靴跡がありました。これが犯人の残したものだと考えると、鹿目辰巳の足跡がなくなってしまう、ということが問題となっていました。
　二つ目は、鹿目辰巳の右手付近に残されたダイイングメッセージです。それはカタカナで『ハル』と書かれていました。明を犯人だと告発しているかのような状況に思えます」
　全員が黙り込んでいた。蘭は両手を組み合わせていた。薫は肘をつき、手の甲に顎を乗せている。早雪は腕を組み、吉村は円卓の下に手を下ろしてリラックスした格好だ。喪仁田影像は目をしょぼつかせている。明はきりりとした表情を崩さない。
「最後に、シスター・バーバラの事件です。彼女は教会の中の部屋で殺害されていました。教会の武器庫にあった剣で刺したとみられています。彼女の死体には、三宅京子の場合と同じくペンキが身体と目元に塗られていました。また、この部屋は密室となっていて、鍵が彼女の死体の近くに落ちていました」
「この密室は、鍵をドアの下から滑り込ませることで作られた。そうだったね？」吉村が言った。
「ええ、それがもっともらしい結論になるでしょう。その後、神岡明が逮捕され、一応事件が決着したと思われたのです」
「でも、これは真相ではないというのね」と早雪。
「はい。今からそれを説明したいと思います。
　まず三宅京子の事件から行きましょうか。結論から言えば、三宅京子を殺害したのは鹿目辰巳です。明のカレイドスコープにも彼の供述は記録されており、ペンキを塗った動機も告白されています。
　彼は、コンサートの失敗やＬＥＮＳで世界中に配信されていることに強いストレスを感じ、視線恐怖症となっていました。だから三宅京子を殺害したあと、その存在を消してしまいたいという意思で

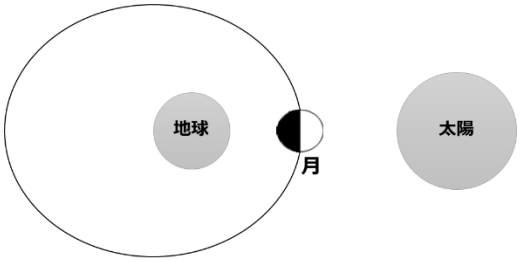
身体を、そして視線のもととなる目をペンキで塗ったのです」
「シスター・バーバラもペンキで塗られていたわけじゃん。それじゃあ鹿目辰巳が蘇って、バーバラを殺したっていうこと？」蘭が尋ねた。
「いいえ、それは全く別の事件。また後で説明するね」
「うん」
「鹿目辰巳は、妙なことを言っていました。彼が三宅京子を殺害したのは、ある恐ろしい想念に駆られてのことだったと。何度も、三宅京子を殺害するという白昼夢を見ていたのです。彼は夢と現実の区別があいまいになっていた。こういった症状は、精神的な病の代表的な症状として挙げられます。しかし、私はこれが、夢であったとは思いません。
思い出してください。この事件以前に、似たような状況で殺人が行われたことを。鹿目辰巳はＬＥＮＳを使用していました。接触型コネクトデバイスの特徴はなんといっても、その臨場感やリアリティにあります。
こうは考えられないでしょうか？　鹿目辰巳が見た悪夢というのは、以前の殺人事件を記録した犯人が、ＬＥＮＳによって鹿目辰巳にその記録を送り付け、見せたものだと」
「なんと！」喪仁田影像が目をまん丸くして叫んだあと、せき込む音が聞こえた。
「ＬＥＮＳはコンタクトレンズとは違い、入ってきた光をいったんデジタル処理をして、スクリーン上に映すという仕組みになっています。ですから、周囲からの光をシャットアウトして、映像に集中することもできる。
それに加え、鹿目辰巳はストレスで精神的に弱っており、普段からあいまいな状態になっていたと思われます。視界をジャックされた彼が、残酷な映像を白昼夢として信じ込んでしまったということも十分ありうるのです」
「やっぱり……」明がつぶやいた。
これはまさに明が危惧していたことだった。虚構の映像を信じている状態の危険性を、保健室で語っていたではないか。
「したがって、第一の事件の犯人は、鹿目辰巳が三宅を殺害するように仕向けた人物ということになります。ただしペンキを塗ったのは、鹿目辰巳のストレスによるものなので、犯人も予期していなかったと思います。
残りの事件を考えてみましょう。
まず考えたいことは、神岡明は、犯人としてふさわしかったのか、ということです」
「でも、確かに明は鹿目辰巳を刺したと言っていた。殺害現場との整合性が合わないというのは？」と吉村。
「ダイイングメッセージが問題なのです。そうですね、早雪先生」
「ええ、そうね。私の考えでは、死亡時の鹿目辰巳の身体の向きを考えると、実際に残っていた文字とは向きが逆になるべきだと思う。これが不自然な点」
鹿目辰巳は頭を海の方へ、足を砂浜へ向けていた。彼が寝転がったままダイイングメッセージを書いたとすれば、『ハル』という文字は上が砂浜を、下が海の方を向くはずである。しかし実際にはその逆だった。
「さらに別のこともあります。明の記憶の中では、ナイフが彼の身

体に刺さった後、抜けていました。しかし実際は、明の身体には深々とナイフが突き刺さり、その殺意がうかがえました。
　そして、さらに明らかになったことがあります。明は鹿目辰巳に襲われた際に、首をナイフで怪我しました。その際、首に巻いていたチョーカーが切れ、ついていたペンダントが砂浜に落ちてしまったのです。明は彼をナイフで刺した後、一目散にその場から離れました。ペンダントは回収されないまま、どこかへ行ってしまいました。
　じつはそのペンダントは、シスター・バーバラの殺害現場に転がっていたのです。私はバーバラの死体を見た際に、そのペンダントをくすねました」
「それは初耳ね」早雪が眉を上げていった。手がかりが盗まれたことに大きな怒りを感じているに違いない。
「ああ、水姫が持っていたんだ」明の声は、どこか安心しているように聞こえた。
「ごめんね、明。あとでちゃんと返すから」
「うん。持っているのが水姫でよかった」
　水姫はうなずいてから、話をつづけた。
「逆向きのダイイングメッセージ、抜け落ちたナイフ、ペンダント。これらが何を表しているのか？　それはつまり、鹿目辰巳にとどめを刺した真犯人が明に罪を被せようとしたという事実なのです。実際に明は逮捕され、すでに五年も外の世界から物理的に隔絶されてしまっています。私たちは犯人の毒牙にかかり、まんまと罠にかけられてしまったのです」
「そうだったのか……」喪仁田蘭が悲しみに沈んだ声で言った。
「疑ってごめんなさい、明」雨木薫が明の目を見た。
「いいよ。正当な罰なんだ」明が苦笑した。
「それでは、本当の犯人はいったい誰なのでしょうか？」水姫は場が落ち着いたのをみて、話をつづけた。「犯人を指摘するためにはまず、鹿目辰巳がどこから現場に来たのかを明らかにする必要があります。
　私は個人的にシスター・バーバラのもとに赴いて、話を聞きました。すると、彼女は教会の裏から海岸に通じる洞窟があることを教えてくれました。獣道を通った奥ですし、入口は草木や岩石によって隠されていたので、知っているものでなければ見つけることは難しいでしょう。そして、鹿目辰巳は定常的にその近道を使っていました。
　このルートで、殺害現場を再現することができるでしょうか？
　もしも鹿目辰巳の足跡が、満ち潮によって消されたら？
　私はこのように仮定を置いて、考察をしてみました。残念ながら、この情報だけではまだ足りません。私が行った調査では、洞窟の入口から死体をつなぐ足跡は、満潮時の海岸線よりも五十センチメートルほど内側にあります。したがって、この条件では足跡を消し去ることができませんでした」
「それじゃ、ほんとに鹿目辰巳は足のない幽霊になっちゃうぞ」と喪仁田蘭。
「そうなんです。この条件だけでは……。しかし、私はある可能性に至ったのです。もしも満ち潮より波が内側に押し寄せたら？　そんな現象があるだろうか？
　ありました。天体現象を仮定に組み込むことによって、殺害現場

をうまく殺害できるようになりました。
皆さんはスーパームーンはご存知ですね？　夜空の満月が大きく見える現象です。地球の周囲を回る月は楕円運動をしています。したがって、地球との距離は常に一定ということではなく、常に変動しているのです。具体的には最も近い場合が三十六万キロメートル、最も遠い場合で四十万キロメートルとなります。スーパームーンは、最も近い場合と満月のタイミングが重なった場合です。
鹿目辰巳が死亡した日は新月でした。もしこれが、新月の場合と重なったらどうなるでしょうか？
地球と月と太陽の位置関係を考えてみましょう。満月の場合、太陽―地球―月となります。新月の場合は、このように、地球―月―太陽という順番となります」
水姫は手元を操作して、自分の胸の前にスクリーンを表示させ、模式図を表示した。
「これをみると、新月かつ月が近地点に位置するときに、地球は最も重力の影響を受けるのです。私が調査したのは新月の夜から二日経った日でした。この間の潮位は二十から三十センチの差があります。これを砂浜の傾斜約二十度を考慮して海岸線の深さに換算すると、大体六十から九十センチメートルとなります。足跡は五十センチメートルの場所にありましたから、波が足跡を消し去るには十分な影響を与えることができるのです。
これを受けて状況を再現してみましょう。
鹿目辰巳は洞窟からまっすぐ海岸を歩いてきて、その場で明と争いになった。ナイフが鹿目辰巳に刺さった後、明はその場を離れ、鹿目辰巳は砂浜に倒れこんだ。その後、争いを見ていた犯人は、鹿目辰巳の足跡に気が付き、教会の裏から回り込んできて、鹿目辰巳にとどめを刺した。明が鹿目辰巳の命を奪ったと見せかけるために、手の近くに偽のダイイングメッセージを書いた」
「それなら確かにつじつまが合う」吉村が右手を上げて言った。「しかしなぜペンダントを盗んだんだい？　その場に置いておけば、明が犯人であることをより強固に印象付けられたんじゃないかな」
「それは、シスター・バーバラの事件でも、明を犯人であると思わせるためのアイテムとして、犯人が持ち去ったのです。
シスター・バーバラはペンキで塗られていました。これは明らかに、三宅京子の事件の模倣です。真犯人の思惑としてはこうです。まず鹿目辰巳に三宅京子を殺害させる。その際に、真犯人は鹿目辰巳がペンキを塗ったことを知った。表向きには、ペンキを塗ったのが鹿目辰巳であることを明が知っていて、だからシスター・バーバ



満月の場合



新月の場合

ラを殺害してペンキを塗ったのは鹿目辰巳を殺害した明しかいない、というような動きにしたかった。
その印象を強めるために、部屋をわざわざ密室にして現場に明のペンダントを残したのです。
しかしそのペンダントは、私が持って行ってしまったため、なんとなく決め手に欠けました。結果、シスター・バーバラの事件はいまだに未解決とされ、今のところは、明はその罪を背負っていないという状況なのです」
「そうだったのか……」明がつぶやいた。それから十秒程度たった。
「犯人はなぜ、シスター・バーバラを殺害したんだろう？」
「それはね、シスター・バーバラが裏道の存在を知っていたからなの」
「……あぁ、そういうことか……」
「どういうこと？」雨木薫が明と水姫を交互に見ながら言った。
「今回の事件で、真犯人にとって最も重要なことは、明に罪を被せるということでした。そのためには、鹿目辰巳の殺害現場に洞窟から続く足跡が残っていてはいけなかった。だから、裏道の存在を知っている人物を抹殺しなければいけなかったの。
幸い、私は犯人に気が付かれずにあの裏道を調べることができた。事件から二日経って、私が裏道の存在を知ったその直後に、犯人はシスター・バーバラを殺害しました。タッチの差で私は運よく犯人の魔の手から逃れることができたのです。
では、裏道に何があったのかをお話します。洞窟の中は、鹿目辰巳がまき散らしたと思われる赤いペンキで、壁の大部分が塗られていました。ペンキは洞窟に薄く付着しており、手で少し力を入れれば、剥がれるくらいのものでした。
洞窟内部を歩いていく途中で、大きな段差がありました。そこで私は、左の壁に謎の記号のようなものを見つけたのです。小型の楕円、すこし間が空いて中サイズの楕円が二つ、また間が空いて、大きな楕円の跡」
水姫はここで、ＬＥＮＳの記録から引っ張り出してきた画像を表示した。
「私は、これは手形ではないかと考えました。おそらく、誰かが洞窟を通った際に、段差でつまずいて壁に手をついてしまったのです。
手形であると考えた場合、どのような手なのか？　大きな楕円は親指、中サイズの楕円は人差し指と中指、小型の楕円は小指です。そうすると、薬指がないことになります」
「あ！　鹿目辰巳には薬指がない……」
喪仁田蘭が叫んだ。それを聞いて、全員が目を見開いた。
「確かに鹿目辰巳は薬指が欠損していた。彼は欠損した指を持つ、世界的なピアニストでした。私もコンサート映像を見ましたし、皆さんも見たことがあると思います」
「それじゃあ、その手形の主は鹿目辰巳なんだぁ。とすると……あれ？」雨木薫が首を傾げた。「それじゃあ、意味がなくない？」
水姫は首を振った
「実は、この手形は鹿目辰巳のものではないのです」
全員が再び目を見開く。
「えっと、どういうこと？」蘭が尋ねた。
「なぜ、鹿目辰巳の手形ではないのか、それでは誰のものなのか。
鹿目辰巳の手形だと仮定しましょう。鹿目辰巳の欠損した薬指は、

右手でした。一方、洞窟の手形は左側にありました。よって、彼が海岸から教会に戻る際に付いたものだと考えられます。このとき、手形は実際のものと逆向きになります。つまり一番左から親指、人差し指、中指、小指の順で跡が残るのです。したがって鹿目辰巳の手形ではありません。

では、誰の手形か？　これは明らかに犯人のものでしょう。犯人が鹿目辰巳を殺害しに行く途中で、慣れない足場を踏み外し、誤って左の壁に手をついてしまったのです。つまり犯人は左手に薬指の欠損を持っている」

「質問があります」早雪が学生のように挙手して言った。「なぜ、犯人はその手形を消そうとしなかったのかしら。特徴的な手形なら、痕跡が見つかれば特定されてしまう」

「それは、犯人がＬＥＮＳを使用していたからです」

「詳しくお願いするわ」

「もとよりそのつもりですよ。

あの洞窟は中が暗く、足元に起伏が多いため、歩くのに苦労します。そこで犯人はどうしたか？　可能性としては二つ考えられます。まず、懐中電灯を使ったケース。これは即座に否定できます。懐中電灯を使っていたならば、手形が付いたことに気が付いて、その場ですぐに消すのが自然だからです。

二つ目に、ＬＥＮＳの赤外線カメラを使用したケースです。

実を言うと、私は最初、懐中電灯で洞窟を歩きました。だから手形を発見できたのです。しかしその後、懐中電灯は切れてしまいました。私はＬＥＮＳの機能でどうにかできないかと考えました。いろいろ探っているうちに、ＬＥＮＳには赤外線カメラの機能があることに気が付きました。切り替えてみると、壁一面に塗られていたペンキはすべて見えなくなりました。これは洞窟の壁とペンキの、赤外線の反射率がほぼ同じことから起こる現象です。

鹿目辰巳が死んだのは真夜中でした。洞窟内は当然のごとく何も見えません。そこで犯人は赤外線カメラを使ったのでしょう。その結果、犯人は自分のつけた手形を見逃してしまったのです。以上のことから、犯人は、ＬＥＮＳの扱いに慣れていて、左手の薬指に欠損がある人物です」

水姫はそこで息を吸った。鼓動が身体を打ち付ける。

「みなさん、両手を出してください」

ついにこの時がきた。

五年間、長かった。

この話は、全て記録されている。

アバターは現実の鏡だ。

絶対に逃がさない。

円卓に座っている者たちが、順々に手を見せ始める。

その中で一人、手を見せない者がいた。

「犯人は、吉村黎、あなたです」

二十三

全員の目が、吉村に向いている。

テーブルの下に隠れているその証拠を、はやく出せ。

早く……。

呼吸を落ち着けなければ……。
大いなる沈黙。
二分くらい経った。
「そうだ」ようやく吉村が口を開いた。「僕が殺したんだ」
吉村がテーブルの上に腕を出した。両手に革の手袋がはめられている。この光景は、普段の吉村が認識している自分の姿だ。鏡なのだ。
「これは、どうやって外せばいいんだ？」
「現実世界と同じように外してみてください」
水姫の言う通りにしてグローブを外した。右手の薬指には結婚指輪が光っているが、左手には薬指がなかった。あらわになったその光景に、全員の眼が釘付けになった。
「すごい技術だな。これでは、本物の身体なのかアバターなのか区別がつかないね」
「ありがとうございます。弊社の技術の結晶です」
聞きたいのはそんなことではない。なぜ、こんな事件を起こしたのかだ。しかし、口から社交辞令のような言葉が突いて出る。
「吉村、なぜこんなことを？」
明が言った。その眼はまっすぐと吉村を向いていた。落胆しているのは間違いがないのに、感情をだす素振りも見せなかった。
「そうだなあ」
吉村が場違いに間延びした声で言った。
「こんなこと言っても信じてもらえないかもしれないが、僕は神岡家には感謝をしているんですよ。明、君にもね」
「でも吉村は、僕に罪を被せようとした」
「謝るよ。ごめんなさい」
吉村は素直に頭を下げる。水姫はそれを意外な気持ちでみていた。いったい、この人は何をしたいのだろうか。
「謝って許されるわけがないと思うけど」明が穏やかでない目線を向けた。
「うん、それはわかっている。だが、今できる最大限のことをしただけだよ。まともな人間ならそうするさ」
「それなら吉村さん」危険な雰囲気を感じ、水姫は冷静な声を意識して尋ねた。「なぜこんな事件を起こしたのか、話していただけますか」
「わかりました。それでは、僕が学生だった頃の話から……」吉村はため息をついて、余裕のある仕草で語り始めた。「水姫さん、君には話したことがあると思う。僕が大学生の頃に交際していた女性がいて、神岡屋敷を見に行こうとしたら、その女性が豹変してしまったこと。そして、女性が別の男性と結ばれていたこと」
「昨日のことのように思い出せますわ」
その話を吉村は、その場で全員に話した。
「その女性は名前を鹿目雫（しずく）といった。彼女はとても才能のある女性だった。具体的になんの才能が、というのは難しいけれど、いろいろなことをそつなくこなしてしまう、容量の良い人だったんだ。
でも彼女は狂ってしまった。吸血鬼の呪いによって、まったくの別人となってしまったんだ。突然のことだった。
最近になって鹿目雫の子供が、世界的なピアニストとして活躍していることをしった。そして驚くべきことに、彼の右手の薬指は僕の左手と同じように欠損していたんだ。そんな彼を見ていると、な

ぜだかいらいらして堪らなくなった」
「だから殺したというのですか？」
「そうですよ」吉村は平然とした顔で言った。
「短絡的ですね。それにしては落ち着いている。殺人を犯す人間は、もっと切羽詰まっていて、受け答えなどもしどろもどろになるという思い込みを修正しないといけないですね」
「水姫さん、僕はこう見えても焦っている。表面的には表れていないだけなんですよ。しかし次第に落ち着くでしょう。人間は適応力が高いものです。自分の置かれた状況に段々と慣れてくる」
「話の続きをしてください。あなたが鹿目辰巳を殺害しようとした理由はわかりました。しかしそれ以前の女性や三宅京子、シスター・バーバラの殺害、それに加えて明に罪を被せようとした理由が、まだ説明されていませんよ」
「ああ、そうでしたね。そうだ、そうだ。言わなくてはいけませんね。
実を言うと、初めのうちは鹿目辰巳を殺そうなんて、全然思わなかった。ただ彼が苦しんでいる様子を見られればよかったんです。
だから彼が精神的ストレスで精神を蝕む所を見るのは、なかなかに面白かった。そこで僕はＬＥＮＳを使って実験をしてみたくなった。彼と親しくしていた三宅京子を、彼の手で殺害させるにはどうしたらいいのか？　まるでシミュレーションのゲームのように戦略を考えて手を打ってみた。事前に見つけ出しておいた三宅京子と背丈の似ている女子生徒を殺害し、その映像を鹿目辰巳に送り付けた。
それを見た鹿目辰巳は正常な判断が不可能となった。彼はその光景を白昼夢ととらえ、ついには自分の手で同じ凶行に手を染めてしまった。これが三宅京子殺害の真相だ」
「それじゃあ、殺された二人はなんの関係もないじゃんか」喪仁田蘭は明らかに吉村を軽蔑した表情で言った。
「関係ならあるさ。僕が生きる中で、偶然近くにいたという関係だ。偶然僕の視界に入り、偶然僕の計画に必要な素養を持った人物がいた。それだけのことだよ」
「く、狂ってるよ、お前」
蘭が吐き捨てた。水姫はピリピリとした雰囲気を感じ取って、軌道修正を試みた。
「吉村さん、なぜ明に罪を被せようとしたのですか？」
「それは……それしか手がなかったからだよ」
「いいえ、こんな面倒な工作をしておいて、それしか手がなかったというのは不自然だと思います。明に罪を被せようとした具体的な理由がほかにもありますね？」
吉村は黙りこくったまま、腕を組んだ。それが水姫への挑発なような気がした。それならば突きつけてやる。水姫は手元を操作して、さらに一枚の画像を表示した。
「これを見てください」
水姫が目の前に示した画像をみて、動揺した人物が二人いた。
「水姫さん……それは」
「それは、鹿目辰巳の……」
「そうだよ明。私がどっちも持っていたの」
それは二つの相似形のペンダントだった。教会の鹿目辰巳の部屋にあったものと、シスター・バーバラの死体のそばに落ちていたもの。どちらも蓋が開かれて中の写真が見えた。

卵型の額に飾られた二枚の写真を比べてみると、明らかに同じ場所で撮られたものだと分かる。大きな方は、幼い頃の鹿目辰巳とその両親。小さい方は赤ん坊と両親だが、二人の母親はそれなりによく似ている。

「いかがですか吉村さん。あなたは鹿目辰巳と明のペンダントを見た時に、その類似に気が付いたはずです。そこであなたは悟ったのですね。鹿目辰巳は神岡明と血のつながった関係にあると」

吉村はやはり黙りこくったままだが、目は見開いている。よく見ると肩が微小に震えている。わずかな動きも再現できるこのテクノロジーには、我ながらほれぼれしそうだ。

「吉村さんの話を聞いたときから、あなたの言動には神岡家に対する憧憬の念のほかに、畏れのようなものを感じていました。吸血鬼の呪いの話なんかがその例でした。

鹿目辰巳が神岡家の人間だと気が付いたときのあなたは、大きなショックを受けたはずです。なぜなら、精神的に弱っているときに受け入れてくれた神岡家を好むあなたと、殺したいほどに憎んでいた鹿目辰巳が神岡家の人間だったことを知ったあなたで、感情の板挟みにされていたからです。そして、吸血鬼の呪いという理由を付けて神岡家をつぶす選択をした。神岡明にすべての罪を押し付けたのですね。彼女を牢獄に幽閉し、ダメージを与えることで」

沈黙が彼らを包み込んだ。水姫はじっと吉村の顔を、表情を見つめていた。その顔は、それだけで一つの生き物のように滑らかに変形し、心の機微をありありと示している。人間は常に連続性を持っている。不連続となりうるものは人間の意識くらいしかないのではないだろうか。歪みが大きくなる。その感情を推し量るに、吉村は泣きたい気持ちなのだろうと思う。その顔を水姫は汚らわしく感じる。殺人者の感情の変遷。なんて醜いのだろう。

「あなたが明を殺害しなかったのは、神岡明に対して親愛の情を抱いていたからですか？　明が小さい頃から神岡家に勤め、その成長を見守ってきたという自負からですか？　殺しはせずに、刑務所に幽閉するという中途半端な手段をとることで、罪を裁定したつもりですか？」

「水姫……」

明の声がする。分かっている。私は興奮しているのだろう。客観的にみて、今の自分は怒りの感情に包まれているように見えるに違いない。

落ち着くのだ。

深呼吸。

周りに聞こえないように、吸って吐く……。

すう……。

はあ……。

落ち着いた。

「いかがですか、吉村さん」澄んだ声が空間に響いた。

「……水姫くんの言う通りだ。僕は、明に親しみを抱いていた。心の中の葛藤が僕を支配した結果、明に罪を被せた。殺したくはないけれども、憎しみが生まれてしまう。だから明に罪を被せ、世俗から隔離することで自分の気持ちを抑えようとしたんだ。

……ただ、一つだけ言わせてほしい。これは、僕の精神的な安寧を求めるためにやったことだった。鹿目辰巳を殺害し、神岡明に罪を被せることで僕は彩の輝きの幹部にまでなった。ここ最近でやっ

と落ち着いてきたんだ。
どうしてこうなったのだろうね？　僕のこの指のせいなのか、吸血鬼の呪いのせいなのか、神が与えた罰なのか。それとも……神岡優子が僕を突き放したからなのか」
吉村は、水姫の隣でじっと話を聞いていた神岡優子を鋭く睨みつけた。
「優子さん、あなたが僕を解雇した時のあの赤い目を、僕は一生涯忘れることはないでしょう」
神岡優子は、椅子にもたれかかり、この会合の成り行きを静かに見守っていた。吉村の言葉を聞いても顔色一つ変えなかった。ゆったりとした仕草で居住まいを正し、吉村の方を振り向くと、わずかに口角を上げて言った。
「人間の世界に呪いなんて存在しないわ。起こったこと、感じたことはすべて、自分の心が生み出した虚像なの。あなたは自分の虚像に踊らされて、自分の中で完結すればいいところを、他者にまでその矛先を向けた。愚かなことをしました。あなたが吸血鬼ではないからよ」
「吸血鬼……」
吉村は震える手を目に持っていくと、黙り込んでしまった。
「吸血鬼は虚像を作りません。虚像に踊らされず、狂気を自分だけで完結させる。あなたはどう？」
神岡優子は、吉村の顔を射るように見つめた。その眼光は血のように赤く刃物のように鋭い。
「人間は年月を重ねるものです。その年月で成長する。あなたはその年月を経ることで吸血鬼になれるかしら？　見込みはある？」
「ぼ、僕は……」吉村は目から手を放した。ぐじぐじとしたなめくじのような目が神岡優子をとらえている。「だ、だめです……」
「あなたにはもう用はありません」
神岡優子は言い切ると、それきり無表情に戻ってしまった。
「黎さん」
ずっと黙っていた吉村早雪が言った。
「行きましょう」

二十四

その後、神岡明の罪状に関する議論が行われた末に、仮釈放が決定した。
水姫が提出した明のカレイドスコープの映像によって、明が鹿目辰巳を殺害したわけではないことが判明した。過剰防衛ではないということが誰の眼にも明らかとなったのだ。
母親の死体遺棄に関しては変わらずだった。
以上を加味した結果、本来の懲役は十年よりもずいぶん短くなるのだという。明が服役してすでに五年以上が経っていたため、比較的早めに仮釈放が許されることとなった。過去のドキュメントでみるよりも、司法は幾分かフレキシブルになったようだ、と水姫は思った。
そして吉村黎は、三宅京子を除く三件の殺人の容疑で逮捕された。
世界宗教『彩の輝き』の幹部が逮捕されたというのに、報道はなされなかった。彼は静かに司法の手にゆだねられた……。

連続的な振動音が鳴っていた。窓に映る空は冬眠しているみたいに曖昧で、薄く広がる雲には灰色の異方性。それを車内から見上げる体勢だ。暖房が点いているため、外の寒さとは無縁の箱が形成されている。そして背中にはふかふかのソファの感触がある。周期的な振動、柔らかな感触、暖かさ、すべてが心地よさの要因となって、水姫は強烈な眠気に襲われていた。

ここ数日間は激務だった。『ＨＡＬ』が正式にサービスを開始すると、全世界でインターネットのプロトコルが次々とＨＡＬに置き換わり、普及率は七割にまで登った。インターネットの情報拡散係数は、ＨＡＬの登場により、従来よりも数桁のオーダーで早くなった。他人をより近くに感じること、自分の記憶を記録として他者と共有することを容易にしたのだ。

ただ、今日に合わせて仕事が一区切りつくようにはした。水姫は今日も有給休暇を取得していた。その目的地に向かっているところである。

といっても、何も新鮮な景色などない。一度行ったことのある場所だからだ。観光地でもなんでもない、ただの無骨な建物である。

窓を下から見上げていても、赤いレンガの障壁は視界に映る。それだけ背が高いのだ。車が門を通り自動で水姫の認証を完了した。駐車場に止まったところでようやく起き上がり、身だしなみを整えて車を降りる。

頬を刺す肌寒さ。ドアを開けた瞬間に流れ込んできた冬の息吹が、水姫の眠気を吹き飛ばした。周囲は程よくエントロピーの低い殺風景さで、砂漠のような感じだ。よく映像であるような、落ち葉が風でかさかさと転がるさまを思い出させる。

水姫は車に寄りかかって、腕時計を見た。あと数分だ。

この腕時計は最近になって購入したものだ。レトロな趣味をもつ層に人気の時計店で作ってもらった。値段はそれなりにしたが、よく見ると滑らかなボディや金属の美しさが、気分を盛り上げてくれるような気がした。

刑務所敷地内の中心にそびえたつ庁舎から、白黒の服を着た人物が姿を見せる。水姫は車から身体を離し、小さく手を挙げて、それから左右に振った。相手も振り返した。

「あれ、水姫、久しぶりに眼鏡してるね」

「うん。たまにはいいかなと思って」

「高校生の頃を思い出すよ。逮捕されてからは、水姫の顔を全然見れなかったから」

「長かったね」

「大体六年だ」

今日が明の仮釈放の日だった。刑務所まで迎えに行く役目を水姫が賜った。水姫としてはぜひとも自分が、という心意気だったので、非常にありがたい話だった。

明を車の後部座席に乗り込ませてから、自分も乗り込んだ。車に目的地を入力して走らせた。慣性力が身体に掛かり、背中の圧力が増した。

「車に乗るのもすごく久しぶりだ」

「だよね」

ところで、水姫のつけている眼鏡は実は度の入っていない伊達メガネなのだった。普段通り、自動運転はＬＥＮＳによる操作で行っ

た。もはやＬＥＮＳの利便性には抗えない。というか、ＬＥＮＳの仕様を前提としたサービスや店舗が増えたことで、必然的に使わざるを得ないという場面も増えた。

「とりあえず、鹿目辰巳を殺害したのが明じゃない、ってことがわかってよかった」

「そうだね……」

明は考え込むように黙った。その横顔をみて、もしかしたら失言だったのかもしれない……と水姫は思った。明と二人でいるときの自分は、いつも脳内で数通りのシミュレーションをしている。水姫の何通りかの思考が算出する解がおおむね一致したパターンに従って行動しているつもりだが、それでも失敗してしまうのは、自分の論理が感情に引きずられているからだと思う。真の論理的な判断というのは難しい。そもそも思考とはふわふわとした気体のようなもので、そんな柔らかいものの上に、かちりかちりとした論理のメカニズムを乗せてもバランスを崩して倒れてしまうのが関の山なのだ。ようするに感情が不定形のものだという話だ。無菌室、透き通ったダイヤモンド、あるいは物理学の実験系のように極端に単純化された世界なら論理を感情に組み込むことができるかもしれない。しかし、例えば今私の横にいる神岡明という少女――明は同い年だから二十歳（はたち）を超えているが、心の純白さ、幽閉されていたことで副次的に浄化された精神を鑑みれば少女と言っても過言ではない――の、丸みを帯びた輪郭、筋の通った鼻、長いまつ毛という特徴が、自分からわずか数十センチメートル、あるいは数フィートの位置にあるという複雑で到底無視できないほどの影響を与えるこの系ならば、自己流の論理によって導かれた解がいかに無駄かということがありありと分かるだろう。世の中には多くの失言・失態と、そうでない言動・行動が存在している。関係という複雑なネットワークを築いてきた人間が後者すなわち、失態として見られない行動を生み出しているのは、針の孔にほつれかけた糸をウン十回連続で通すくらいの奇跡的な確率と言っても、過言ではないのではないだろうか、と水姫は思考していた。

腕時計を見たら五秒経っていた。

明は顔を上げて言った。

「鹿目辰巳は、家系図的にはいとこにあたる。僕は、幼い頃に一度だけ、彼にピアノを習ったことがあった。中学生一年生の二学期くらいのことさ……。包帯を巻いていた僕は、みんなの前に出るのになんだか気おくれして、だから、たしか、休み時間に廊下をぶらぶらしていたら、音楽室からピアノの音が聞こえてきたんだ。それが鹿目辰巳だったんだと思う。指の欠損をものともしない見事な演奏に感動したよ。それで、一時間だけピアノを教えてもらった。僕の演奏は鹿目辰巳のコピーみたいなものなんだ」

明の記憶の映像では、鹿目辰巳は明の顔を知らないようだった。それはそうだ。なぜなら明はその時、顔を包帯で隠していたからだ。

「でも、鹿目辰巳について詳しいことは、僕も知らない。彼の家族がなぜ僕の家族と関係を経っていたのかは、今でも不思議なんだ」

「今からわかるよ」

「え？」

車は寂れたロータリーを通った。放射状に延びる街道はすべてがシャッター街で、活気のカの字もなかった。いつ来ても死んだよう

な光景なのだが、せっかく明が帰ってきたのだからもっとにぎやかしてくれてもいいだろうと水姫は勝手な想像をした。
「ここは……懐かしい場所だ」
明は背筋を伸ばして窓に手を当てた。一階には喫茶店が、二階には事務所がある。
車両のエンジンが止まり、静まり返った。二人の衣擦れの音だけが目立って聞こえる。水姫がコートの裾を直して後部座席のドアを開けると、肌を刺すような寒気が足元に流れ込み、水姫のズボンを急激に冷やした。
外に出てドアを閉めると、それが合図であるかのように、頭上からはらりはらりと白い花弁が舞い降りてきた。
「おお、雪だ……」
吐いた息が雪を迎え入れるように拡散した。それを見て歩き出し、喫茶店の脇の階段を上る。この薄暗い黴臭さはいつもと変わらない。だが明にとっては数年ぶりの征路だ。はっきり言って、この階段を上った先に待ち構えるものは、深い失望の沼であるような気がしたのだ。
錆の付いた軽いドアを開けると、黴臭さは一層増した。でっぷりとした体形の老人が、和やかな顔で二人を出迎えた。
「おじいちゃん、久しぶり」
「おお、明くんや、久しぶりじゃのう」
喪仁田影像の仕事部屋は、数年前よりも殺風景になっている。それはこの老人が綺麗好きになったから、というわけではなく、老化で彼が車いすの助けを借りなければ移動がままならないという状況に陥っていたからだった。
「ただ足腰が弱っただけじゃ、糖尿病のせいではないよ」
それを聞いて明は安心したような表情を見せた。どうやら喪仁田老人の身体は、病魔に侵されるほどではないようだ。
「水姫、これからなにをするの？」
「吉村さんが起こした殺人事件の動機の理解を完全なものにしたいの」
「動機？　鹿目辰巳を見て、イライラしたっていう？」
「うん」
水姫は応接セットのソファに腰を下ろした。明はその隣に座り、喪仁田影像は車いすを操作してセットの横についた。
「吉村さんは、神岡家に対して憎しみを抱いていた。それは、彼が学生だったころ、交際していた女性が豹変してしまったからなの。その部分は明確な説明はなされていなかった。彼本人にとっても、納得できないまま事件が幕を下ろしてしまった。でも、今ならその原因がわかるんだよ」
「そうなんだ」明は目をキョトンとさせていた。「吉村と交際していたのは、鹿目辰巳の母親で鹿目雫さんだよ。僕の叔母にあたるわけだけど……」
「そう。その日の彼女は、なんだか普段と違ってイライラしているような、気が強いような感じがしたと吉村さんは言っていた。それを彼は、吸血鬼の呪いだ、と……。
そのあと、雫さんは別の男性と結婚して、鹿目辰巳を生んだ。吉村さんは、雫さんが浮気したのだと思ったんだと思う。だから自分が憎んだ鹿目雫と神岡家の両方に復讐するために殺人を犯した。
ところで明、明のお母さんは、鹿目雫さんとは似ている？」

「ううん、微妙なラインかな。双子だけど、一卵性よりはそんなに似てないくらいだよ」
「似るようにメイクをしたら？」
「それなら間違えるかもしれない……まさか」
明は目を見開き、驚愕した視線を周囲に向けた。
「そう。その日、神岡家を見に行こうという吉村さんと一緒にいたのは、明のお母さん、神岡澪（みお）さんだったの」
「じゃあ要するに、僕の母親が雫さんを装ったことが、時を経て吉村を殺人に駆り立ててしまったということなのか……」
「うん……」
「なんてことだ……」
明は頭を抱えた。
無理もない……。
暖房が付いているにも関わらず、芯から冷えるような青い沈黙が下りる。わずかに響くアナログ時計の音。規則的にリズムを刻む音が、かろうじて場を生きながらえさせていた。
「明くん。君は……」喪仁田影像の言葉は途切れた。何も言わない方が良いという彼の判断だろう。
「明、これは明の罪とは全く関係がないこと。母親の罪を明が背負い込む必要はないの。でも、明は知る義務がある」
水姫は顔を伏せたままの明に向かって言った。
「明が刑務所から出てくるタイミングで、どうしても知らせなくてはいけないと思った」
それが、明が刑務所から出てきて最初にすることだと思ったのだ。
水姫と影像は待った。長い長い時を感じた。
しばらくすると、明は顔を上げた。
「そう、そうだね」顔は感情の鏡だと思う。明の顔には深い失望が浮かんでいるが、その中に極小点を通過して上へ向かおうとする指向性を感じ取った。「これは僕自身には関係ないことだ。だけど、教えてくれてありがとう、水姫。僕の母はもう死んでしまったけど、やっぱりあの人は……いや、言わないでおく。僕のお母さんだものね」
水姫は明の目を見た。月が光を反射するように青白みを帯びている。
重い悲しみを抱えていることだろう、と水姫は予想する。だけど明は決して涙を流さないように、無理に明るい口調で言った。水姫はそれを上手に慰められるほど器用ではなかった。だから何も言わない方が良いのだ、おそらく。
「それよりさ、水姫、どうして鹿目雫と神岡澪の入れ替わりがわかったの？」
「ああ、それはね……」水姫は影像の方を見た。明もつられてそちらを見る。
「影像先生が教えてくれたの」
「おじいちゃんが？　どうやって？　前から知っていたの？」
喪仁田影像は小さい目を細く開き、髭をもそもそと動かして言った。
「ほっほ、まあ、儂の専門は浮気調査だからのぅ……」
その時、事務所の入口のドアが開けられた。

「こんちわです！　『エラリィ』でーす」
　水姫がそちらを見ると、久しぶりにあの金髪の姿があった。一階の喫茶店で、亡くなった喪仁田恵子の代わりにケーキを作っていた女性だ。手に持ったお盆には、わずかに雪結晶の乗ったラップが掛けられており、その中に沢山のケーキとコーヒーカップが並べられていた。
　明が『だれ？』という目線を向けてきた。
『おばあちゃんのお店を継いだ女の人』
『へえ、なんか軽そうだけど、あのケーキの味を再現できるのかなあ』
『安心して、味は保証するよ』
『それなら安心だ』
　というアイコンタクトをすると、明は微笑んだ。
「あなたが明さんですね、水姫さんから聞いていますよ！　大の親友で、エラリー・クイーンが好きなのだとか！」
「はい、そうです。初めまして、神岡明です」
　女性がケーキをテーブルに配り終えると、皿の数が二つ多いことに水姫は気が付いた。
「あれ？　これは？」
「ああ、それは……」
「明！　お帰りなさい！」溌剌とした声。
「まってたよぉ」こちらはおっとりとした声だ。
　後ろを振り向くと、入口から新たに二人が入ってきた。
「蘭、薫！」
　蘭は相変わらずの巻き毛を揺らしながら明に近づき、再会を祝した。薫は、ピンクの髪をタオルで拭きながらそれをにこやかに見つめていた。
　事務所が久々に賑わっている。
　人がいる。皆笑っている。
　胎内のように暖かい。
　暖かさのある世界。
　夢にみた世界。
　夢。
　夢？
　水姫はそこで予感のようなものを感じた。連続的な数値計算に突如現れる特異点のような何かを、はっきりとではないが感じ取った。しかしこれは、めまいを起こすような違和感ではなく、赤ん坊が初めて自分と他者の判別が可能になったような、成長的な気づきだ。
　独り、水姫は入口のドアを通り、階段へ出た。上気した頬は冷気に触れても冷める気配がない。一段下りるごとに脳が揺れ、希望が胸に満ち満ちてくる気がする。
　階段は残り三段。
　心臓が脈打つ。
　二段。
　これは吸血鬼の呪い？
　一段。
　それとも祝い？
　多幸感（ユーフォリア）。
　外は、脳だった。

暗闇の空行列。
星々の点要素。
二次元のひろがり。
三次元のつながり。
アナロジー。
そうか、これが世界の境界条件だったのか。
水姫は自分の心のメカニズムを理解した。
コーヒーに垂らしたミルクのように、白く黒く交じり合い、夢のようにぼんやりと広がる。隣に明の息吹を感じる。輪郭が無くなる。心だけになる。

　そして水姫は明と一体になった―――――――――
―――――――――――――――――閉幕（めでたし）。

二十五

『再生開始：明の逮捕から十年後』

「端的に言うと、『ＨＡＬ　２・０』の運用を辞めてほしいの」

「早雪さん、それは……」

二人の声が静まり返った店内に響いた。柔らかい日差しが差し込む。カフェの構造は計算されつくしており、どんな時期でも、日光によって客がまぶしく感じることはないように設計されている。

客は二人しかいなかった。一人はＫＮＣ・ＮＧＮＤ　Ｃ県支部の主任・秋野水姫。もう一人は『彩の輝き』幹部の妻・吉村早雪だ。

数年前にリリースされたインターネットプロトコル『ＨＡＬ』により、世界に情報革命が訪れた。人間同士の距離をぐっと近くするテクノロジーによって、ここ数年で新たな人間の可能性が模索・開拓されてきた。

開発の第一人者である秋野水姫は、今年で二十七歳になっていた。水姫のもとに吉村早雪からメッセージがあったのはつい先日である。久しぶりに会いましょう、という内容だった。その後二人は何度かメッセージをやり取りして、ビルの最上階の見晴らしのいい高級カフェを貸し切りにした。

真っ白いテーブルの上にはコーヒーカップが二つ並んでいる。端にはそれぞれ砂糖とミルクの入った二つの瓶。

水姫は熱い液体を少しだけ飲んで口を潤した。

「運用を辞めてほしい、というのはどういうことでしょうか？」

「まず確認。『ＨＡＬ　２・０』は人と人とのつながりを、現行のバージョンよりも格段に早くする技術。そうすることで情報の拡散はさらに早く確実になり、世界中どこにいても、情報の取得に差異はなくなる。そうよね？」

「おおむねその認識で間違いありません」水姫は軽くうなずいた。

「次に懸念事項。人間は意識のレベルによって肉体と精神が分離しているかのような現象を引き起こす。例えば、現実に限りなく近いグラフィックのレーシングゲームで、本当にその世界にいると錯覚するとか」早雪はコーヒーを口に含む。「この時、肉体と精神は集中力という分離帯によって隔たれ、自分が経験したことのない出来事を精神が実感として知っている、という現象が起こる。こういうことも起こりうるわけよね？」

水姫は数秒間言い淀んだ。確かにその点はある。というよりもむしろ、それが『ＨＡＬ　２・０』の狙いだった。

人間の情報伝達速度を向上させるためには、肉体という枷は邪魔だった。肉体があることによって、視覚や聴覚、触覚などと言った二次的な感覚器官が必要になるのだ。しかし、脳の電気信号をデジタル信号としてデバイスに受け渡し、他の端末と通信することができれば、それらの過程はすべていらなくなる。情報伝達の際に生じる情報欠損の割合を極限まで小さくすることができるのだ。

疑似的に肉体と精神を分離した状態を作り出し、意識だけの世界で情報のやり取りを可能にするのが『ＨＡＬ　２・０』だった。

「はい。それがこの技術の狙いですから」

「やっぱりそうなのね」

早雪は怪訝そうな顔をした。
「何か問題が？」
「私が探偵小説を好きなことは知っているでしょう」
「はい？　はい」
水姫は、急に何を言い出すのだろう、という顔をする。
「水姫さん、あなたも探偵小説を読んだことがあるのならわかるはず。探偵は謎があってこその探偵だと」
「わかりますよ。探偵とは謎を解明する人物のことを言うのですものね」カップを口に運ぶ。
「そして探偵という存在はこの世で絶対的なものなのよ。超越者たる探偵と、それに匹敵する犯人がいることでこの世界は保たれる。探偵と犯人の存在意義が無くなるということは、この世界から因果が消えることなの」早雪も再びコーヒーを飲む。
「はあ、少し大げさだとは思いますが、いったいそれとＨＡＬ２・０に何の関係があるのですか？」
「事件とは様々な情報の複合体（キマイラ）。人物、動機、方法、その他、現場の状況や調査によって得られる手がかり。謎を生み出し、散らばらせ、覆い隠すのが犯人の、明かし、つなげて、たどり着くのが探偵の役割。それが二人の存在理由（レゾン・デートル）なのね」
「待ってください。この話長くなりますか？」
「まだ半分くらいよ」
「そうですか……すみません。先にお手洗いへ……」
水姫は立ち上がって、早雪の方をちらりと見てから化粧室へと向かった。
数分後、水姫が席に戻ると、早雪は再び話を再開した。水姫はちらりと角砂糖の瓶をみた。先ほどと変わっていなかった。
「私がなぜ、このような発言をしているのか、意図がつかめないという顔をしているわね。教えてあげます。それは、ＨＡＬ　２・０が探偵の意義を消してしまうと考えているからなの」
「どういうことですか？」
「ＨＡＬ　２・０によって情報伝達が究極的に完璧なものになったら、犯罪なんて起こらない。起こったとしてもすぐ犯人がわかってしまう。現場を見るまでもないかもしれない。こうなると、もう誰も探偵を必要としなくなる。探偵という生き方が無意味なものになってしまうの」
「たしかに、そうですね」
「ええ、ＨＡＬ　２・０で人間は誰もが隣人になり、誰もが自分になる。無限が一に集約されるのよ」
「つまり探偵小説好きからすると、ＨＡＬ　２・０によってミステリ的な旨味が無くなってしまう、それでは面白くない、そういうことですか？」
「ええ」
水姫は窓の外をちらりと見た。それから早雪の方を見て言った。
「お言葉ですが、早雪先生、ＨＡＬ　２・０は探偵小説とは……」
その時、地面が細かく振動するのを感じた。それも一度だけではない。何度も何度も大きさのばらけた振動を感じ取る。ひときわ大きな揺れがあった。
「あれを見てください！」
早雪は、水姫が指さした方向を見た。窓ガラスの向こうに映っているのは、もうもうと煙を立ち上げる宮殿のような建物だ。

その建物は、普段は白を基調として、曲線美の綺麗な屋根の木造建築なのだ。それが今、燃え盛る炎に包まれ、もうもうと黒煙を立ち昇らせていた。
「『彩の輝き』の宮殿（パレス）が……」
「『彩革派』のテロ行為だわ！」
早雪が席を立ち、窓際に近づいて行った。高層ビルだから、見下ろせば町全体が見渡せる。
水姫は素早い手つきで、自分のカップを手に取り、早雪のカップと入れ替えた。向きも間違えないようにした。
「大丈夫ですか？」
水姫は早雪の隣に立ち、一緒に見下ろした。黒煙は一本ではない。建物の様々な部分から煙が出ていた。先ほどの振動は、建物の中で爆弾が爆発した振動だったのだ。
「吉村さんは……」
「あの建物にいるわ。今日は重役達が集まっていたはず。どうしよう……私」
「早雪さん、行ってあげてください」水姫は早雪の手を握りながらそう言った。目を見て、自分がすべきだと信じたことをした。
「水姫さん……ええ、この話はまた今度にしましょう」
「ええ」
早雪はテーブルに急ぎ足で戻り、慌てた様子で上着を着た。バッグを腕に掛け、水姫の方を向いた。
「今日はありがとう。また」
そう言って早雪はコーヒーカップを手に取った。残っていたコーヒーをすべて飲み干し、歩き出そうとした。
しかし、それは叶わなかった。
彼女はいきなり喉を押さえつけると、ひきつけを起こしたかのように身体をがくがくと震えさせ、その場に膝をついた。
「な……何を……」
苦悶の表情を浮かべて跪き、上目で水姫を睨みつける。身体は痙攣をおこし、手をついているのも苦しい様子だ。
「早雪先生、私はＨＡＬ　２・０を止めません。あなたは地獄で、吉村黎と一緒に、これからの新世界を見ていてください」
「毒……ね……」
早雪は口から唾液をだらだらと垂らし、じっと手をついていたが、やがて力尽き、その場に倒れこんだ。水姫は彼女の顔を覗き込んだ。白い美貌に憎悪が刻み込まれている。
「でもね先生、これはあなたが私にしようとしたことなんですよ。私に毒を盛るなんて、ひどいじゃないですか」
そして水姫は荷物をまとめると、カフェを出てエレベーターに乗り込んだ。ＬＥＮＳを操作して通話ソフトを起動し、オーナーを呼び出した。
「吉村早雪さんは、私の目の前で毒を飲み、自殺をしました」
『再生終了』

エピローグ

魂の眠る十字架の庭を歩いていた。海鳴りが聞こえる。鳥の鳴く

声も聞こえる。今はもうない電車の音さえも聞こえた。それでも静かな場所だ、と思う。白い木柵に囲まれた墓地である。入口から続く道は、不規則な形の石で敷き詰められている。周りはガーデニングされた芝と淡い花々。それを見て和やかな気分になった。道の途中の広場には升（ます）のような大きな箱があり、中心に噴水が設置され、水がちょろちょろと噴き出している。その周囲の木陰に立方体の椅子が点点としていた。憩いの場として利用されているとの触れ込みである。

このような霊園は、死者と生者どちらにも優しい土地だ。眠りは静かな方が良いし、死者との対峙も心穏やかな方が良いだろう。

死者と生者、どちらでもないものは？　例えば、吸血鬼に噛まれた不死者（アンデッド）とか……。夜な夜な、十字架の足元から土を掘り返して這い出てくるイメージが浮かんだ。

昔から空想するのが好きだった。入院がちな小中学生の頃は、病室でスケッチブックにいろんな画材で描いていた。国内外問わず画集を買ってもらったし、思いつくイメージを紙に描きつけていたっけな。

今となっては子供らしい空想だと思う。吸血鬼なんて存在しないし、不死者なんていうのもいない。でも、空想に身をゆだねるのは楽しいものだ。刑務所にいた時は毎晩、架空の世界を旅した。

シスター・バーバラが眠る墓を見た。柿色で、開かれた本のような立派なお墓。鹿目辰巳の育て親……、彼女の優しい目……。

バーバラの墓から二十メートルくらい間を開けて屹立する白い墓がある。私はその墓に歩くと、手を当て、目を閉じた。

十一年経って、ようやく冷静に事件を俯瞰することができた。ピアノを教えてくれた従兄弟の鹿目辰巳、優しかったシスター・バーバラ、そして無関係に殺された二人。殺したのは、大好きだった吉村黎だ。その上まさか、自分が殺人の罪を着せられるなんて。

でも刑務所にいる間に、これは罰なのだと受け入れることができた。私は、自分の母・神岡澪に呪いの言葉を吐き、自殺するための背中を押した。その後、井戸に落として蓋をし、見えないようにした。自分の罪をも隠すかのように……。

あの海岸で立ち向かってきた鹿目辰巳を、不本意ではあるもののナイフで刺してしまった。僕の言葉が、彼が発狂する引き金になったのかもしれない。

まぎれもなく、私は犯罪者だ。

言い逃れる気はない。

でも……。

でも……。

わがままを言うなら……。

幸せな夢が見てみたかった……。

二人の墓を後にして、見晴らしのいい場所を目指した。この霊園は海に面した丘の上にある。登っていけば街を一望できる場所があるのだ。歩くうちに息が切れてきた。昔から運動は得意ではない。マラソンの授業は苦痛で仕方がなかった。

緑の丘を登りきると切り立った崖であり、ベンチが設置されていた。崖の上から見下ろすと、ごつごつとした岩肌と青黒い海である。壁に波が打ち付け、しぶきが上がるのが遠目からでもわかった。

横に目をやると街が見渡せた。無機質な白い家が多いことがわか

る。最近では古い家屋は撤去され、白くて角ばった家が次第に増えてきている。その方が安いというのが理由らしい。しかしこうしてみると、無個性に並んだ白の立方体が、この霊園の乱立する十字架と同じように見えてくる、と言ったら不謹慎だろうか。

そんな想像をした自分を抑えて、わずかにそよぐ風にうっとりした。

「こんにちは。どうかなさったの？」

背後から声をかけられた。振り向くと背筋の伸びた、着物の若い女性を立っていた。端正な顔つきをしているが、どこか柔らかい印象のある女性だ。

「こんにちは」

「いい眺めでしょう」

「ええ、そうですね」

「ここにいると心が落ち着きます。年を取ると、なおさらそう感じます」

女性はゆったりと崖に近づいた。

「そうですね」私は迷った結果、言うことにした。「あなたはもしかして、若草朱音さんではないですか」

「あら、どうしてわかったのかしら……もしかして優子の親戚？」

女性は口を隠して笑った。やはりそうなのだ。この女性も、神岡優子と同じくアバターを身にまとって顕現しているのだ。

「初めまして、神岡明と言います。神岡優子は僕の曾祖母ですよ」

女性が一瞬にして目を開いた。

「あら……あなたが、優子の……。この度は……というべきなのかしら」

言葉に迷っている様子である。無理もない。神岡明は殺人犯として十年間、投獄されていたのだから。世間では伏せられているとは言え、神岡の関係者となれば噂程度のことは聞いているだろう。

「いいんです。とりあえずお座りください」私はベンチを指して言った。若草朱音はベンチにゆっくりと腰掛けた。

「ありがとう。

それでは、あなたがあの映像を作り上げたのね。拝見させていただきましたよ。あなたの実体験？」

「ありがとうございます。あの話は、半分は実際に起こった事件と同じですが、途中からは僕の妄想でつくりあげたものです」

「そうだったのね。最終的に丸く収まるエンドは私好みのものでしたよ。それに、途中に私の作品の名前も上げてくれたようですし」

「はい。僕も朱音さんの著作は読ませていただきましたから。あなたの作品の影響も多少は入っていますよ」

「ありがとう。雰囲気も似ているわ。全体的にはミステリなのだけれど、幻想文学のような、そんな印象も受けました。

映像の中では、水姫さんが事件の真犯人を指摘して、明さんは五年で釈放されました。でも、それは空想なのね？」

「はい。実際には吉村を犯人だと指摘することは出来ませんでした。吉村は捕まることなく、そのまま『彩の輝き』の幹部へと昇り詰めました」

「まあ……」若草朱音は心底驚いたようだ。「それじゃあ、あなたは……」

「はい。僕が釈放されたのはついこの間、一年前の事なんです。表向きには、僕は鹿目辰巳を故意に殺害した殺人犯です。シスター・

バーバラ殺しに関しては未解決ですが、彼女を殺した犯人として僕が最有力とされているようです」
「水姫さんは？　彼女は真相を知らないの？」
「いいえ、水姫は実際に真相にたどり着きました。ＨＡＬを使って僕の記憶を見ました。そこは映像と一緒です。ただ……」
言い淀んでしまう。嫌な記憶が口を通して溢れかえる。若草朱音は静かに聞いていた。
「事件から五年後の時点では、彼女は僕の左目にアクセスする術を持たなかったんです」
「カレイドスコープね」
「はい。ＨＡＬで相手の記憶に記録された映像を見るには、当然ながら相手の承認が必要です。承認を送るために、個別に設定されているアドレスを、彼女は知らなかった」
「ああ……納得しました。映像の中で、あなたのカレイドスコープにアクセスするためのナンバーは、あなたが描いた『脳』という絵画の裏に書かれていた。刑務所の面会の際に、あなたが口の形でアドレスの書かれた場所を教えていましたね。しかし実際は……」
「僕はそのアドレスを知りませんでした。だから、絵画の裏にナンバーが書かれているわけが無い。事件から五年が経ったタイミングでは、水姫は僕のカレイドスコープにはアクセスできなかったんです」
「そこが起点なのね。列車のレールを切替えるみたいに、意図的にあなたが追加した要素」
「事件は実際には起こりました。ＨＡＬも完成しました。しかし面会以降はすべて、僕の空想です。水姫が真相に達したのは一年前。僕が刑務所から出てきてすぐの事でした。十年間拘束されて、出てきたら水姫のオフィスに連れていかれ、記憶を解析されました」
「なんだか、嫌だったような物言いだわ」
「そう聞こえましたか？　……いや、実際にはそうなのかもしれません。僕はもっとゆっくり水姫とお話がしたかったですし、その後に起こったことを考えると……」
「どんなことが起こったの？」
しかし私は、あえて若草朱音の質問を後回しにした。
「水姫は僕の親友です。でも、僕は水姫のことは全く理解できませんでした。彼女の思考回路の論理は、僕と全く違うんです。僕がわかることといえば、非常に頭がいいことと、時々思考が暴走してしまうことくらいです」
「意外だわ。映像の中ではお互いのことを理解し合っているような印象を受けたのだけれど」
「そんなことはないですよ。一般論にはなりますが、いくら仲が良くても相手のことを理解するのは非常に難しいことです」
「そうね、私もそれには賛成します」
「神岡優子はどんな人物でしたか？」
私は若草朱音に尋ねた。
「優子は……その名の通り優しかったわ。屋敷で火事があった時なんて、少女のように泣き叫んでいたもの。あの頃の私は、まさか彼女がここまで神岡を大きくするなんて思わなかった」
「よく知っていると思っている人物でも、全然わからないですよ。人の顔はいくつもありますからね。僕は、曾祖母が泣き叫んでいるところなんて想像ができませんよ」

若草朱音はくすくすと笑った。つられて私の頬も持ち上がった。
「神岡家の歴史は火事によって終わった、私はそう思ったわ。でもそんなことはなかった。優子は、自分の才覚を存分に発揮して人を動かし、急速に神岡グループを発展させた」
「水姫は明らかにその系譜です。血はつながっていないけれど、二人と接した僕からすれば、二人のあり方は似ています。それは……」
「吸血鬼？」
私はハッとして朱音を見た。
その言葉は……。
そうか、この女性も同じなのか……。
「はい……でも、なぜですか」
「私もそうなのよ」
そういって朱音は右手の袖をまくり、腕を見せた。
手首の横に走る線。
「私は、優子に血を飲ませました。私は優子に従属している。私や水姫さんは、優子から吸血鬼を受け継いだに過ぎない。優子こそが真の吸血鬼だわ。
勘違いしないでほしいのは、吸血鬼になるには素質がないといけないの。それが彼女の言う、一流ということよ」
「確かに水姫の能力は一流でした……。でも、水姫は道を間違えました。
朱音さん。あなたは水姫の身にどんなことが起こったのか、とお尋ねになりましたね。お答えします。秋野水姫は、死にました」
「どうして？」
「喪仁田探偵事務所の階段から落ちて死んだんです。僕が釈放されたあと、喪仁田影像先生や、その孫の蘭、友達の雨木薫などを集めて、簡単なパーティを行ったんです。
水姫もそれに参加していました。しかしどういうわけか、途中で水姫は抜け出して、事務所の外に出ようとしました。階段を降りようとして足を滑らせたのでしょうね。あの日は雪が降っていましたから……。事務所にいた僕たちにも、水姫が落ちた時の振動は響いてきました。それで、みんなして階段を見てみたら、水姫が血を流して倒れていたのです。
僕は、水姫が事務所を出て行くところをちらりと見ていました。その時の彼女は、どこか浮ついたような感じでした。なんだか夢を見ているような足取りです……。結局、なぜ彼女が外に出ようとしたのかは、僕にはわかりませんでした」
「かわいそうだわ」
「水姫は即死でした。首が折れていましたから、素人目にもそれがわかりました。僕はその時、すさまじい喪失感に襲われました。全身の穴から体液が流れ出てしまうような衝動にかられました。親友でしたからね」
「そうなのね……話してくれてありがとう。あの映像の最後のシーンのようだわ」
「人生とは旅のようなものだと思います。もしも自分の旅の終わりが、涙の出るほど神秘的なものだとしたら、どんなにひどい人生でも救いになるのではないか、と思ってあのラストにしました。
しかし僕は、彼女が死んだのは、因果応報なのではないかとも思うんです」

「それはどういうこと？」
「水姫は……」深呼吸をして気持ちをむりやりリセットした。「水姫は『彩革派』という名のテロ集団に所属していたんです。『彩の輝き』はご存知ですね？　Ｓ県を中心に広がった世界宗教です。『彩の輝き』に反対する過激派集団を『彩革派』というのです。
　一年前、吉村黎が犯人だと睨んだ水姫は、『彩革派』に属し、吉村を殺害する機会を探っていました。吉村黎は『彩の輝き』の重役になっていましたからね。
　そんな中、吉村黎の妻であり、事件関係者である吉村早雪が、『ＨＡＬ　２・０』に対する不平を言うために、個人的に水姫とコンタクトを取りました。早雪先生は、水姫が『彩革派』の一員だとは知りませんでした。そこで、水姫はほかのメンバーとテロを計画しました。
　二人の会合の日、『彩革派』は『彩の輝き』の宮殿を爆破しました。その騒ぎに乗じて水姫は吉村早雪を殺害したのです。
　結局、吉村夫婦は亡くなりました。このことは神岡グループと『彩の輝き』の両団体が協力して揉み消しました」
「水姫さんは二人を殺害したのね。だから因果応報だと」
「はい……」
「それは、あなたにとってわだかまりになっている？」
「わかりません」
　鳥が高い声で鳴いていた。
「なっているわ。だって、そうじゃないとあの映像を作れないでしょう」
「そう、なのでしょうね。僕は、あまりに悲惨だと思いました」
　親友が知り合いを二人殺した。その親友も死んだ。手元には何が残っただろうか？
　水姫が作った新しい社会のインフラは、確実に世の中を変えた。
　水姫が残したものはあまりにも巨大のものだ。
　しかし。
　私のもとに残ったものは、
　虚しさだけだ。
　なら、
　水姫の残したテクノロジーで都合のいい世界を作ろうと思った。
　せめて、いい夢を見させてほしかった。
「僕は、水姫が得意だった数値シミュレーションを最大限生かすことにしました。実際に起こった出来事の記録を元に、新しい世界を創造しました。具体的には水姫が僕のアドレスを発見するところまでの記録を元にして、少しでもマシな結末になるように世界を再構成したのです。それがあの映像です」
「そうすることで、なにか変わりましたか？」
「……わかりません。自分の気が少し楽になったのかも」
「それでいいのです」
　若草朱音は立ち上がった。
「神岡明さん、あなたは吸血鬼ではありませんね」
「はい」
「それでいいのですよ」
　それでいいのか。
　先行きは不透明だ。

「自分を信じなさい」
視界が堰を切ったように水で濡れた。私は泣いているのか……。後からじわじわと感情が追い付いてきた。
「私は吸血鬼ですからね、一般論しか言えないけれど」
案外それが一番大事なのかもしれませんね――。
彼女はそう言った。
「少しでも良くなるよう見極めなさい。知ることは見ることですよ」
「はい」
その時、背後から声がした。よく響く声で、誰のものかすぐにわかった。
「朱音、お待たせ。……あら、明じゃない」
「おばあ様」
振り向くと、背が高くほんのりと赤い目を有した端正な女性がいた。神岡優子はきょとんとした表情でこちらを見ていた。
「朱音、明と知り合いだったの？」
「いいえ、さっきたまたま知り合っただけですよ」
「そう。面白いでしょう。うちの子」
「ええ、面白いお話を聞かせてくれました」
「自慢の曾孫よ。それじゃあ、行きましょうか」
優子は朱音のそばに歩き、彼女の手を取った。
朱音が立ちあがると、二人は見晴らしのいい崖の前に立った。私はその後ろ姿に衝動的に声をかけた。
「あの、ありがとうございました」
「いいえ」
若草朱音はこちらを一瞥すると、夕日の沈む水平線に対峙した。
「明」
優子はこちらを見ないで言った。
「この世に吸血鬼はいません。ここは人の世です。居るとすれば、人の心の中にだけだわ」
次の瞬間、二人は消えていた。わずか一瞬の瞬きによって、そこにいたはずなのに、なんの痕跡もなしに去っていった。
もしかしたら、最初から居なかったのかもしれない。残ったものは何も無かった。ただ自分が丘の上に立ち、群青になりゆく夜のキャンバスを見ているという事実があるだけだった。
いや、そんな事実さえないのかもしれない。思考している自分が作り出した幻を見ているだけなのかも分からない。
存在しないものはないという確信だけはある。存在しないのではない。連綿とした現象の渦の摩擦で生まれた火花を、そう呼んでいるだけだ。
夜空に星が見えている。人類が生まれた時と、見える姿は変わらないだろう。人の意志とは無関係に存在している。しかし昔の人達は、星の連なりに意味を与え、さらには人格を与えた。彼らは原初の信仰の対象となり、人々の生活の指針にされてきた。そして今でも受け継がれている。お互いが無関係なはずの星々は、人の意思によって有機的なつながりを与えられたのだ。そんなものに意味なんてないというのに……。
でも、
昔の人も空想が好きだったのかもしれない。
小難しいことを考える癖は昔と変わっていなかった、と自覚的に

なってみる。そしてそんな自分のことが、今は少し好きだ。
私は意味の無い夕闇に背を向けて、今日の夕飯のことを考えた。